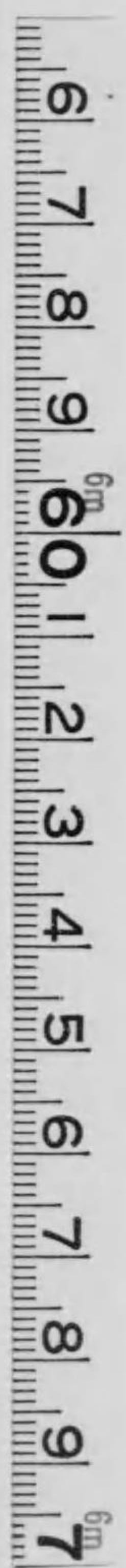


590
N93



始



356-206
590
N93



野口保興著

家事の新研究

東京

目黒書店
成美堂合梓

大正
5. 7. 6
内交

家事の新研究

例言

一本書は家庭經濟學の要項に就きて研究したる事實に關する記録の概要なり。家庭の經營濟度に資すべき事項を科學的に研究して斯學の本義を明にし、範圍を限定し、原則を確立すること肝要なり。而も本書は家庭經濟學としては未定稿に屬し、項目に就きて遺漏少なからず、記述に就きて意を盡さざるもの多かるべし。更に添削を加へ、改竄を施し以て大成に到らんと期す。

一本書は家庭の本義と家庭の實務との二篇より成り。本義篇に於ては家庭の性質組織に關する梗概を述べ併はせて社會

國家に對する交渉の一端を知らしめんと圖り。實務篇に於ては食物住宅衣服及び家具什器に關する事項に就きて記述を試みたり。子女の教育・病者の看護・家庭の管理・家計の整理等に就きては別冊に於て講究の結果を報ぜんとす。

一本書に細大二様の文字を用ひたるは事實の輕重を明にせんが爲なり。

一本書の著作に關する参考用書に就きて重要なものを掲ぐれば左の如し。

Le Livre du Foyer	Augusta Moll-Weiss.
La Future Ménagère	Ernestine Wirth.
Principes d'Economie politique	Charles Gide.
Précis de Sociologie	G. Palanta.

La Vie Sociale	Ernest Van Bruyssel
Les Lois Sociales	G. Tarde
Le Sens et la Valeur de la Vie	Rudolf Eucken.
La Vie Simple	C. Wagner.
La Vie Complicquée	Fernand Nicoloi.
Nouvelle Education de la Femme	D'adhémar.
La Question Féministe	P. Augustin Rösler.
La Terre et l'Homme	Alfred Maury.
Ecole des Cuisinières	Urbain-Dubois.
Nouveau Larousse Illustré	Larousse et Cie.
Dictionnaire de la Vie Pratique	G. Belèze.
Les Vraies Recettes de la Maison	Yvonne Provost.

家事の新研究 本義篇 實務篇 目次

緒言

第一篇 家庭の本義

人生……………七 人生の特状……………七 要求……………三
 效能……………元 價格……………三 生活……………四

第一章 家庭

第一節 夫妻

結婚……………三 戀愛……………九 趣味……………八

第二節 親子

親權……………九 兄弟……………三 繼母……………五
 養子……………六

第三節 單家庭及び複家庭

嫁姑……………二〇 小姑……………一〇一 養老……………九六

目次

家風.....一〇六

第二章 社會.....一〇九

第一節 社會の概要.....一一〇

第二節 社會の特狀.....一一〇

個人と社會.....一一〇

文明.....一一三

流行.....一一三

常識.....一一三

信仰.....一一三

迷信.....一一四

第三章 國家.....一一六

帝國.....一一七

第二篇 家庭の實務.....一七五

第一章 食物.....一七六

第一節 食糧.....一八五

第二節 食糧の變更.....一九六

第三節 日常食品.....二〇六

〔一〕植物性食品.....二〇六

穀類.....二〇六 野菜類.....二一五 菌類.....二二二
海藻類.....二二〇 果實類.....二二三

〔二〕動物性食品.....二二一

魚類.....二二二 甲殻類.....二二三 軟蟲類.....二二四
爬蟲兩棲類.....二二五 鳥類.....二二六 獸類.....二二七

第四節 製造食品.....二七五

植物性食品.....二七五

動物性食品.....二七五

貯藏食品.....二八〇

第五節 調味品.....三〇三

鹹味料.....三〇三

酸味料.....三〇七

甘味料.....三〇九

油脂品.....三一一

辛香料.....三二五

第六節 飲料.....三二八

飲料水.....三二九

清涼飲料.....三三三

高温飲料.....三三四

嗜好飲料.....三三六

第七節 食物の調理.....三三六

調味.....三三六

調理品.....三三七

食事……………三五六

 第八節 食事献立……………三五六

 第九節 食品の貯藏……………三六五

第二章 住宅……………三六九

 居構の進化……………三六〇

 第一節 家屋……………三六九

 方位……………三六〇

 構造……………三六一

 材料……………三六九

 間取……………三六三

 雑作……………三六三

 敷物……………三六九

^①建具……………三六六

 戸締……………三六六

 第二節 外圍……………四二九

 門戸……………四三〇

 圍障……………四三一

 第三節 庭園……………四三五

 第四節 燈火煖房……………四四五

 燈火……………四四五

 煖房……………四四五

 燃料……………四四五

 第五節 給水排水……………四五九

給水……………四六四

○第六節 掃除……………四六六

第三章 衣服……………四六八

裸體……………四七〇

第一節 衣服の調製……………四八三

材料……………四八三

色彩……………四八三

形状……………四八三

裁縫の勢威……………四八三

衣服の改良……………四八三

第二節 織物……………五二七

〔一〕織物の要素……………五二八

纖維……………五二八

絲拵……………五二八

刺繡……………五二八

織方……………五二八

〔二〕織物の種類……………五四一

絹織類……………五四一

毛織類……………五五五

綿織類……………五五八

麻織類……………五五八

家事の新研究

六

綿布の威力

五九

織物の鑑別

五九

第三節 服装

五九

男裝

五九

各種衣裳の特質

五九〇

第四節 洋装

五九〇

第五節 衣服附屬品

五九〇

第六節 各種附屬品

五九〇

副着品

五九

履物類

五九五

第七節 携帶品

五九五

第八節 夜具類

五九五

第九節 衣服の整理保存

五九五

第四章 家具什器

五九五

第一節 器具の配置

五九五

第二節 器具の記載

五九五

第三節 器物の特質

五九五

桶類

五九

指物

五九

唐木物

五九

漆器

五九

金屬器

五九

陶磁器

五九

硝子器

五九

目次終

目次

七

家事の新研究

本義篇
實務篇

挿圖目次

第一圖	肉の寄生蟲 殺菌器 素焼濾器	三九間
第二圖	都會邸宅(二階建)	三六間
第三圖	市街住宅(三階建)	三六間
第四圖	都會住宅(平屋建) 郊外住宅(平屋建)	四〇間
第五圖	郊外住宅(二階建)	四二間
第六圖	流しとサイフォン(曲管)	四三間
第七圖	各種レロス	四四間
第八圖	洋服の始末方	四五間

家事の新研究

野口保興 著



緒言

家事は女子の天職に屬する最要の任務なり。家事は女子の向上心を促す最良の事業なり。家事科は女子教科の中堅にして而も實力の伴はざるを憂ふるものあり。家事科は女子教科の樞軸にして而も活用振はずと嘆ずるものあり。要目の備はらざるに因るか、授業の整はざるに基づくか、速に是非を斷定すること能はず。家庭教育の範圍を侵して常識に悖るの事實なきや、職業教育の流派に捉はれて徒に過勞するの弊害なきや、輒缺點を指摘すること能はず。是は家事の研究に微力を致し、家事科の改善に聊なり

緒言

とも資するあらんと期する所以なりとす。

家庭の意義を認識することなく、家庭に對する社會の影響、國家の交渉を了知することなくして家事の實際に汲々たるも良好の効果を收むること困難なるべし。家庭の經濟を科學的に研究して家事の本義を明にし、範圍を確立し、原則を提げて實踐に當らば、家庭の繁榮策は以て講ずべく、家事の振興策は以て案ずべし。現時に於ける吾人の生存状態には頗る煩雜なるものあり、齊家の要義は古今に通じて淪らざるも、齊家の實際は推移して止むことなし、適應の道を講じて繁を去り簡に就くの利に據らざるべからず。

家を齊ふるは一家の幸福なる存在を實現するにあり、國を治むるは一國の隆昌なる存在を保持するにあり。限りある資力に據りて出來得る限りの福利を收め以て家庭の繁榮又は國家の富強を圖らんと欲せば、家庭又は國家の本義を明にし、之が要素の發展に勵み、調和に努めざるべからず。是家庭又は國家の爲に經濟の道を探究するの必要ある所以なり。抑經濟の道たるや、家庭の經營、國家の經綸を行ひ以て家庭、國家をして進境に濟渡せし

めんとする順序方法に外ならず。斯の如くにして經濟は事を圖りて其の事を成就するの義に當り、之が原理原則を講究するは經濟學の主眼たり。

而して西人の唱ふる所の「エコノミー」(economie)は太古に於いてギリシアのゼノフオン(Xenophon)が始めて用ひたる語にして、*oikia*(家) *nomos*(法)即ち家の控を意味し、*οικονομία*が家庭經濟學(economic domestic)に關係せしが、近世に於ける經濟學(economic politique)は社會生活より見たる人類間の關係にして、物質的要求に満足を與ふべきものを研究するを以て目的とし、經濟學の社會に對する恰、生理學が人體に對するが如き關係は存するなり。然るに現時にありては經濟學は二派に分かれ、其の一派は純正經濟學と云ひ、專ら群生せる人類の自然的關係を解明するに努め、他の一派は社會經濟學(economic sociale)と云ひ、組合法律・制度等の下にありて生存状態を改善せんと欲する人類の任意的關係を研究して然あるべき所と然すべき事を探求するにあり。尙ほ一言を要するは應用經濟學と社會經濟學との間に於ける差異にして前者は一國の財貨を増殖する最良の方法を案出せんと勵み、後者は主として人類に最大

家庭經濟學

幸福を興へんと努むるなり。
 家庭經濟學は一家の特有に係る利源を適當に處理する方法を研究する所の科學なり。家庭經濟學を以て家庭の物質的生活に關する科學なりとするは簡明にして理由も具はらざるに非ざるも、物質的生活に關する實利を處理する手段は高尚なる心理的建築の地下工事に外ならざるが故に家庭經濟學を以て家庭の幸福繁榮に關する科學なりと認むるに非理ならず。然れども近代に於ける家庭生活は豫算せる費額の支配を受くること常例たるに臻れるを忘るべからず、蓋し量と質との一定せる財貨に對する使用の方法に變差多く、同額の收入に對する費途の狀態様々なるを以て最善最良の按排を盡して費額を決定し、之に依りて最多最高の福利を享受せんと努むること當然なり。是家庭が其の生命を完うし其の繁榮を圖らん爲には家庭經濟學の指導に俟たざるべからざる所以にして斯學を講究する必要は實に茲に存するなり。

限りある資力に據りて出來得る限り多くの福利を收め以て家庭の繁榮

を助長し、率いて社會の安寧國家の富強に對し、幾分なりとも貢獻する所あらんと欲せば身體の營養を充分にし、健康を保全し、有理なる衣服を用ひ、適當なる居住を構へ、清潔の支持に努めて各自の活力を振張すると共に女子を教育し、老人を孝養し、天授の積成性に基づきて適應の道を講じ、家庭に團樂の樂感化の徳を現出せんと勵むのみならず、深く秩序と節約とに意を留め、齊家の本義に悖らざるは勿論社會の公益に盡し、治國の趣旨に副ふこと肝要なりとす。

家事科

女子の高等普通教育に關する一教科目たる家事科は一家の收入と支出との均衡を破ることなく、適當に家務を處理するに必要にして秩序清潔趣味の實現に資すべき事項を授くるを目的とす。されば家庭經濟學と家事科とは均しく家庭の繁榮策を講ずるも、程度を異にするの外、範圍にも廣狹の別あり。而して家事科は女子に對する學校教育の要部として食物衣服住居の實態を明にし、養老育兒看護の特質を説き、家庭の管理家計の整理に就きて梗概を知らしむるに止まらず。洒掃洗濯調理等の實習に勵み、殊に

裁縫手藝作法等の各科に關し、連絡を保たんと努むること大に可なり、適切なる知識技能を授くるを主とし、家庭の程度及女子の資性を斟酌して便宜家事の實習に従はしむること最可なり。然るに學校萬能主義の弊風に染まれる結果にや將又差別主義 (Differentiation) に偏して全成主義 (Integration) を顧みるに違あらざるが爲にや、或は當然家庭教育に屬すべき結婚妊娠等に關する心得産前産後の始末使所の構造等に就きて詳述を試み、或は染色機織手工等を課して徒に負擔の重きに苦ましむるのみならず、裁縫手藝并に洗濯磨物調理等の實習に於て動もすれば職業式に流るるの傾向なしとせず。是、家庭に教育思想の缺乏せるに基づくべきも亦學校教育が形式を過重視するの致す所と認むべき理由なしとせず。

茲に研究事項を記するに當り、家庭の生存状態に關するものを家庭の本義なる題號の下に抄録し、之が支持に屬する材料方法等を家庭の實際として詳述する所あらんとす。

第一篇 家庭の本義

星辰界
礦物界
動物界

人生 人は萬物の靈長なりとは古來傳唱する所なれども、其の意義漠として捕捉し難し。抑萬物とは宇宙に存する物體の總稱なりや、靈とは優れて長たるに足れりと爲すにありや、萬物とは我が世界に存在する物體を概稱するに過ぎざるにや、又天界に於ける總べての物體をも包括せしむるにや、人とは廣義に依りて劣等の野蠻人乃至優級の開化民を合はせ稱するにや、若しくは卓絶拔群文化の進みたるものを特稱するの狭意に依るべきにや。蓋し宇宙に存在する物體に就きて引力に基づける運行のみを認めんか、天體ありて星辰界を爲し、引力に加ふるにエーテル的動力を以てするも、物理的并に化學的の現象に限定せんか、礦物を得て礦物界を作り、之を前者に合はせて無機領とは唱ふるなり。而して特殊の機構を備へ周圍に於ける物質を攝取吸収して自己の生存的消耗を償ふの力ありとせんか、生物現はれ、有機領は劃せらる、副次的なるも自動力の有無に據らんか、動物界と植

植物界

人類界

生命

物界とを得るに臻るなり。然るに人類に就きて身體機關の整備を認むるに止まらば二手直立的の高等動物なりと判定するの外なきも、吾人に許容するに改良進歩の根源たる積成力の存在を以てせんか能力活動の程度顯然として明に、能力進化の情況整然として備はり、植物動物の二界の外に人類界として一界を特立せしむるに無理困難はなかるべしと信ずるなり。抑生物の生存と云ひ生命と稱するものは生物に具備せる各種機關の合成的機能にして、動物植物にありては此の機能の統合此の作用の總和は進化の程度を表示する種類に依りて定限せらるるも、人類に關しては機構に著しき變化なきに拘らず、能力には漸次の傳承を経て積成の實を挙げたるが故に發生の始原より現時に至るまでに始源の人より起りて開化の民に達せしが如き進歩發達を見たるなり。

生命に關する學説は頗る繁多にして枚舉に遑あらざるも、大別して四派と爲すことを得、其の心理派は形而上の原理に依りて生命を解明せんとするものにして精神説 (animatism)・活力説 (vitalism)・新活力説 (neovitalism) 等あり、其の進化派は原子の發達に基づく生命論を主張して射

人類の地位

精論者 (spiritualists)・卵種論者 (ovists) 等を出だせり、其の微生派は生命を以て特殊の原生子活素の性質に據れりと爲すも所説様々にして數多の岐論を興へたり、其の機構派は生命體形各部の特質特性を以て細胞・纖維・組織・機關等の間に存する相互的活動の結果なりと主張せり。

動物學上に於ける人類の地位に關する學説未だ定まらざるも、要するに身體上より觀ずれば人類の爲に特に二手類として一目を設くるに及ばずと爲すは或は至當ならんか。然れども人類を其の精神的方面より觀察し、其の能力の活動に據れる各般の現象に就きて調査する所あらんか、人類を以て一界と爲すに足るの要素を發見し得べし。蓋し現存の人類に就きて心理的研究を行ふときは智力の發達一ならず、技能様々にして階の上下の間には著しき懸隔ありて、最高の文明人と最低の野蠻人との間には別目に限らず、別綱を置き、別界を設くるに足る底の差異あるは明瞭なる事實とす。或は道義信仰を以て吾人の特有性なりと主張し、或は道理・社交・美妙等は吾人專有の能力なりと唱ふるも、此等の特性專能なるものは所謂智人、即ち知識技能が或程度以上に達したる人類一局部に限り始めて認容すべきものなる

かを疑はしむ。現存の野蠻人半開者等に據りて推究する所あらんか、道理は利害損得に起り、信仰は恩惠恐怖に因りて、道義は自衛の要求、美妙は快感の記念に過ぎずと斷ずるに足るものあらん。日々の食物を得るに汲々として小地域に醒醒するものと、汽車汽船の便、電信電話の利を提げて世界を往來し、坐して百貨の集散を支配するものとを比較し、赤裸々にして男女の雜居するを厭ふの念なきものと善美の粹に成れる禮装を調へて交際場裡に立つものとの對照し、數を算して僅に四五に及ぶに過ぎざるものあり、微積の計算を遂げ幾何の蘊奥を究めんとするものあり、喃喃として小兒の如く少數の單音語に依りて低度の意想を傳ふるのみなるものあり、豐富の言語を繰りて自在に意を達し優美なる美文に依りて高尚なる思想を表出するものあり、林中若しくは谿間に點在して放縱自適、部落を組織せず、恰、野獸野禽の如く生存するものあり、憲法布かれ、教育の美、自治の妙を擧げ、軍政の嚴格、財政の安固を保障する等、百般の制度の備はるものあり。斯の如く文野の間に存する懸隔は猴類の優者と人類の劣者、原人との間に於ける差異に比し遙に大なること明なり。

積成力

而して此の偉大なる懸隔をして實現せしめたるものを何と爲す、能力の活動、活用に對して變遷進化を促したる積成力なりと思考せらるるなり。蓋し生物中には機關機能の改良、即ち活力的進化に依りて發達したるものあり、能力活動の改良、即ち活用的進化に依りて發達したるものあり。甲者は植物及動物に於て觀る所にして周圍の事情は機能を刺戟し、機關の構造に變改を來たして變態進化を實現せしめし爲、其の結果として博物學上に於ける所謂種類變種を夥しく生産し、階の上下に驚くべき懸隔あるを致せり。乙者は人類に限り存する所にして、其の發生當時に於ける原人としては最高等の動物たるに過ぎざりしも、彼が固有特有する積成力に基づきて能力の活用に改良を施し發展に努めて進化の實を擧げたるが爲、其の結果として文化の上より觀たる所謂野蠻人と開化者との間に幾多の階級は出現するに臻りたるなり。

活力的進化

活力的進化 進化論は一に變態説と云ふ、生物學上の一學說にして適應

の勢力の下に動物及び植物が機構を改造し、變態を遂ぐるが故に新種を發生するに至ると爲すにあり、從つて現存の生物は悉く單一若しくは少數の原種より間斷なき變移に基づき漸次の變化を發生したるものなりと爲すなり。斯の如き變態説は進化の理を生物に適用せしものにして其の由來甚だ古く、幾多の論議研究を経て今日に至りたり。現時の進化論は機構を以て二勢力の影響を受くるものと認めんとす。其一は遺傳にして特性を常態に維持し、之を静止の位置に固定せしめんとせり、其の二は適應にして周圍に於ける事情との關係上より既存の性質に異動を促催し變化を發生せしめんとせり。而して此等の異動變化に關する素因には基礎的にして直接するものと間接なるものとの二派あり、又副次的なるものに遺傳自然淘汰兩性淘汰生理淘汰等あり。然るに機構の進化が或程度に達したる後は變態は各方面に向ひて同時に行はれたるが故に高等生物に關する變態の發生は案外に速にして現存の階級には直系的若しくは傍系的なるありて某高等形態に達する系譜的發達に直接せざる幾多の階級は存するあるなり。

人類の系譜的發達に就きて考ふるに原生物より環蟲類に達する際にも海綿動物腔腸動物扁蟲類等に關係なく直進して脊椎動物と成るや、節足動物軟體動物棘皮動物尾索動物等を經過せず陸動物の元祖たる兩接類は下等の魚類より出でしものなれば硬骨類に携らざるのみならず、爬蟲類鳥類を措きて哺乳類に入りしも、齧齒類食肉類食蟲類等の發生を傍觀しつつ原人に到達したるものにして或は現在の猴類にも緣故の深からざるやに思はるるなり、蓋し原人は局部的機關の發展に着目せずして進化的能力の下に活用さるべき形體を具備せんとして進化したる結果なればなり。

活用的進化

活○的○進○化 活力的進化が優境に達したる結果として現はれたる原人(Homo primigenius)より漸次の變遷進化を重ねて智人(Homo sapiens)に達したる情況に就きて考察するに、形貌上の差異には顯著なるものなきを認むべし、原人は進化上の成功者にして、直立の姿勢は威嚴を保ち展望に適し、發達せる上肢は取捨攻防に便し、裸體は被覆の必要を感じしめしも、反つて寒暑風雨を凌ぐ方法の案出に利し、雜食に堪ゆるは生存上に利益多しとす。而かも原人と智人との體形を比較せんに、後者の頭骨・顔面・頸部等に多少の改善あるを認むるに過ぎず、機能は機關と相俟ちて發達すべきものなりとせんか、

機關に顯著なる變化の現はれざる以上は機能に偉大なる發展を認むべき筈なく、從つて動物的活力に多少の増加ありたりとするも到底原人と智人との間に存する差異を解明するに足らざるべし。

動物の本能は種類に依りて優劣あるも、亦種類相應の定限あるは明瞭なりとす、人類に於けるも動物として定限の存する本能を備ふるに過ぎざらんか、**案外**の**智惠**者たる原人は生れながらに發火の妙、用水の道、衣服棲舎の便、弓矢刀劍の利を知り、吾人は彼等の遺法を默守するに止まるべきなり。

惟ふに人類の能力は**進化的本能**なるが故に現實を達觀して理想を建設し、實在的劣惡を捨てて理想的優良を取らんとは努むるなり。從つて得れば從つて望み、所謂隨を得て蜀を望むは吾人の本性にして吾人の發展進歩の原因は實に茲に存す。吾人には幸にも道理、自由、羞恥、徳想、美想等のあるあり、吾人は社交、摸倣等の特質を有し、談話、覆身、構棲等の特技を有せり。然れども人類界に於ける原人の能力活用は恰、動物界に於ける原生動物の活力の如き關係を保ちて、特殊の性情は高尚なるに相違なかりしも、始原期に於ける

進化的本能

勢力は極めて微弱なりき、而して彼の特質特技の如きも或は吾人に專屬するものに非ざるやを疑はしむるに足るものあり。

積成の意義

されば智人を以て原人の進化に成れるものなりと判ずるに非理なきが如し。而して斯**進化**の實を擧げんには**積成力**に據れりと爲すの至當なるを信ずるなり。抑**積成力**なるものは吾人の本能の進化能力活用の發展に資すべきものを細大となく漸次に蓄積統合せんとする力を云ふなり、斯の如くにして積成したる資料は適宜に應用せられ、個人若しくは家庭の進歩を誘ふと同時に親族、氏族、部族、種族并に社會、國家の發展を促し、人類をして文化の恩恵に浴せしめんと勤むるなり。又**積成の方法**たるや吾人及自然を各方面より觀察し、吾人と自然との相互的關係に鑑みて目下の状態事情を詳にし、之に基づきて優良なりと認めらるべき新情態を理想的に構成し、其の實現に資すべき材料を集蒐するにあり、而して各自の案出發見に係る材料手段に就きては遺傳相傳に依りて子孫緣故者に直傳せらるるものあれども、多くは口演、文書傳授、見習等に依りて集團又は社會に提供せらるるを

積成の方法

常とせり、之を受領したる族團社會は雙立の原則に鑑み、輿論に従ひて取捨を決したる後、人爲的に淘汰を施し、保管(優勝若しくは廢滅劣敗)を宣して制裁を加へ、適應を圖りて進運を扶翼せんと努むるなり。斯の如くにして族團社會は傳來の舊資に添加するに新材料を以てし、時代に繼ぐに時代を以てす、而も材料の善惡適應の正邪は或は進化を實現し或は墮落を誘致して新陳代謝の結果、所謂系譜的發生を遂げて原人時代に比し遙に超越する所ある現代の存在を見るに臻りたり。

茲に單簡なる代數式 $M + E$ を用ひて積成の効力が個人に及ぼす影響に大なるもの存する所以を想定せんと試みたり、式中の M は原人の價值を表し、 E は賢愚率にして正數又は負數たることありて某個人の價值を示し、 M は積成の多寡にして集團若しくは社會の優劣に従ひて大に消長するものなりと知るべし、 E は活用率と云ひて正數又は負數を有し得るも絶對的價格は一より小なる數即ち眞分數と爲すを適當とす、されば茲に相應の優者ありて原人に勝れたること十倍なりと假定し、且積成したる事實の半を利用し得るとせん、前式は $M + E$ と成るなり、而して某集團の價值を表さんには $M(M + E)$ を用ふるものとす、式中の M 即ちシグマは總和の意にして某集團を組成せる若干人の各々に就きて $M + E$ の特價を算出したる後、之を合

計すれば該集團の勢力は想定せらるるなり。

前記の二式は全然無意味のものに非ざるべきも、正確の點より考ふれば極めて價值に乏しきこと勿論なり、唯概算の法に據りて要領を概括するの一助ともならんと信じ、茲には掲ぐることとせり。

英傑・大家

因に記す、世には英傑又は大家として稱揚せらるる者の現出するありて、或は政治・攻路・宗教等に關して大に經綸の功を奏し、或は學術・文藝・技能等に據りて名聲を天下に轟したり。活用的進化より見る時は彼等は實に異常の人物として度外視すべき者なりや、又相應の事由の存するありて之が發生を見るに臻れるやを明にせざるべからず。彼等英傑・大家に就きて性格・事績等を研究せんか、時代の要求に促されしあり、蓄積の利用に成功せしあり、又拔群の智者・案外の器用者あり、此等數者を兼備せるあり、均しく突發と見え、偶然の發生に係れるが如き感あるも、自然的若しくは人爲的の事情の下に刺戟を受け幸運の下に發展を遂げたるものと認むるを至當とすべし。

人生の特狀 人類が此の世に出づるや、當初は比較的狹隘なる地域内に漂遊して獵漁に従ひしが、漸次に繁殖して員數の増加するや、生活上の不便

を悟り、住域の擴張を圖り山谿を越え、河海を渡り、寒に耐え、暑を忍びて隨處に移住し、各處に散居するに臻れり。氣候、地勢の如き自然的狀態并に動植物の影響の如き共存的事情の下にありて或は犬を伴ひ、馴鹿を誘ひて馴養の端を開き、或は草根本實を採取し、率いて耕種の緒に就きたり。茲に於て居住に、漂遊式と土着式との二様現れ、永き年月を経るに及びて、氣質、風俗を異にせる牧民、農民の二派を生じ、更に進みて、農牧の共同、商工の分業を醸成したるなり。然るに一面には家族、親族の如き所謂血族は相集りて氏族を爲し、更に住域的の部族を作りて一地方に於ける共存の利を收め、尙一轉して厚生的の民族を組織し、邁進して強力なる國民を完成せんと努むるなり。諺に曰ふ類を以て集ると。而も集團は亦克類を作爲せり、氣質、習慣に類似する所あらんか、相集りて團結すること珍しからざるが、又一家に家風ありて一郷に郷風の備はるあるは世の知る所なり、氏族に特質あり、部族民族等に特徴あり、進化せるあり、墮落せるあり、一上一下して方向の定まらざるあり、昇らず、降らず、滯留の状態にあるあり。其の由來を尋ね、其の起因を探

らんか、千狀萬態の現はるるありて捕捉すること容易ならず、而も系統を立てて觀察を下ださんには又解決の不可能ならざるを推するに足るものあらん。試に先づ氏族、部族、民族等に就きて素質、原性等を明にし、次に之に影響を及ぼせる周圍の事情を詳にし、而して兩者の間に於ける相互的關係の輕重厚薄を認識して積成の事實が如何なる程度に於て現存するやを判斷するにあり。

氏族、部族、民族等に關する素質、原性に就きては活動に因るものを主とし、雙立の原則に基づきて積極的の勤勉、篤志、強行、深慮、整頓等に對して消極的の懶惰、薄志、弱行、淺慮、亂雜等を擧げ、以て其の孰かに該當せるやを明にし、併はせて缺陷の有無、特情を詳にするにあり。

周圍の事情に就きては自然的と人爲的との二者あり。甲者には氣候に屬する寒暑、風雨等あり、土地に關する起伏、高低、肥瘠等あり、河流、沼湖、海灣等あり、山地、高地、低地あり、林地、草地、不毛地等あり、其の他、地震、火山等あり、生物、産源等あり。乙者には他の氏族、部族、宗族等との關係上、同情的の共同援助

誘掖憐憫等あり。敵對的の競争、威壓、迫害、侮蔑等あり、道義、宗教等あり、生業、制度等あり、移住、雜居等あり。

而して兩者の間に於ける相互的關係の程度、狀況等を認識したる後、樂觀的、不滿に基づき、積成力に據り、其の効果を收めん爲に實施せる適應の情態を摘察して、進化の高低を推し、悲觀的、不平に齟齬して積成するに臻らざるか、又は積成の効果を收むるに違あらずして遂に退化、墮落の現はるるを見るなり。積成の應用、適應の可否に一様ならざるものありて進退に常なく、積成するの力なく又墮落に誘ふの原因なくして停滯固着するあり。

斯の如く積成の情態均等ならず、效力の發動様々にして所謂文化は進度を異にし程度を同じうせず、遂に人類界は現時の狀態を呈するに臻れり。

吾人は生存場裡に對し密接なる關係を有するものにして自然の律令(natürlich)は吾人の生存に就きて物質的の方面に限らず、社交的の方面をも制御し吾人の就業上若しくは活動上に於て特殊の方法を強要せしむることあるも。吾人は又如何なる境遇に居りても屈從を完うすべく迫らるること

なし、如何に自然が吝嗇にして些少の恩恵をも惜みて止はざるが如き場合に於ても吾人は食料、其の他の需要欲求を充たすべき材料の幾分かを蒐集し得るなり。現時にありては純然たる野蠻人なきも亦未だ完全なる開化者を見るに臻らざるが如し、人類中に存する各群は均等なる文化に浴することなく、一端には最、單簡なる生活を營める所謂原人に近き天然人(Naturvölker)ありて他端には高度の文化に達せる開化者(Kulturvölker)あるが、兩者の間には夥しき中間的標式は存するなり。

要求 生物に就きては其の植物たると動物たるとを論ぜず、將又人類たるに拘らず、其の生存を完うせんには生命に必要な物資を外界に要求せざるべからず、斯、物資にして不足する所あらんか苦痛を感じ、遂には死亡をも免れ難かるべし。低きは劣等の植物より高きは優等の人類に至るまで個性の上進すると共に要求は漸次に發達して複雑を加ふるなり。然るに要求は生物をして慾望を誘起せしめ、外界に於ける物資の收得に努力するに非ざれば満足すること能はず。

吾人の生存に必要缺くべからざる物資の要求は漸次に發達して史前時代より今日に及べるが、食物の要求が根本たりしは勿論にして之に次げる要求は禽獸及び同類に對する各自の防衛なりき、蓋し石器時代に於ける武器の製作に重要なものありし事實に依りて明なればなり、而も奇とすべきは飾装が被覆の先達たりし次第なりとす、是、吾人が裸體なるに原因する所あるべきも亦人類と禽獸との差別を生ぜし第一の要求なりと認むるを妨げず、之に反し太古以來極めて遅々たりしに拘らず、近年に及びて急激の進歩を現實せしは人類間に於ける快速の交通に對する要求なりとす。

要求と慾望との二語は屢混同せられて兩者の間に差異の存する次第を忘らるること珍らしからず、實際としては多く答むるに及ばざるも、理論上には判然たる區別あり。要求は其の起源の生理的なる特徴とし、機構に何物かの不足あるを感ずると同時に此の不足物も欲するの念は存すれども、未だ満足と與ふべき物資の何たるかを了知するに疎らす。偶然に依るか、本能若しくは發明に基づきて所要の物資が判明するに及びて、慾望は起り、直に満足と與ふべき手段を講ぜしむるなり。植物及び動物に就きては慾望は偶然若しくは本能に依りて誘起せらるるも、人類に就きては慾望の起源を以て心理的なりと認めざるべからず。食物の要求は

要求と慾望との差別

自然にして生理的作用に屬すべきも、米飯若しくは穀の蒲燒を慾望するは心理的響、積成的にして米作者しくは料理術の發明せられたる後に非ざれば斯、慾望は實現すること能はず。獨立は一の要求なるべきも、土地の所有權が吾人の獨立を最、安全に保持するものなりと認識せられたる後に非ざれば土地は熱望せらるることなし。さればタルド(Tard)に従ひて一見似非理屬の如き經濟的慾望の首因は發明にありと云ふを得るなり。故に慾望は要求の誘起に因ること明にして満足と共に消滅するを常とす、然れども要求が概して永續するものなれば慾望は再生するに躊躇せず。斯の如く慾望と満足とが交互的に現はれて數次に及び遂に慣習を生成すること珍しからず、諺に習慣は第二の天性なりと云ふに非理なきのみならず、慾望に出でたる要求は遂に生理的たるに疎るなり。

吾人の要求には種々なる特質の備はるありて其の價値の頗、貴重なるは經濟學上に於ける大原則に深き關係の存するに依りて知らるるなり。

(一) 要求は種類に於て無限なり。動物の要求は屬種に従ひて定限せらるるに當り、吾人人類の要求は積成性に據るが故に新陳代謝して極りなく所謂文明の本色は茲に存するなり。吾人の要求は年齢と共に消長するを常とし、文化の程度に従ひて増加し、野蠻期の簡より半開期に繁を加へ開化期

に複雑と成るを例とせるが社會階級・職務・職業等に伴ひて大に趣を異にせり。文明・進歩の著しき社會國家にありては享樂・衛生・清潔・教育・旅行・通信等に空前の發達を認むるも、而も將來に於ける進境に對しては到底豫想の及ぶべきに非ざるなり。

要求の無限増加は近代文化を積成し進歩を現出せしめたるに相違なきも、必も幸福を爲すに非ず、慾望の増加は慾望の主眼に當れる財貨の増加を來たせるに拘らず、幸福の増進に對し離るべからざる關係を保つものに非ず。一の要求に對する満足は他の要求に對して發生を促し、要求と満足との關係は恰、通ぐるを追ひて及ばざるが如くにして享樂の偉大なる進展は熱狂的慾望を伴ふが故に幸福より考ふるときは財貨の増加に勵むよりは、要求の減却に努むるを穩當なりとするに理由あり、是、往古の聖人君子が大に主張して止まざりし所なり、而も反對論者は少なからずして質素・儉約は、因循・姑息を誘致すと唱道せしが、殊に西紀第十八世期以來積極主義は漸次に進展して今日に至れり。然れども經濟的欲求が單に財貨の收得に汲々とし

て求めて飽かざるは個人乃至國民の共に憂ふべき所なれば物資の要求に關する努力の減却を圖るは極めて適切なるに相違なきも、而も吾人の生存状態に改善を加ふることなく、停滯に甘んぜんか、反て人生をして禽獸生活にまで後退せしむるの虞なしとせず。現下の蠻人に就きて其の實情を尋ねんか、進歩の遅々として更に見るべきものなきあり、墮落に墮落を重ねて滅亡に瀕するものあり、而も其の主因が因循・姑息にして眼界の狹隘なるに歸するは争ふべからざる事實なり。尙一言を要するは要求が單に經濟的なりと稱せらるるも、全然道義的價値を缺如せりと爲すは當らず、蓋し新要求の發する毎に人類間の連鎖を緊縮する傾向ありて要求と満足とは相互的にして連帶責任は漸次に重きを加ふるを以てなり。隱遁者乃至仙人に非ずんば自足主義を完うすること能はず、苦ありて樂あり、積極的不滿に據りて現生を樂觀するの優越なるに對し消極的に不平を鳴らして死期を待つが如きは愚の至りと云ふべし。

(二) 要求は容量に於て有限なり。要求の何たるを問はず、定量の物資に依

りて満足するを例とす、幾杯かの飯は飢を癒すに足り、幾杯かの水は渴を癒すに足るなり。而も要求の何たるを問はず、其の程度は満足に近づくに従ひて低下し、厭飽に達せんか管に要求の消滅するに止まらず、厭惡に進み苦痛に到ること稀ならず。然れども要求が自然的なると人爲的なるるとに従ひて容量に變差の存するを常とす。甲者は生理的なるが故に必要にして缺くべからざるものあると共に満足の實現は判然として收得せらるるが乙者は積成性を帯び、四圍の事情に關連せるを以て境界は不分明と成り、容易に満足に達すること能はず、彼の所謂道樂級の慾望の如きは好適の例にして殆ど底止するを知らざるなり。而も斯く慾望に就きて考究する所あらんか、慾望に變態、變差の存する次第を認め、積成性の特果なるを了り、満足の遁逃は畢竟するに、満足に繼ぐに満足を以てするの致す所と解して可なり。彼の金銀に對する慾望の如きは無制限なるを普通とすれども、畢竟貨幣に萬般の慾望を總括するの威力あるが爲にして、貨幣の要求を以て同一の物資を限りなく要求すと認むるは眞理を解せざるの甚しきものと云ふべし。

彼の守錢奴と雖、貨幣の萬能を了知し、之を要求して殆ど熱狂するに拘らず、徒に之を藏納するに終るは貨幣を利用する方法を解せざるに坐するのみ。

(三) 要求は互に競争す。一の要求は他の要求を凌駕して之を吸收し若しくは廢滅するに非ざれば充分に發展すること能はず。要求は新陳代謝するを例とするが故に經濟學上の一原則たる轉換法 (loi de substitution) を構成するなり。本法は消費者が生産者の横暴を免るるに最有力なるものなり。專賣の特權たると將又「トラスト」の強力たるとに論なく之が壓迫より脱出せんと欲せば要求を轉換して勢圏以外に於ける物資に據りて満足せんと圖るを以て足れりとす。而も生理的要求に對する轉換に範圍の廣からざるは事實にして人爲的就中奢侈的慾望に關しては取捨選擇に極めて自由なるものあれば觀劇に代ふるに遊獵を以てし、眞珠の頸飾を捨てて自動車を選ぶが如きは毫、珍らしからざるなり。衛生上并に道徳上に於けるも轉換法の奏功に俟つこと多く、劣等にして野卑なる慾望に代ふるに高尚優美なる慾望を以てするにあり、飲酒の弊害を避けて讀書の趣味に就き、間食の

悪習を去りて貯蓄に志すが如し。

(四)要求は互に補足す。要求は共同なるを常とし、孤立するを不利とす、食事は食物の外、各種の食器なかるべからず、坐敷には坐蒲團を始とし、軸物、花瓶、置物等の具はるを要し、着物ありて帯なく、硯ありて筆墨なくば用を爲さず、冬夜に於ける家庭の團欒は温熱、燈火、食物等を缺くこと能はず。

(五)要求は慣習と成りて、第二の天性を爲す。要求は生理的たるに限らず、積成的なるものに就きても、一度満足せられたる後、反復して止まざれば固定するの傾向を呈して慣習状態を馴致し遂に第二の天性を現出するに臻るを例とす、本原則は給料、賃銀等に關して殊に重要視せらるるが、生存の慣習的水平即ち生活の程度 (Standard of Life) は容易に低下すること能はず、強ひて之を行はんと欲せば豫、滅亡を覺悟せざるべからず。斯く慣習にして數十年を経過せんか、遺傳性を帯び來りて遂に固定するを見るなり、斯の如くにして當初は頗る輕微なりし要求も年を経るに従ひて勢威を倍加し遂に偉大なる制壓力を逞しうするに臻るなり。

效能

效能 吾人が生命并に福祉を保持する見地より觀察したる外界にありて吾人に對する利害關係の最深きものは幾許かの物件が吾人の要求を充たすべき特質を具ふることなり、斯著しき性質を效能 (utility) と云ひて用途效用の義に當り、其の程度は要求若しくは慾望の強弱に準據せり。而して吾人を圍繞する所の動物植物、礦物が悉く有效ならざるのみならず、吾人の用を達す物件の數は意外に少なし。又某物件が有效なるには次の二要件を具備せざるべからず。

(一)某物件の自然的性質と吾人の要求との間に何等かの關係あるを認めざるべからず。米飯の有効なるは一面吾人に自營養すべき要求の存すると共に他面に米飯が吾人の營養に適する素質を具ふるが爲なり、珊瑚の玉が賞用せらるるは婦人に裝髮するの要求あると共に珊瑚の玉の婉麗なる紅色の具はるが爲なり。斯の如くにして吾人の要求と物件の特質との間に關係の存するありて效能は現はるるなれども、要求者と有效物との兩者に就きて孰が重要なるかは自明にして前者の遙に後者に勝れるを知るこ

と難からず、蓋し効能は慾望と共に消長するを常とし、物件固有の特性に非ずして物から物へ移り行き、主觀的にして客觀的ならざればなり。而も物件が要求に満足を與ふべき特質に就きては之が實在を必要とせずして斯の如くあるべしとの信念の存するを以て足れりとす、幾多の鐵水特效薬には特質上疑はしきものあるに拘らず、大に賞用せらるるものあり、彼の古錢、古本等の如き、蒐集者の奇癖に接せんか、案外なる効能は認めらるるなり。

(二)某物件の効能は之が利用に俟たざるべからず。某物件に吾人の要求を充たすの特質あるを認むるに止まらず、進みて要求を實際に充たさざるべからず、斷崖絶壁に茂生する樹木に効能あるを認むべきも、之を伐採して利用することの不可能なる場合あり、潮の満干に強力の潜在するを知れども未_レ之を利用するの術なきを憾む。無用廢物と知られたる、コルタールより優良なる染料の製出せらるるに鑑みんか、絶對に用なき物件の世に存すると爲すは寧ろ非理なりと斷ぜざるを得ず。

吾人の要求を満足せしめ、快愉を享有せしむる所の特質は物件の專有に

仕事

非ずして吾人の仕事に存すること勿論なり、何等物件の介在を俟つことなく、單に吾人の仕事働作のみにて喜悅を與ふるに止まらず、經濟的意義に於ける効能を生じて、吾人の要求が直接に満足する場合少なからず、醫者は吾人に健康を回復し、教授は學識を傳へ、法官は曲直を裁斷し、文學者若しくは美術家は高尚にして優秀なる快樂を感受せしむるが、婢僕も亦便宜を與ること尠少ならず、實に吾人の働作が同胞に對して呈供する所の効能には頗る重要なるものありて、物件より生じ來る效果に比し遙に超越せり、斯の場合に於ける吾人の働作には勤勞、任務、用途等の別稱あるも、吾人の要求慾望を充たす上に於て何等變差の存するなし。

斯の如くにして吾人の經濟的階級に屬する要求慾望に満足を與ふ所の貴重なる特質を具ふる物件と仕事とを總括して財貨(wealth)と稱するは穩當ならざるの嫌ありて、良材、佳料と云ふも亦面白からず。而して財貨は供樂、享樂の意義を伴ふ外に、勢威、權力の意義を兼ね備ふるが、重要なこと兩者の間に優劣なきを忘るべからず、蓋し財貨にして享樂に止まらんか、根底的

財貨

たる資あると共に其の有限にして、最高程度の存すること想定するに難からず、従つて財貨の追求にも底止する所あるべく認定せらるるなり、然るに勢威的方面に於て慾望に無限なるの傾向ありて進みて飽くことを知らざるのみならず、突飛なるを免れざるも、石油、鋼鐵、棉花等の王と稱するもの、實現には毫、疑なきなり。

價格 吾人の慾望に適應する幾多の物件は同程度の慾望を以て迎へらるることなきを以て取捨選擇の順序に依り等級を立つるが故に價格の觀念は現出するに臻れり。

價格の本義

價格の本義 價格は慾望の程度に基づくものにして全然交換より分離し得ざるが如く斷ずるは非なり、價格の觀念は效能の觀念に比し遙に複雑なるが、次に掲ぐる所の二箇の性質に依りて兩者は分別せらる。(一)價格に關する第一の特徴は等級にありて二箇乃至數箇の物件を比較するに基づくけども、物件其のものは主格を保有せざるを以て若干の要求若しくは慾望の間に於ける比較類別なり、單に應求性を指示するに止まらずして應求性

の程度即、應求率に當れり。效能は物件が要求に適するの意にして某物件が有用有效なりと云ふは此の物件が慾望する所に適ふと爲すの義なり、而して斯、物件の價格は幾圓なりと云ひ、魚、幾尾、象牙、幾本に當れりと云ふは比較の總念にして大、重、等と同じ階級に屬せり。(二)價格に關する第二の特徴は稀少なること、即、需求せられたる分量に對し存在する分量の不足するにあり、如何に利便多き物と雖、分量にして要求を超過することあらんか、價格は皆無に越くを例とす、蓋、物件其のものに具はる所の效能に何等異變なきも、經濟的見地より考ふるときは要求を伴はざる殘餘の物件として顧る者なければなり。分量が要求の絶無を指示せる限界に近づくに従ひて價格は低落し、遠かるに従ひて昇騰すべし。此の理に基づくに拘らず、異様なる感を與ふる經濟上の一事實あり、某物件に就きて分量を増加あるときは反つて之に關する價格の總額は減少し、又逆に分量を減却すれば價格の總額に増加あるを見るなり。斯、事實は古來認了せらるるが故にオランダ所領の東印度にありて香料に生産過剩の虞あるときは收穫の一部を燒却し、ドイ

ツに於ける「カルテル」(Cartel)即ち生産組合は罰金制を設けて石炭・酒精等の生産を限定するに努むるなり。科學及び工業に絶大の進歩ありて總べての物件が泉より湧出する水若しくは海濱に堆積せる砂の如くに豊富なるに際せば価格は全滅して要求者としては水若しくは砂に比し何等選ぶ所なかるべし。斯の如くにして社會の貨財が最高點に達するときは物件の価格は皆無と成りて、貧富の差別を見ざること恰も日光の前に王者も乞食も平等なるが如くなるべし。

價格の本源

價格の本源 價格が等級比較選擇の意を含むと爲すに異論なきも、價格の眞義を捉ふるに極めて困難なり、満足の程度を判定するの標準は各自に存すと爲すも、斯の標準は各自の氣質と同様に變差極まりなし、然れども經濟學をして科學たるの體面を保たしめんには各自の採擇に關する根據動機を採求して價格の本源を明にせざるべからず。幸に經濟學者の努力空しからずして價格の要素を捉ふるに止まらず、唯一無二の基因を創定するに臻れるも、斯の基因に關する提唱一様ならずして效能稀少獲得難生産費複

製費等を算し、今に歸一し得ざるを遺憾とす。效能論は緊急なる要求に據ると雖も、金剛石が最高位を占むると水が最低位にあるとの事實に依りて容易に仆れざるを得ざるなり。稀少論が效能を伴ふ點に就きては殊に蒐集家の首肯する所なるべきも、單に稀少を重んじて慾望を無視するときは主客を顛倒するの非理あるを免る能はず、稀少は慾望の誘因たること能はざるのみならず、反つて妨礙と成り、壓迫を加ふること珍しからず、稀少なる物件に對し要求の強力なるは抵抗の結果に歸せざるべからず。

獲得難は稀少論に比し價格に關する要素を網羅する利あるも、慾望に對し没交渉たるの弊を免る能はず、而も太平洋の深床より採取したる鐵礦に何等特殊の價値を認めざるに鑑みんか、獲得難に頼むべき所多からず。生産費を以て生産に關する各種の費額の合計なりと解せんか、生産の價格に代ふるに分子の價格を以てするか、又は賣價に代ふるに元價を以てするに外ならずして何等價格の本源起因に就きて學ぶ所なし、而して仕事と時間との分量を合はせたるものと解せんも價格の本源に没交渉たること前者に異ならず。複製費は獲得難に比し物件を獲得する爲の努力に直接することなく、物件を代ふるに必要な盡力を主眼とするの差あるのみにして慾望に對し關係なきは同様なり。需要供給の法則は價格の變化を解

明し得るに止まり、價格の元因、本源を指示すること能はず、供給の多少と需要の増減とに従ひて價格に上下高低の現はるるは事實なるも、價格其のものの本源を明にすること能はざるは振子に左行右往の運動あるを見て直に引力の存在を推斷し得ざると同様なりとす。

現時にありて價格の本源を解明する上に最、有力なるは勞力説と結能説の兩者に過ぎざるが、而も前者は漸次に衰頽して昔日の勢威を振ひ得ざるが如し。

勞力説

勞力説に於ては效能を認むること勿論なれども、價格の本源を勞力 (Labour) に歸して、總べての物件に關する價格の高低は物件を産出するに必要なりし勞力の多少に據ると爲すにあり。本説は理據の明確なると道義に適ふとの長所あるは事實なるも、經濟學の見地より考ふるときは首肯し難き點少なからず。(一) 物件の價格を以て此の物件を産出するに必要なりし過去の勞力に基づくとせんか、價格は勢、固定せざるべからず、然れども實際にありては慾望の消長するが爲、物價に不斷の變化を來たすは世人の容易に認め得べき所なるが、價格を計上するに用ひらるる勞力は殊更に

物件の産出に適用したる過去の勞力に非ずして現存の社會状態に於て同様の物件を複製するに必要な勞力即、現在の勞力に換へんか、消長の幾分を輕減し得べし。(二) 勞力を以て價格の本源と認めんか、均等の勞力に對する價格は均等ならざるべからず、而して均等ならざる勞力に對する價格は均等ならざるべし。然るに實際に於ては稻の一株に屬する米と藁との如く同じ勞力に成れる物品にして差等の著しき價格を有つものあり。之に反し勞力を異にする物品にして價格の同じきことあり、例へば一町歩に付一石五斗の收穫ある畑と四石三斗の收穫ある畑とより産する同質の小麥の如し。(三) 勞力が價格の本源たるに於ては勞力を要せざる物品は價格なきを當然とす、然るに何等の勞力を要せざるも、單に效能ありとして需求せらるる物件に價格を具ふるもの頗多し、例へば地中より湧出する鑛水、石油等の如し。(四) 勞力が價格の本源なりとせんか、勞力其のものの價格は何に基づくべきや。蓋し勞力が價格を有するは勞力が賣買又は貸借せらるるに依りて明なり、勞力は效能を有するのみならず、效能の淵源なり、勞力に價値

あるは勞力の生産物に價値の存するにて知らるるなり、然れども物件の價格に就きて説明を求むるに當り、此の物件を製出せる勞力の價格に據らんか、自繩自縛に陥りて何等得る所なかるべし。(五)價格を以て勞力に基づけりと爲すは價格を物質視するの弊より免るる能はざるべし、價格を以て勞力の産物の如く想定するは謬にして價格は物品其のものに固着せる特質に非ず、外界より來りて添加する所の勢威に過ぎず、慾望に據れる放射の影響なり、斯の如くにして物件は外界の勢威放射の影響を受くると受けざるに從ひて價格の有無は生ずるなり。

結能説。勞力説が實行せる努力に重きを置くに當り、結能説は收め得たる満足を重ねざるなり、而も效能論の如く效能を概括して解くに非ず、物件に就きて個々の效能、便益を微細に講究するにあり、水は效能の極めて大なるに拘らず、價格の存せざるを楯として效能説を排斥する論者あれども、彼等の所謂水とは如何なる水なりや、地球の表面に存在する淡水の全量を指示すとあらば其の價格には測るべからざるものありて一家若しくは一

結能説

國の專有物たらざるを至幸とするのみ。而も一槽一瓶の水に就きて論ずるとせんか、遽に效能の有無價格の高下は斷ずべからず、水の效能には緩急の存するありて飲料用、調理用、化粧用、庭園用、掃除用等の如く效能の低下を認むること容易なり、然るに同じ水を此等の用途に充つるとせんか、流用上に何等の不便障礙なきが爲、利用上最末に位するものに依りて不足を補ふを常とす、從つて水の效能は末位を占むる水の效能を標準とし、價格に於けるも同様に末位の價格に據ること成りて遂に無價格に歸するなり。是に依りて之を觀れば價格は主觀的效能に依りて決定せらるるが、效能は所有物の箇々に互りて均等ならず、所有に歸する物件の箇數が減少するに從ひて要求の程度は減却するが故に價格は漸次に遞下すべし、斯の如くにして最後に收め得たる物件は用率の最低きものにして最末の満足に對するところ成り、效能の程度を限定して之が終極を指示すべし。本説に優越せる所あるは吾人の慾望と其の程度とに就き微細にして而も真正なる心理的研究を伴ふに由る。結能論が稀少的效能 (utilite rare) を提唱して效能説と稀

少説とを併合し得たるを多とするが、元來價格は慾望の程度と財貨の數量とに依れる所謂函數 (function) にして其の關係には頗る複雑なるものあるなり、慾望は生理的要求に基づくに拘らず、積成的發展を遂ぐるに従ひ程度は漸次に濃密を加へて殆ど底止するを知らずと云ふべきも、財貨に就きては之を産出する上に於て自然的なると人爲的なるとに論なく著しき進歩は期し得べきを以て數量の缺乏を憂ふるに足らざるが如し。要するに財貨の價格は慾望の程度と共に上下し。慾望の程度は吾人が收得せんと期する所の財貨に依れる供樂の多少と之が亡失に際し代用に充つべき物件を得る爲に免れ難き犠牲の大小とに據りて増加すと云ふを得るなり。

結能 (utilite finale) なる語は不完全なるのみならず、遞減級數の義に拘泥するの嫌ありて事實に相應せざるを不便とし、低限效能 (utilite limite)、端邊效能 (utilite marginale)、終極效能 (utilite liminale) 等の數語は提唱せられたり。

價格の測定

價格の測定。價格は慾望の程度に據るものなれば某物件の價格を測定せんと欲せば、此の物件が惹起する所の慾望の程度を測定し以て價格の高

低を案出すること容易なるべし、然るに慾望の程度は精密に測定し難きも、交換 (exchange) の事實に據りて兩箇の慾望に關する程度を比較し得るなり、交換を行ふに際し、當事者は各自の慾望を満たすが爲に所持の財貨の一部を譲り渡し之に代ふるに所要の財貨を以てするにあり、斯の如くにして譲り渡したる財貨は犠牲の程度を示し、收得したる財貨は慾望の程度を表し、兩者の價格は慾望の比較に據りて測定せられたり。所持に係る物件が惹起する所の慾望にして愈々大ならんには交換を促すべく呈供せられたる財貨の分量も亦大ならざるを得ず、従つて某物件の交換的價格は呈供せられたる他の財貨の分量即、獲得力 (pouvoir d'acquisition) に依りて測定せらるると云ふを得るなり。交換上に於て某物件に對し呈供せらるる他の物件の分量にして多からんか、價格の低さを示し、少なからんか、價格の高さを表すが故に或二種の貨物の代價は交換せられたる分量と反比例を爲すと云ひ得るなり。然れども大々重々價格等に就きて明確なる觀念を得んには實物の兩々の比較は不充分なるのみならず、頗る不便なるを以て公度 (commune mesure) の援助に

依らざるべからず。公度の任務は或は場處を異にする兩物件を比較し、或は時を同じうせざる同一の財貨を比較するにあり、前者は直接に比較し得ざる場合を避け、後者は價格の變化を慥むるに用ふべきなり。公度は國に依りて異なり、時代に依りて變りしが、現時に於ける文明國は黄金を以て標準財貨に充て、金貨本位の幣制を布くに至れるが、我が國に於ては一圓を法貨の單位とし、實際に製造せらるるは二十圓金貨なり、而して銀貨白銅貨銅貨を作りて補助貨に充つ。而して貨幣に依りて貨物の價格を測定したるものを代價(Price)と稱す、故に某物件の代價は此の物件の價格と幾許の金貨若しくは銀貨の價格との比を表示するが、單に貨幣にて表示せらるる價格なりとも稱せらる。

因に記す、金銀を貨幣の地金に選みたる理由は、(一)少量の中に多くの價格を含有するが故に運輸に便なること、(二)價格の不變を維持しつつ自由に分合を施し得ること、(三)殆ど永久的に腐蝕せざる化學的性質を備ふるにあり。

生活 維新前後より我が國に於ける各己の生存狀態は甚深なる變化を

享受して五十年間に偉大なる推移の現はれたるは驚嘆するに餘ありと云ふべし。吾人の生存に漸次の變遷あるは豫想するに難からざるのみならず、事物を支配する所謂積成の原則より考ふるときは寧ろ避くべからざる次第と斷ずるの當然なるを認むるなり。然れども最近三十年間に目撃せし事實に徴すれば單に細目の變差に種々様々なるものありしに止まらず、根柢的變態の遂行せられんとする趨向ありて社會に於ける風俗慣例家庭に於ける主義思想は革新を促進せんとす、政治道義智力の上より察するも、將又物質上の見地より考ふるも、未嘗て吾人の關知せしことなき生活狀態(Life is Vivendi)は不撓不屈の勢力を以て、避け難き暴威を振ひつつ、頭上に加はり、身邊を圍繞せんとす。人道が同じ基軸の周りに旋廻するは疑ふべからざる事實なり、而も此の基軸は位置を轉じ方向を變じたり、是事物を觀察するに當り現代と往時との間に趨向を異にする所以なりとす。吾人三十年間の活動は實に先人の二世期に亘れる生命に匹敵するが如く感ぜらるべし、四圍の事情より受くる所の影響には極めて鋭敏にして、而も強力なるものあ

り、吾人の活力思想感情を動かし、之が變化を促し、之に壓抑を加ふるに何等憚る所なきなり。

現時の生活状態に煩累多くして各般の要求慾望は仕事奔走・心配・面倒等を伴ひて過度の働作を強請するに當り、各自の體力・智力・氣力・資力等は四圍の事情と相俟ちて熱狂的活動乃至混沌的亂働を誘致するに臻るなり。是、脱し難き境遇豫期せざる場合意外なる變化等より來れる事物の特態・神心の殊狀にして社會の進化上避くべからざる旋動なりと認めざるべからず。外界に於ける各種の事情は善惡に論なく吾人の生存に影響を及ぼすに止まらず、壓抑をも加ふるなり、而も斯事情は複雑なるに拘らず、人生固有の趨向として了解するに困難ならず。然れども欣然として日常の生活に煩累を迎へ、頑迷虚榮の囚と成りて妨害に故障を重ね、好みて叢叢の中に突入し、坦々たる大道を捨てて屈曲多き細徑を求むるに臻りては案外の感を起こすの外なし。複雑生活(vie complexe)は止むを得ざる積成的事情の下に積成せらると解し得らるも、純然たる人爲的の纏綿生活(vie compliquée)は文化の

複雑生活
纏綿生活

畸形兒にして複雑生活の病態と認むるを當然なりとす。

吾人の生活をして複雑ならしむる原因は一二に止まらず、社會の要求を始とし、各種の新主義・教科目の過重・就職の困難・言語の混雜・官吏の故障等を算するが、各自の不明・迷信・過失・誤斷・過勞・疾病等の加はるありて事情は纏綿し、生活をして混沌たらしむるなり。尙、複雑生活の一般原因として無用の密談・輿論等を加ふべし。

社會の要求

社會の要求 開化せる世に異様な變風の殘存するが如く、精緻なる文明の下に頑迷を極むる壓抑の存在すること罕ならず。自主自由の唱道せらるるや、茲に百有餘年、政治家・社會學者は演壇紙上等に個人の權利を主張して止まざるも、實際に於ては古來の慣例を改むると共に政治・法律・家庭の各方面に亘りて幾多の新しき義務を負ひ、煩しき責任を擔はざるを得ざるなり。業體納税・兵役・教育等の義務あり、職工・資本家・企業等各種組合の規約あり、雇工・專賣・摺購買等に關する規定悉く具はり、通路・水道・燈火等に至るまで拘束を蒙らざるはなし。

所謂新主義

所謂新主義 社會の變態は複雑に複雑を加へんとするに先ちて、幾多の新主義は出現して思想は混沌たる状態に陥り、精神をして始、錯亂せるが如き境界に誘致せんとす。萬能主義は順序なく方法なく設計なく考慮なく百事を企圖して憚らず。享樂主義は人爲的慾望をして

必要缺くべからざるものたらしむるが爲、資力境遇等の到底企及し難き事業の遂行に熱中せしむ。自分主義は我意に依りて渡世するを理想と爲すを以て社會に適應し、收支を計り、家庭親族と折合ふが如きは、陳腐に屬し、愚劣なる豫斷に過ぎずと認む。幸福主義は多幸多福を以て當然の權利なりと誤認し、到達主義は手段の惡辣なるを顧みるに違あらず。利己主義は懲勉を排斥し、快適を忘却し、貢獻の何たるを辨すること能はず。

灰殻主義 所謂灰殻主義 (Ashism) は其の形式一様ならずして各方面に亘りて限定し難きも、要するに新奇を衒ふ流行の勢威を蒙れる事物に關し、絶對の奉持を旨とすと爲すに妨げなきが如し。吾人の生存に煩多なる業務を附加するの迷惑を感ずるに拘はらず、苟も多少の便益だに具はらんには尙堪え忍ぶの理由を見出だすべし、然れども道義上又は智力上何等利する所なき純然たる人爲的責務を構ふるに練りては思慮ある者は驚かざるを得ざるなり。眞の灰殻者は遍視遍在を標榜して演説講義、講習に出席せざることなく、劇場運動會展覽會等を觀遊がさず、隨處に臨みて先登第一を矜り、遍視自在の神術に通ずるかを疑はしめて得々たるものあり。而も灰殻の程度様々にして誇張的に流行を慕ひ落着きたる態度、見識、趣味等を以て姑息と嘲ると共に、兒戯に類する變改をも大事件と認むるあり。時事に精通するを無上の名譽と信じて自、半可通たるを悟り得ざるあり。集會の席上に聽き覺えたる事實、新聞雜誌の上に登載せる論説を提げ來りて自、輿論の指導者に任するあり。

灰殻主義

過度の勞作

過度の勞作 過働酷使 (overwork) は牛馬に就きての警告にして、斯状態にありし家畜の勞内は腐敗し易しと爲して販賣者の忌避に係れり。然るに近年に及びては吾人の生活状態に甚深なる變化を誘起して活動を刺激し、熱狂を生じ、遂に筋肉分解 (muscle breakdown) に陥らんとす、蓋し人間なると畜類なるとに論なく、勞役は其の程度の如何に拘らず、エネルギーの消費を必要とし、細胞の内部に化學的變化の起るを常とし、損失にして不斷に續行せられんか、平均は回復するの期を得ずして不足の悲況より脱出するを得ざるべし。當今の世には冷靜なる人物は漸次に減少し、各自の激昂は體力能力の程度を顧みるに違あらずして熱狂的狀態を挑發し、中毒を惹起し、熱度は高く、鼓動は強く、過度の勞作に基づく病症は避け難かるべし。而も肉體の刺激に加ふるに深き感動を以てするも尙各自の世路を標識するに過ぎずと爲して小説、演劇活動は勿論、動搖旋轉を旨とする遊戯、演技の觀覽を求めて止まざるの奇態も生ずるなり、實際の悲劇、活劇に對して冷淡なるに拘らず、構成的事變を目撃し、殘忍極刑の舞臺を觀望して飽かざるは寧ろ特殊の病態と認むべきか。斯して神經過敏 (nervousness) は層一層として激しく急性状態に陥らんとす。神經過敏症に罹れる者は外觀頗る活潑なるも、實際は狂働するに過ぎずして動き進むこと能はず、冗辯を振ひて意を盡すを得ず、勞して功なきは彼等の特性なりとす、實に彼等は時間の空費に努力すと云ふべし。

神經過敏

神經衰弱

神經衰弱 神經過敏の終極は現世期特有の病痼たる神經衰弱 (neurasthenia) と成るなり、神經衰弱 第一篇 家庭の本義 生活

衰弱に就きては想像的病症に過ぎずと唱ふるものあるも、科學は神經衰弱に危險なる病因の具はらざるを認むるに拘らず、生理的廢滅に對し争ふべからざる原由を組成すと斷ぜり。斯。病的豫向は現代生活の際限なき煩雜状態の産物にして各種の疾病に對する感受率を振張するに與りて大に力あるを恐るるなり特殊の心理状態と認むるに非理なき奇異の病症に罹るや神身共に衰弱するも、多くは自己の培養に依りて増進を促せり。病症の如何に依りては治療上患者の努力に俟つこと少なからざるが、神經過敏症に就きては意志の効力頗著しく之に依りて全治を得ること困難ならず、神經衰弱に陥るは氣力の不足剛毅の缺乏、就中或程度の自分勝手に基づくこと多きに居れり。神經衰弱に罹る者は巧に生活を複雑状態に誘致するも、活動努力注意進行等の總べては自己を以て唯一の主眼目的と爲すを憚らざるが如し。

纏綿せる生活を營むは實に幸福を享受するの道に非ざるのみならず、吾人の生存をして寧ろ危殆に陥らしむるものなり、慾望は満足を得ると共に増進するを例とし、財貨を積み足るを知らざるは人生の常にして、願望適ひて不満の絶えざる嬌養兒の機嫌に依りて情況の一斑を窺知すべし。窮乏文盲壓制の三者を排除せんか世は極樂淨土になるべしと豫言せし者ありしに拘らず。窮乏に的確なる輕減の現はれたる今日にありても吾人に性

質の改善幸福の上進を認むること能はず、教育に多大の注意を拂ひつつあるも、結果は豫期に違ふこと少なからず。自由は敬慕に堪えざるも、之を善用すると悪用するとの間に偉大なる懸隔ありて社會個人の新歩發達に資すること極めて有力なると共に悪人は勿論世話燒我儘者不敬者等の所屬としては如何なる効果のあるべきやは呶々するの要なし。吾人の社會生活を惑亂し、率いて家庭個人の生命に影響する幾多の素因は畢竟するに主客の顛倒乃至趣意目的と手段形式との混同に歸着するを觀るなり。されば複雑なる社會に立ちて纏綿せる生活を避くるには合理的に生活するの道を講じて各自の能力資力に匹敵する所の適應生活 (vie adaptée) を營むに努めざるべからず。地位境遇等に適應する生活に資すべきものを要望するに止めて、所謂然るべき生活策を講じ、之が實行に當るにあり。斯。正路を踏むこと容易ならざるも、要するに各自の希望及行為をして天授の律呂に調和せしむるを旨とし、梅花は梅花、鶴は鶴たるが如く、人は人道を守り、人格を保ちて狐兔鷲豚に類するの行動に陥らざる様慎まざるべからず。適應

の術は天與に非ずして吾人の努力に據れる積成的効果たらざるべからず、活動に勵むのみならず、行爲に對して慎重の考慮を運らさんか、人生の極意を悟りて自己の任務を全うすべきを了知するに臻るべし。而も稟性一様ならずして天授の特質は木火土金水等に比すべくして長所短所を異にせるが、各自の任務は所有に係る物資を利用して好運長命の作品を提供するにあり。之が作成に當らんとする術は一時的形式に依りて永久的の想念を實現せんと期し、眞の生活は場處又は外形の如何に拘らず、正道慈愛眞理自由忍耐の如き最善を日常の活動中に實現せしめんと期す。而して斯る生活は如何なる社會的事情の下にあるも又天授の資性が如何に不均等なるも、實在を危うせらるることなし、人物の優秀財貨の饒多なるよりは寧ろ此等の資力に基づく效果に依りて生活の眞價は推量せられ、生活の要價は長壽光彩に非らずして美質に存せり。眞の生活に就きて美且大なるを覺り、眞理正道慈愛の爲に奮闘するの神聖にして可憐なるを悟らば之が魅力は心底深く藏められ、權威強力備はり、幹部は命令し、副部は服從して、秩序の整然たるを見るなり。

複雜社會に立ちて適應生活を營まんと欲せば各己の特性を自認し、境遇に鑑み、實力を計りたる後、思想を整理し、言語を誠實にし、義務の根柢を明にして、枝葉に亘らず、而も履行に力を致し、喜悅に依りて娛樂を節し、趣味に基づきて散漫を避け、自己の廣告に努むるは隠れたる善事に力を盡すに比して遙に劣れるを悟り、近代式俗風に斧鉞を加ふると共に古來の慣例に就きて粹を抜き、審美の原則を詳にして奢侈の弊害を退け、交際を怠らずして而も謙讓を重んぜざるべからず。特に教育に意を留め、各自の生活を以て社會に適應せしむべき次第を知らしめざるべからず。要するに適應生活は複雑なる社會に存する各般の事物に就きて、各自の選擇採用を施したる統合的結果に外ならず、斯る生活を以て簡要生活(via simplifica)と唱ふるの理あるも太古の黄金時代に行はれし如く想定せらるる單純生活、又は現時にありても聖人間に見る所の簡易生活とは大に趣を異にせり、蓋し周圍の事情に大なる差別の存するあるが爲にして後の二者は單純なる世に簡易なる生活(via simple)を營めるに原由せり。

思想の整理

思想の整理 思想は各自の生活に對し特殊の援助を與ふべき貴重なる機關なり、人たるものは其の本分に鑑みて思想を重んじ之が鍛鍊に努力して各自相應の見識を立つること肝要なり。而も近年の流行は思想を以て玩弄物視し、效果に乏しき新奇を衒ひ、徒に達觀を裝ひ、通曉を誇るに止まり、意味深長にして健全なる感動を享受し、之に依りて眞摯着實に言行せんと

志すもの少なきは遺憾に堪えず。又人爲的生活の屈從者たるもの常として猥に内心を研究し、自己の行爲を分解するは何等益する所なきものにして時間の空費に終らば幸甚なり。各自が思想を整へ、内心に自己の言行を明視するは善良なる生活を保持する上に缺くべからざる要素を爲すと雖も、自身を機械視して取外を行ふが如き奇癖に陥るは愚と云はざるを得ず。永年の積成に係る常職に則り、殆ど無意識的に行動して支障なき事項極めて多し、事々物々に就きて考慮を運らすは生活に煩累を重ねるの外、何等利益あるを認むる能はず。人性は明確を欲して止まざるも、未知不審は吾人を圍繞して盡くることなし、眞實の泉水と聞かば一掬の勢は以て渴を癒すに足るべし。人間は積成したる事物思想に據りて生存すべきものなり、之を侮蔑せんか勢の孤立の地位に陥るべし、斯く思想事物には數多あれども、信用希望、戀愛に特殊の威力ありと知るべし。

複雑なる社會に適應せる簡要生活を營み得たりと假定せんか、二三の表面的満足を犠牲に供し、二三の兒戲的功名を放棄したるに比し、幸福の上にあつても將又正道の上にあつても遂に優れる能力權威を收得したる所に感激を深うすべし。斯く效果は私生活と公生活とに至大の影響を及ぼすものにして輝かんと熱狂する傾向を拉ぎ、慾望を満たすを以て活動の主眼と爲す

を止むると共に穩健なる趣味嗜好を誘致し、眞摯着實なる世態を現出するは家庭を堅固にし、家内に良習を伴ひ來りて子女の教育に裨益を與ふべし。斯くして青年が高尙にして而も實現し得べき理想に向ひて行動するに於ては内容的變態は漸次に發展して外界に勢威を及ぼし、遂には公衆を感化するに臻るべし。如何に機械は改良せらるるも、工夫の伎倆にして低下せんか、所期の好果を收め得ざるに止まらず、反つて機械の破損するを虞れざるを得ず。社會が複雑を重ねるに従ひ、個人の一層堅固にして粘着力に富むる肝要とするは社會生活の結合を圖る上に至大の關係あるが爲なり。

第一章 家庭

家庭は神聖なる天然の律令に基づける最小限の集團にして人爲に成れる各種の會社組合に比し遙に優れる所あるは當然なりとす。其の勢力に根本的なる所あるは社會の構成上缺くべからざる要素を爲し、國家の分子としては恰も生物の機構に對する細包の如き關係を有するに由るなり。而して各自の生存上に關しては活動の標的たるに止まらず、恩愛を養成すると共に威力名譽快樂等の源泉を爲すなり。

家庭の組織

家庭の組織は高遠なるものの常として單純なり。家庭は夫。妻。子女の三要素より成れる調和的統合機關なり。夫は妻に依りて天意の深きを察し、妻に於て慰安の創作者を得べし。妻は夫に依りて天道の誠を悟り、夫に於て幸福の主唱者を見るべし。子女は兩親に依りて絶對の慈愛を覺り、兩親に於て眞摯なる道義の鼓吹者を仰望すべし。

家庭が成立を遂げ支持を完うせんには内部に於ける各種の組織的要素

家庭の要素

の發達を圖るのみならず、變化して休止することなき周圍の事情に適應して生活の慾望に酬ひ、自然の要求を充たさんと努むること肝要なり。されば家庭は特殊の官能を有する機關として種々なる變態を生じたるも、親權の統治を仰げる血族的集團たることは實に家庭の心髓たりき。然れども文化の度漸進み人倫の道大に具はるに及びては社會の安寧は純良なる家庭に俟つもの多く、殊に國家の秩序は奉公の念に充てる家庭に據らざるべからず。茲に於てか家庭は吾人の社交的生活の模範を提示すべく期待せられて慈愛に基づく權威。至誠無比の助力。及信賴深き服従の三者は完全なる家庭の組織に資すべき三要素と成り、血族關係に就きては時に或は絶對の必要を認めざることなしとせず。加之交通機關は顯著なる發展を遂げ、生存競争は激甚なる活動を促すの現代に於ては社會と家庭との間に存する相互的關係には密接なるものありて社會に發生する種々の事情は朝に影じ夕に響くの實なきに非ず、家庭は到底昔日の如く安穩の中に單純無垢の生存を營むこと能はざるなり。されば家庭は自主獨立の精神に據り、三

要素の發達に力を盡して安全鞏固を圖り、社會に對しては共益主義を重じ、自家の繁榮に資すべきを採ると共に有害なる勢威を排斥するに努めざるべからず。殊に積成の本義に従ひて傳來の家風に美なる所あらば之が保存を忘ることなく、新進勃興の家庭に於ては基礎を固め、永續の計を立つること肝要なりとす。

古來の傳説に従へば家庭は一定せる基礎の上に立ち、萬古不易の自然的規律の下に組織せらるる如くなれども、太古の家庭、黃金時代の家庭生活とは如何なるものなりや。アダム(Adam)及エーヴ(Eve)に一夫一婦の想定あるも、堯舜の世に一夫多妻を認めたる跡なきや、史前時代の遺蹟并に蠻人社會の狀態は近代に於ける文化の混沌たる事情に對し適切なる解明に資すべき材料を與ふるなり。蓋し社會に實在する各般の現象中には過去の殘物と往時の餘命とを認むるの外、永年の積成に基づく事實及當今の新案に係る事物は共存するなり。家庭は年月と共に漸次の發展を遂げ、變態に變態を重ねるなり、家庭は靜態に止まること能はずして、動態を呈しつつあるを

忘るべからず。家庭を以て時代と土地とに拘らず、一定の組織を保有するものと認むるは眞ならず、家庭に千姿萬態ありて幸福の程度様々なり、一進一退は免れること能はざるべきも、就中有益なる變態は大に驩迎せざるべからず。家庭の幸福を説くものは先づ第一に子女なるものを念頭に置かざるべからず、子女の出生、成育に關する事情を慮らずして徒に夫妻自身の和樂に没頭するは家庭の意義を轉倒するの誹を免るる能はず。

家庭の變態は自然狀態に起り、永年の權威狀態を経て正義狀態に達すと爲すにあり。而して第一期の家庭を母親家庭(famille materielle)とす、結婚の公認なき時代に屬し、母親は自然的家庭の全責任を負ひて子女は母親に屬して其の姓を襲ふものとす。第二期の家庭を父親家庭(famille paternelle)とし、父權の旺盛なるを特徴とす、結婚に依りて妻は夫に服従し、出生の子女は父の所有に歸す、夫及父なる男子は家庭の中心とし、組織上の要部と成りて家族の統率に任じ、妻女并に子女の扶養に當れり。第三期の家庭を兩親家庭(famille parentale)とし、夫妻平等の戮力共心を以て基礎とす、妻女の權利は壓倒

せらるることなく、生父の責任は漏脱すること能はず。自然及び權威の二期は去りて正義期の到來するあらば社會は夫妻の權利義務を監視し、子女の生存に對して擔保を加ふるに臻るべし、而して斯理想的家庭は夫妻の人格に充分の發展あるを必要とするに止まらず、兩者の絶對的共同に俟たざるべからず。

婦女の地位

婦女の地位は時代と共に推移せしのみならず、國々に依りて大に趣を異にせるも、畢竟するに家庭に於ける妻女の實權は人格境遇の如何に關すること深く、夫の物質的威力に對し均衡を保つに止まらず、往々之を凌駕すること珍しからず、制度の冷酷なるに比し慣習に穩健なる所あるを常とす。暴力期腕力時代の遺物たる男尊女卑は慣例と成りて存続するに至れるが、弱者は強者の保護に信賴するの要ありて從屬の端を啓き、夫は妻を守るべくして妻女に所有物件たるの傾向あるを示し、衣食に直接の關係ある仕事を賤しみて之を婦女に委ね、男子は自、獵漁争闘の業に任ずるは半開者の間に多く見る所なり。太古の人民間には制度上若しくは信仰

上婦女を劣位に置くを常とせるが、腕力に勝れ、知識技能に優れる所ある夫に對して妻女が或は之を畏敬し或は之を尊重するの結果甘じて從屬的地位に立つは毫、恠むに足らずして何等苦痛の存する所以なかるべし。往昔エジプトにありては男女は平等に近く、苦樂を共にせし跡あるを認め、ギリシアに於ける三從の掟は實行上大に緩和せられ、ローマは夫權(manus)及男系親權(magnas)を以て婦女に臨みしも勵行は反て除外例たりき。而して宗教の婦女に對する態度一樣ならずして基督教は男女を同等に看做すも、イスラム教は男尊女卑を認め、佛教は女人を除外せり、我が國にありては隔世遺傳的若しくは罪科的の行爲は別として未嘗て婦女に對し殊に虐待冷遇を加へたるの事實なきが如し。武力旺盛にして男尊女卑の風を誘致せしに拘らず、武士道は弱を援け強者を拉ぐの主義を唱ふるが爲、婦女をして兵馬政權に近づけざりしのみなり。教育の内容に於て處世の態度に於て今昔の差あるも、所謂婦人主義者(feminists)の主張する所は婦女の天性、女人の天職に果して適する否やは大に疑ふべき餘地あり。男子の欲する所必、之

を女子に施すに及ばず、男子の厭ふ所必、女子の苦む所に非ず、男女の差別愈、明にして協力の成績愈、大なるべし、男女各、の天資に發展する所ありて、男女の合成力に益する所多かるべし。分業を重んじ、統合を忽にせざるは文明の大本なり。

第一節 夫妻

家庭を機構上より觀察せんか、夫は頭腦に比すべく、妻は心臓に較ぶべし、夫は奮力的并に知識的の奮闘者として、生活の要衝に當り、便宜を計り、術策を運らし、専ら家庭の物質的生命を支持するに努め、妻は心性に頼むべきもの多く、寧靜の中に常態的生活を營み、人類社會に對して保安者たるの地位に立ち、定道を辿りて疑はず、目的に向ひ徐行して倦まず。

夫、女子は優美精妙の道義に基づき、伸縮自在の氣質に依り、感情に豊にして佳快に富めるのみならず、愛慕の念深く、處女としては可憐に思はれ、妻女としては貞節に知られ、子女の幸福に熱中し、豪犠性たるを厭はず、養老看護

の務に従ひて介抱の懇篤を盡す。斯、厚德を具ふべき婦女に對し、尊敬の意を表し、感謝の心を起こすこと素より其の所にして、ルソアの言へる如く、女子に勢威あるは男子が割讓したるに依りて之を所有するに非ず、天授の賜なり、享受せしと見ゆる以前に於て既に業に所有するものなり。夫として、女らしいきを妻とし、妻として、男らしいきを夫とするは、所謂相性の極意なり、長短相補ひ異性相資るは、連帶責任の本領にして、信用に酬ゆるに信用を以てするは、夫妻の根本義なり。男女各、其の人格を發展し、以て男子は男子中の秀者たらんと期し、女子は女子中の優者たらんと期すべし、所謂男優は、家庭の人たるべき女子として、貴重視すべきものならず、而も彼を以て特能の家庭に必要ありとするは、別個の問題なり。柔和の效力顯著にして、猛虎を羊化せしむべく、親切の功能甚少ならずして、軍鶏も鳩視せらるるに至るべし。夫妻間の幸福は、男女各、其の處を得て、自性に適する任務を遂行するにあり、然れども夫妻の間に於ける圓滿なる關係は、一朝にして完成せらるるものに非ず、之が實在を見んには、相應の時限と努力とを必要とせり。蓋し

夫妻の思想氣質は徑路の多少異りたる教化に成れるものなれば之が融合を實現せんには肝膽相照し誠意を盡し忍ぶべきを忍びて互譲の趣旨に反らざる様努めざるべからざればなり。目途は一なるも夫は主動的に直行せんとし、妻は受動的に參考の資を供し、彼は實際に適する良法を案じて共同生活の實體を捕捉せんと努め、此は共同生活に優美の徳性を添へて圓滿なる姿相を享有せしめんと心懸くるなり。

夫にして相應の知識技能を携へ、幾分か社會の事情に通ぜんか、生存競争に堪ゆべく認められ先輩として指導の任を完うすべきが故に妻の尊敬信用愛慕を享受し得ること當然なりとす。而も幻滅は消散し估料は損失に歸するの不幸に沈淪することあるは畢竟夫妻の間に不調和の存するに原由し、率いて家庭の擾亂を誘致するに臻ることなしとせず。然れども結婚の初期に起り易き現象としての不折合は沸騰質の愛情と共に滅却するも真情眞意の發達するありて家庭は漸次に堅固を加へて子女の出生に鑑を得て一層安定なる状態を呈するを常とす。

相互的教育は夫妻の間に行はるるに止まらず、親子の間にも行はるるなり。両親は子女に對して教育を施し、公德私徳の實踐を促すに當り、子女の成長するに従ひて恩愛の深きを悟り、両親の關係を濃密にし、心情を融和し、一致を鞏固にす。斯の如くにして子女の勢威は多祥多幸にして繁昌の中に家産の支持を完うせしめ、發達を遂げしむるなり、利己主義に偏せる獨身者の夢想にも浮ぶことなき幸福は義務の遂行、自然の要求に應じたる賞賜として授けらるるなり。

完全なる家庭の成立に缺くべからざる三要素たる夫妻子女の間に於ける關係は社會の影響を蒙り制裁を受くるを常とするが、殊に國家の干渉に頗る強力なるものあるを忘るべからず、夫妻の關係は結婚に依りて安定せられ、親子の關係は親權に依りて限定せらる。

結婚 結婚は自然の律令に據り、人類の永續を完うせんとする人生の本なり、縁組ありて始めて男女は夫妻の連鎖を固うし、或は新に家庭を起し、或は既成の家庭を保存せんとす。而も土地氣候等の如き自然的素因の

單婚状態

影響を被り又は信仰制度等の如き人爲的事情の干渉を受けて男女の關係に種々なる變態を生じ、夫妻間の關係も一樣なること能はず。一夫一妻即單婚状態(monogamie)は理想的結婚にして其の起源甚古く、子女の育成、血統の純粹子孫の繁榮等に適するのみならず、婦人の眞價は認められ、品格の崇高を致すに臻るなり。而も自然の理に悖る所あるに拘らず、温熱の熾烈なる地方文化の振はざる社會にありては、今に重婚状態(polygamie)の行はるるあり、分かれて二派を爲す。其の一夫多妻即重妻主義(polygynie)は案外廣く行き亘り未開者の恥ぢざるのみならず、イスラム教徒の間には慣習制度等の容認を受けて公然行はるるが、婦女の品位は勿論揚ること能はずして、塾居の中に奴隸に似たる生涯を營めり。我が國に於ても封建の世には民間にありても尙公然して憚る所なかりし、蓄妾(concubinage)の如きは一夫多妻の變態に外ならず、血統を過重視したる時代に於ては子なきは去るの殘酷事を避くるの利ありしならんも、現今にありては淫樂として排斥せらるるは是非なき次第と云ふべきも亦富豪の誇とせし舊慣の遺物とも見らるるな

重婚状態

り。其の一婦多夫即重夫主義(polyandrie)は子孫の繁榮を阻碍し、社會の秩序を亂だすものとして進歩したる社會は嫌忌するに拘らず、文化の低き部族間には行はれざるに非ず。而して婦人の賤業(prostitution)は購買式の一婦多男状態を呈するも、實際は所謂雜婚状態(promiscuite)を誘致し、家庭に對し大に忌むべき惡影響を及ぼすことあるに拘らず、其の性質より考ふれば特殊の社會政策として論ずべきものなりと信ず。

結婚の標式

結婚の標式 人類出現の初期に於ける配偶は優勝者の獲物として掠奪式に依りしが如く察せらる、體力盛にして腕力強きものに非ざれば帶妻するを得ざりしも、子孫の繁殖には反て適切なりしならん。爾來拐帶式も加はりて部族の成立に資すること多かりしが、最廣く行はれしは購買式(matrimoine)にして低度の部族間には今に實現しつつあり。而して稍進歩したる種族間に於ては專、贈與式に従へるが、婦女を以て物品視するを例とせり。然るに文化に一段の發展ありて強威は漸次に去り、婦女の待遇は改善せられ配偶者の納得に俟つに及びて自然式若しくは自由式は現はれたるも、最高の

開化者は進みて保護式を採用したるが、親權・知人・鄰保の容認に依れば内縁式(clandestine)と成り、國家の干渉を受けて適法式(legitim)に改められ、其の他に契約式(contract)、宗教式等も存するなり。

而して結婚の決行を促進する所の動機は様々にして道理便宜財産政略名譽相性戀愛等を以て普通とするが、成婚の效果に關すること少なしとせず。就中家庭を支持し得るや否やを顧ることなくして夫妻生活に入り親子の關係を完うし得ざるが如きは思はざるの甚しきものと云ふべし。結婚は如何にも一生の大事なり、之を決行せんには内に顧み外に察する明なかるべからず、男女に於て各眞正の自我を覺り得て自由愛情所有同情等の一に偏することなく、全成を旨とし、共同生活の眞善美に盡さんと期して始めて理想の結婚は成立するなり。意志強く行爲固く、所期を貫きて始めて家庭の幸福は實現せらるるなり、然れども斯事實の現存を見ること極めて難く、到底空想たるを免るる能はざるべし、諺に壯者能、知り老者能、働かば世に不幸なかるべしと玆に於てか保護式結婚を以て比較的安全なるものと

離婚

認むる所以なり。

離婚。離婚を以て貞操に反すと爲すに理由あれども、其の原由様々にして當然なるあり、止むを得ざるあり、避け得べきあり、狼に非行惡徳と斷ずべきに非ず。姦通犯罪に因るものは當然なり、惡疾不和虐待等には止むを得ざるものあらん、而も不用意無造作等の如き避け得べき事情の下に起るもの案外多きは遺憾なりとす。然るに離婚に對する風俗習慣信仰制度の態度は土地と時代とに依りて同様ならず。ローマ公教は離婚を絶對に否認し、ギリシア正教は姦通に基づける離婚を認むるも犯行者の再婚を許さず、耶蘇新教・イスラム教は容認す、イタリヤ・エスパーニヤ・ポルトガル并に南アメリカの諸國は結婚不離主義を守り、オーストリアは舊教徒以外のものに離婚を許容し、アメリカ合衆國に離婚し易きも、スイスマンマルク・オランダは條件の下に離婚を承引し、イギリスは國會の宣告を必要とせり。我が國に於ける離婚状態は頗る面白からず、明治十六年の離婚數は結婚數の三分一に近かりしに、民法制定の今日に於ては六分一に減退せるの事實あるは

悦ぶに足るも、所謂内縁式の結婚に離別者多くして實際の總離婚數には樂觀を評さずと云ふ。

離婚(Divorce)は夫妻間の相互的利益に基づける適法の行爲にして結婚に關する權利義務を解除するものなり。而して離別(Repudiation)には逐出と振捨とを分ち得べし前者は夫が單獨の權利に依りて妻を去る行爲を云ひ、後者は妻が夫家を逃出でて夫に離別の行爲を促すを云ふ、共に内縁式結婚の效力を解除するに足るなり。

再婚 母親たる義務を重んずるもの又は貞操を守りて兩夫に見えずとの信念深きものたりと雖、獨立生活を營み難きか、身を寄するの道なきときは止むを得ず、再婚の舉に出づるならん、不幸の極なるべきも亦止むを得ざる次第にして社會が斯事情の下に行はるる再婚に對して何等異議を唱ふるの餘地なきなり。原來女子の一人一生的貞操は女子の美德として尊敬すべく、斯、貞女は女性の理想的傑作として崇拜すべく、私徳として實現を望むべきものなるに拘らず、公德として衆人に待つこと能はざるは遺憾なりと云ふべし。現時の社會は一夫一妻主義を以て家庭の安寧を保持する上に最も有力なりと認むるに止まらず、特に子女の養育上に必要なりと判する

再婚

なり、然れども自覺心に乏しく身を處すること輕浮にして從て離婚すれば從て結婚するが如きは殆ど多夫多妻の蠻風と選ぶ所なし、家庭の安定は勿論子女の養育に危害を及ぼすこと大ならざるを得ず、破倫的の醜行を以て論ずるも苛酷ならざるべし。

戀愛 愛情は家庭の生命に對し重要な地位を占め、家庭に起る萬般の事實事件に交渉深く、就中夫婦の愛情には一層有力なるものありて、家庭の安寧幸福に及ぼす影響頗大なりとす。抑、愛情なるものは、被愛者が善若しくは幸を享受するに對し快を分つにありて、夫妻間の愛は相互的に、獻身的なるを必要とす、然るに我が國に於ける古來の慣習は親子の愛に重きを置き、盛に孝道を唱ふるに拘らず、夫婦の愛を等閑視する傾向あるは奇と云はざるべからず、親子の愛は人類永續の根本問題に關するを以て之を積極的に重要視すること當然なれども、夫婦間の關係に就きては和合を旨とし消極的の要望を以て満足するが如き態度に出づるは解し難し。或は夫婦の愛は性慾に關すと爲して嫌忌するにや、或は羞恥を以て之を蔽ふに

利ありと爲すにや、夫婦の愛は特殊の友愛にして兩性的なるに依りて差別を明にするに相違なきも是、天然の原則が命ずる所に係り何等忌憚するの理なきのみならず、羞恥の加はるありて一段の進趣を認むるが故に文化の賜とし、吾人特有の性情として大に誇と爲すべきものなり。而、夫婦の愛は茲に終極を告ぐるに非ずして僅に端を啓きたるに過ぎず、偕老の契を實行し眞に苦樂を共にせんとあらば自然の成行に任すが如き、本能的趨勢のみに依頼するが如きは甚、心許なき次第と云ふべし。而、世には無辜と無智とを混同し、無知識を以て無邪氣と誤認する謬説ありて處女と新婦との兩生涯の間に高壁鐵塙を築くなり。斯、問題に關しては教育は家庭に於けると學校に於けるとを問はず、極めて卑怯なるを常とす、或は絶、智、主義 (Obscurantisme) に依りて情火の絶對鎮滅を圖り、或は誘、導、法 (Deviation) を用ひて愛情の發生を阻止せんと企つるなり、現代の事情を洞察するの明なくして從來の姑息策に拘泥し、不知を以て美德と崇め、愛情に對し暗々裏に非難を加へ、或は明確なる排斥を試みるも、潔癖を免れ難き幼稚なる誘導に依りて轉向に努力す

るも、畢竟するに巧智にして有效なる手段なりと認むるを得ず。生來の要求として早晩出現すべき事實に就きては育成期間に於て先見的に概念を與へ、幸福の源泉に對して高尚なる思想を把持せしむるは頗、機宜に適せるものと信ぜらる、神聖なる情火を永遠に保たんと欲せば之が燃焼に關する原則資料を了知すること肝要なり。然るに不可解なる慣習に捉はれて戀愛の本義に對し、或は嚴格なる態度を取り、或は蠲、殺、追、放 (Ostracisme) を宣告して所謂依らしむべし知らしむべからず主義を施行し、本能の誘致に委せんか、自然は其の勢威を逞しうし、環界の事情に複雑を極むるものある今日にありては動、すれば卑低なる享樂を鼓吹し、賤劣なる感想を挑發し、之が爲に高尚なる戀愛の好伴侶たるべき安固なる幸福を收受すること能はざるの虞あり。抑、戀愛なるものは當初にありては自然の衝動に左右せられて根柢の深からざるを常とし、思想に係はる特狀の如きは副次的たるに過ぎざるなり、從、て相愛者間の關係は頗、單純にして相互的たるの事實あるに拘らず、畢竟するに快樂の器、滿足の具を爲すに止まれり。然るに時日を経ると

共に協同生存は親密を加へて其の趣旨は漸次に限定せられ各個の價値が認識せらるるや兩者は互に幸福を呈供せんと努力し率いて、獻身的優境に進みて一心同體の事實を現出するに臻るなり。

翻て或は二十歳前後の女子に就きて察せんか、或は二十七八歳の男子に就きて考へんか、彼に如何なる處世的の覺悟ありや、此に如何なる社會的經驗ありや。男女相愛の根本を辨ぜず、夫妻互助の基礎を解せずして眞個の家庭を創始せんとす、暗夜に燈火を携ふることなく路を行くが如し、誘惑の坎阱に陥り、失望の深淵に沈むの嘆あるは敢へて恠むに足らず、空想に驅られて極樂を虚構するの結果は地獄を現出するの實際に逢著すること罕ならず。戀愛の眞想を感得するに非ずんば眞正の幸福を享受し難し、徒に快樂を追ふものは逃げ去る幸福の陰影をも蹈むこと能はず、艱難を恐れず、辛苦を厭はずして始めて幸福を得るの道に達すべし。幸福は獻身努力を避くることなき高尚なる戀愛の賜なるべし、現世を蔑如して玄妙不可思議なる空想を抱くは愚なれども、物質に惑溺して卑陋なる實際に捉へらるるは

更に愚なり、自然に據り實際を離れずして而、積成の援助を仰がざるべからず、事實に基づき幸福の根柢を築造し、思想の活用に依りて不足を充たし、不満を補ふに努めざるべからず。眞正なる戀愛は、最高の幸福に對し、無比の幻覺を興ふるが故に尊敬すべし、些少の愉快を倍蓰し、廓大する上に極めて必要なる無限の素因として戀愛は貴重すべきなり。

戀愛の學說

學說

エンペドクレス(Empedokles)は戀愛を重視して生物界の秩序を支配する力ありとし、ヘラクリトス(Heraklitos)は之に反して戀愛を以て相反の誘致に過ぎずとす。ソクラテス(Sokrates)は風俗の純潔を保持するに必要なりと斷じて戀愛を天界の愛と俗界の愛とに分ち、甲者を尊び乙者を卑みたるが、プラトン(Platon)は戀愛を以て美妙の特質なりとして思想界の専有を主張し、婚姻は子孫を永續するの手段に過ぎずと唱へて愛の眞相を認識すること能はざりき。アリストテレス(Aristoteles)は戀愛に男女を結合するの力ありて家庭の基礎を爲すと斷ぜしも、エピクロス(Epikuros)は性慾より起る發散なりと誤認したり。然るにプルタルコス(Plutarchos)は肉慾説を排し、空想論

を斥け、始めて穩健なる戀愛觀を披瀝して、端を性慾に發する戀愛は進化するに従ひ、高尚遠大の素質を具ふるに至ると爲し、夫妻の愛情に正當なる美質の存する次第を明にすると共に相愛者は互に尊敬せざるべからずと唱道したり。

ブルタルコスに従へば婚姻は人類社會を永續するに止まらず、戀愛と相俟ちて吾人の性格に進化を促さざるを得ず、戀愛は家庭生活に情味を添へ幸福を與ふるのみならず、吾人の享し得べき友愛中の最良なるものたらざるべからず、彼は女人に對し古來稀なる敬意を表し、婦徳の美質を詳にし、妻女の如く戀愛深きものは亦戀愛を享受すべきものなりと斷じ、而も夫が妻を愛するは正當なる報酬たるのみならず、婚姻に對する保證にして幸福の源泉なり、蓋し斯く愛情は夫をして家庭の危害を醸すの因を爲すべき過失を避けしむべければなり。

ステンダール (Stendhal) に依れば戀愛に熱烈趣味容姿浮華の四種ありて愛情史上の主腦たる現象は戀愛の初期に於ける狂態にして想像的に構成せられたる幾多の美觀優趣を裝へるものなりと云ふ。

ミシレー (Michelet) は戀愛の二面を研究して宿命に係る方面は生物としての關係深く道義に影響を及ぼすこと至大なりとし、自由意志に據る方面は道徳の掣肘を蒙むること多しとせり。戀愛は他の自然力と同様に持續・改新・變態等の勢威を受付て規律秩序進歩に交渉するこ

と淺からざるが、殊に婚姻に於て順當なる發展を遂ぐるを常とせり。戀愛の宿命的及び生理的素因を重視するの結果、婦女を遇するに病者を以てし、其の我儘勝手は屢、苦痛より來り、思想意志に持續なきを咎むべからず。不頁の職工としては創意に乏しく成績の舉らざるを惟む勿れ、弱點の夥しきが爲、過失の多くは情狀に酌量すべきものありて責任を問ふこと能はず。新婦をして我が妻たらしむるに充分努力せざるべからざるも、煩雜を省き多忙を避くるに及ばず、靜寧を旨として世間を遠かり、身神の健康を保持するに注意せんか、戀愛の喪失を憂ふるの要なかるべし。

變遷。戀愛は吾人特有の性情として積成に因あること勿論なれば變遷變化を重ね進化墮落の實狀を呈すること當然なりとす、各自の體質・容姿・性質・習慣・教育等に據り、風土・衣食住等に關するの外、時勢・風潮を始とし、道徳・信仰・制度・法律等の影響を蒙むること極めて深し。

我が國にありては上古に於ける結婚狀態は既に改善せられて一夫一婦主義に相應の發展ありしに拘らず、一夫多妻の外、一妻多夫乃至雜婚も尙行はれて男女間の關係は頗る露骨にして野卑なるを免るる能はざりき、而も我が民族に尙武の風ありしと雖、元來溫和にして淡泊洒落なるが爲、求婚上に

戀愛の變遷

本人の戀愛

強奪の跡少なく、女性には勇者に就くを歡び、男子間の競争は激烈なりしが如く察せらるるも、戀愛の情は甚だ淺かりき。中古に及びては制度の改善、美術工藝の發達に伴ひて優雅を尙ふの風起り、奈良朝に至りて才子佳人の世たらんとする端を啓きたり。平安奠都以來、支那文化の影響漸著しく、優雅なる紳士現はれ、藤原氏の外戚政策に伴ひて婦人の勢力大に加はりしも、女子の習得せし特技は、書方、和歌、音樂に限られ、徒に神經過敏と成り、羞恥の變態として閉居するの奇習を馴致し、髮の毛、檜扇に深き注意を拂ふに止まり、個人主義を善用すること能はずして未婚期に於ける女尊男卑も既婚後は忽ち一變して男尊女卑の狀を呈し、離婚を忌まず、再婚を厭はず、戀愛は輕薄にして執着の念に乏しかりしも、富貴權勢に媚びるの次第には盛なるものありき。殊に平家の世には武士の女房たるを榮とするに至りしが、戀愛の標式は依然として藤原風を襲踏したり。近古は武家の時代にして意志を重んじ、優柔の風を卑み、戀情に脆きは勇士の恥辱なりと信じて女子の人格を認むることなし。鎌倉期に於ては簡易質朴を旨とし、氣節を尙び、京都式の文

弱を忌みて田舎式の武強を發揮せんと勵みし結果、女子に心を許すべからずと斷じたるに拘らず、政略結婚は盛に行はれたり、女子を物件視するの傾向ありて離婚は頗る容易なりしが、總領制度は女天下、男勝の現出を誘致し、戀愛に基づける貞操は稀なりしなるべきも、義理を辨へたる節婦烈女は少なからずして武士の妻たるを恥しめざりき。室町期に於ては俗化したる佛教の勢威漸加はりて盛に戀愛執着の罪惡觀を説きしに拘らず、國人の情事を解し得ざりし爲にや、女性の意志勇氣は漸次に修養せられて貞操を死守し、現在世に満足し難き戀愛は未來世を期するに憚る所なかりき、然れども一面には政略結婚は依然として行はれ、殊に戰國時代に一層多くして、權力爭奪の爲には親子の情をも犠牲に供するを厭はざる際に、夫妻間に於ける相思相愛の如き事實を顧るに遑あらざりしは是非もなき次第と云ふべし。近世即ち江戸時代に及びては佛教道德は漸廢れて偏に程朱の學說を尊信し、忠孝の道義を重んじ、男女別あり、夫唱婦從を提げ、女大學を携へ來りて婦女に絶對的の服從犠牲を要望せり、妻女は家の内實たるに拘らず、戀愛の標的

たること能はずして子孫の永續を口實とする蓄妾は容認せられ、世襲の家祿は奉公を專一にすべく命ずるが故に嗣子は家産一切に内實をも併はせて總領するを例とし、婚姻に關しては動すれば利慾問題の伴ふこと珍しからず、而して都會に居住する町人は武家風に化するの趨勢を呈せしに拘らず、田舎には平安式の遺風の殘存せるありて放縱的戀愛の跡をも認めたりき。斯の如くにして我が國に於ける戀愛は上古の自然式より一進して平安式に優趣を具へんとするの傾向ありしも、感情に走りて高尚なる智覺の援助を缺きたるが爲、柔弱に陥り、良好の結果を積成すること能はざりき。然るに武門の世と成りては克己を旨とし意志の鞏固を誇らんとする趨勢現はれて男女間の關係に壓迫を加へたるに止まらず、佛教は戀着を罪惡視し、儒道は女子を小人視したるが爲、戀愛は上進するの機會を得ず、勢、思想界に對しては賤劣の地位に居り醜惡卑陋の感を起こすに過ぎずして遂に家庭以外に驅逐せらるるの非運に陥りたり。茲に於て戀愛は邪道を辿りて異常の變況を呈するに至りたるは是非もなき次第と云ふべし、采女、女房乃

至大奥及び御殿の女中に對する非難を別とするも、武門の威力が天下に普及すると共に白拍子、傾城等に漸次の發展ありて遂に都鄙に行き亘りたるが如く推せらる。殊に元和、偃武以來士氣を緩和するの要ありて懷柔策上に遊君、歌妓を利用するに及びて一段の盛況を呈するに臻りたり、而も徳川時代の中葉に於ける通人の粹道は虛榮を基とし淡泊を旨とせしが、末期にありては遊蕩も墮落の極に達して戀愛に對し殆ど没交渉なりき。

斯の如くにして維新の世と成り、泰西諸國との往來繁く、文物大に改まり、百事歐風に則りて自由を鼓吹し、明治の革新を誘致せしが、戀愛も亦局外に立つこと能はず、歐米の風儀に憬憧して傳來の感化を捨てんとする傾向あるは必、憂ふべしと云ふに非ざるも尙、寒心すべき點の存する次第に留意するの要あり。蓋し東西事情を同じうせず、積成の效果均等ならず、古來の變遷に鑑み、社會の狀態に斟酌する所なくして猥に彼の風を採用せんか、慮外の結果を招くべき恐なしとせざればなり。

抑、西洋方面に於ける戀愛たるや、性質勢威に於て大に趣を異にせるのみ

ならず、太古中古近世の各期に於ける特情に著しき變差は存するなり。太古にありては戀愛は常に外形を主としギリシア及びローマの社會は容姿の優麗なると子女の出生あるとを專一として婦女は欲求せられしも、所謂戀愛の標的たることなかりき、要するに太古式戀愛は頗る單簡にして宿命の致す所と認められ、不可抗なりと斷ぜられたり。然るに中古に及びては北國人の習慣と耶蘇教との二大勢力は戀愛に對し非常なる變動を惹起したり、耶蘇教は婦女の地位を高めて人格を認め、權利義務を承引せしのみならず、婦徳を尊び、女子の名譽に對し敬意を表すべく促したるに止まらず、北國人は一般に女人を尊重するの外、殊に女傑女僧の權威に服せし結果、男女の間に差等なく、平時と戦時とに論なく、勞役を共にし、危險を分かちたるが、兩者は相俟ち相依りて所謂騎士道戀愛は現出するに至りたり、騎士道戀愛は大業の鼓吹者、名譽の源泉と成り、婦女は功績の分配者、軍人の心意と化して、武勇と戀愛との提携を誘致したりき。中古と共に騎士道戀愛は終りを告げ、近世に入りては文藝復興の影響を受けて第十五世期には清淨戀愛の憧憬せら

るるを見たる後、小説的戀愛、慇懃式戀愛に轉化したりき。第十七世期に於て盛を極めし慇懃(Galanterie)は婦人に對する熱誠と尊敬との混同に成りたるが、俗化したる騎士即實義の人(紳士)は各處に散じて慇懃道を鼓吹し、男女の交際を指道したり、斯の如くにして慇懃は女子の社會に於ける地位を示す特徴を爲したりき。然るに第十八世期に及びては慇懃は墮落して上品なる放逸と化したるが、革命は舊制度と共に思想感情を驅逐して戀愛の如きも太古の素朴に復歸するを當然なりと主張したり。第十九世期の始に及び王政の復舊と共に戀愛は傾向を一新して憂鬱を帯び、夢想に走り、無限を渴仰するの結果は戀愛をして自然の眼目より遠からしめ、漠然として不定なる二様の感想即自然の情操と形而上若しくは宗教的の煩悶とを交ゆる戀愛には活動及び實際を卑み、現世の生活を嫌忌するの趣あり。

趣味 趣味とは美を感じ之を鑑識する能力を云ふなり。狹義に依れば極めて自己的の感覺と成るが故に趣味は争ふべからずとの諺あれども當らず、純粹なる物質的事實に對する好惡は個人的肉感の結果に外ならずし

て評決の標的たること能はず。而も審美に關しては智の活動を必要とし、判断には理據なかるべからず、ラブリイール(La Bruvère)は趣味に善惡あり、理據ありて始めて趣味は上下せらると言へり。

美には萬人の齊しく感受し得て蒙、係争の餘地なきものありて趣味の干渉を俟たざるなり、從て前記の美に關する定義は廣きに失するの缺點あり、趣味ある人は美に就きて他人の捕捉し難き細差を知覺するのみならず、此の細差間に存する調和を認識し得て一般の好感を享受し、不釣合激感喧噪等を嫌忌す、趣味は準度精佳調和に係はる微妙なる感情なり。

趣味は智的要素を包含するが故に感覺の主觀作用を免るると雖、判断は場合豫想環界の慣習等に關すること淺からざるが故に趣味も亦時代に從て多少の變化を現出す。是、趣味に對して教育を施さざるべからざる所以にして一派若しくは數派の美術を研究するに因りて美育は行はるるものなるも、特殊の研究に據らずして屢、美術品に接觸するの機會だに充分ならんか、趣味は形成淨化せらるべし。

モンテスキュー(Montesquieu)に從へば趣味は事物が吾人に喚起する快樂の準度を敏捷に發見するの情勢にして、快樂趣味は各自の特有に係る機構の狀態に依りて全然左右せらる。趣味に自然と修養との二種を別ち、甲者は未詳の原則を敏捷に而も本能的に適用するにありて、乙者は快樂の源泉より生ずる理論的知識に據れり。斯、源泉に就きて主要なるものを掲ぐれば好奇秩序等勢變化對照意外等ありて數者は共同して快樂を助成するに與るを常とす。

趣味の育成は快樂の豊富と向上とを實現するに力あるものなれども、未成年者に對しては大に斟酌すべきものある次第を了知せざるべからず。美術的作品に就きては審美上より主觀的と客觀的との二派を設け得べし、前者は作者の感得以外に好事家の個人的勢威が多く加はるべきものと云ひ、後者は好事家の勢威は收縮して作者の感得に左右せらるゝの傾向あるものを云ふ。斯、見地に立ちて美術の趨勢を審にせんか變差著しく細差の微を極むるを了知すべく、音樂彫刻繪畫の主觀的にして能辯詩文の客觀的

なるは疑ふべくもあらず。而も近代の音楽彫刻繪畫の三者には作意の忠實ならざるが爲、往々善果と惡果との二面を具備せるに留意せざるべからず。漠然たる趣の存する音楽并に意匠の正確なるを特徴とする繪畫彫刻は等しく審美的感動を保定するの威力を缺けるが、能辯及詩文は聽者及讀者の自由解釋を拘束して客觀的の根柢を確守せり。娛樂に壓迫を加ふるは畢竟するに人性の根本を認知し得ざるに起因す、審美的娛樂に高尚優美なる幸福の包含せらるるに拘らず、世人の多くが之を顧みること能はざるは趣味の教育を怠りて美の觀念を缺き審美の大要を辨へざるに原由するなり。審美的感動を誘致して卑陋なる肉感を追放するは乾燥無味なる嚴格を裝ひて内心に胚胎せる煩悶を壓迫するに比し、遙に優れる所あるに止まらず、自然の要求に適ふが爲、安全にして永續の餘地あるに留意せざるべからず。或は趣味的娛樂を以て所謂道樂と混じ、書畫骨董の愛玩と同様に視るものあらんも、誤解謬見の甚しきものと云ふべし。蓋し書畫骨董を愛玩する者の多くは審美の原則を辨へず、作品の優劣を判ずるの能力を缺くが

故に徒に落款箱書付等に重きを置きて擬物劣作の横行に意外の損失を招くものと自選を異にすればなり。

然り而して趣味は音楽・繪畫・彫刻・建築・詩文・能辯・舞曲の如き真正美術に専ならずして器物・衣服等に關する美術品に及ぶものなり。又自然の美を賞觀する上より山水禽獸・花卉等に對して交渉多く、旅行栽培・插花・造花等との關係淺からざるなり。

趣味の効力

愛嬌

趣味が家庭に及ぼす影響に頗著しきものありて娛樂の淘汰を行なひ、夫妻の和合に資し、子女の教育に盡すべし。殊に婦女の美德として稱揚し、婦女の魔力として憧憬せらるる愛嬌に關連すること尠ならず、婦女の美容は自然美として愛嬌に益する所多かるべきも、愛嬌は美容を以て必須缺くべからざるものとせず。愛嬌は外に現はるるも内容の發揮たらざるべからず、内容の伴はざる外形美は飽き易く持續し難し、人或は言はん愛嬌は天賦の賜にして生來の情勢なり、之を涵養せんと欲して能はず、之が助成を圖りて得る所なかるべし、梅花の香、薔薇の葦、百年待つも、千歳の後も、薄は遂に

薄に終り、薊は遂に薊に終るべし。是、努力の勢威を無視し、積成の効力を認めざるに座するのみ、人に賢愚あるが如く、愛嬌に厚薄あるは事實なり、而も愛嬌は神心の活動に關す、神心の活動は恰、炎の如し、教育には之が明滅盛衰を左右するの力あり、趣味の教育は愛嬌の發生發展に貢獻すること、案外大なるものあるを忘るべからず。蓋し愛嬌は主として言語の表示する所に係れり、趣味ある心に趣味ある語あり、趣味ある思想に趣味ある詩歌あり。姿容ある婦人は外形の美人なり、趣味ある婦人は内心の美人なり、前者は年と共に銷沈するの虞ありて、後者は年と共に發達するの望あり、文化の力は天然を利用するに止まらず、生來の不足は教育に依りて補はざるべからず。而して我が國に行はるる趣味的娛樂には、能辯式の講談あり、歌劇式の能樂あり、箏曲の外に各種の俗曲ありて、語物を主とす、興味に乏しからざるも品格に缺くる所あるを缺點とす。されば家庭用として採擇し得るは、謠曲、箏曲の二者に限らるるが如し、近年蓄音器の流行漸盛なるも、趣味に適ふと云ふべからず。

第二節 親子

風土天産の人生に及ぼす影響に甚しきものあるのみならず、自然の状態を均しうするも尙、道義的事情に差異の存するありて、慣習に柔和なると冷酷なるとの別を生じ、子女に對する態度に様々なる狀況を呈するなり。

子女の運命は夫妻の關係に據るものにして、結婚事情の良否に基づく所大なり。新生兒は出産地に占居する部族の所有たることあるも、或は母親に專屬して母の姓を襲ひ、或は父親に直隸して父の族氏を冒すなり。子孫の繁榮は夫妻の間に於ける鍵鎖の緩緊に關すること勿論なるが、劣等の蠻族に限らず、半開者の間に行はるる墮胎、間引、兒殺等は、文化の進みたる社會にも今に隔世遺傳的に出現せざるに非ず、國法は斯、事實に對し、罪科として容赦なく嚴罰を加ふるなり。

子女の教育を自然の淘汰に委するが如きあり、親子の關係漸濃密を加へて、兩親は慈愛を以て子女に臨み、養育に努むるあり。我が國人は種族的素

因の致す所なるにや、温良なる點多く、子女を愛しむの念強く、親子の間に漲る融和の狀に美風具はり、殊に母親には驚嘆すべき獻身的情誼の存するは賞讃するに餘りあり。

親の子に對する愛情に深淺あるは個性の幸福と獻身の幸福との協合及、一方に於ける自己の愛と他方に於ける自然の愛との結合に強弱濃淡の存するに據るものなるが、子女は愛の產物擔保なりと云はんより寧ろ實在の愛、形態と生命とを具ふる愛、肉化したる愛にして父の生命と母の生命との擴張に外ならずとせざるべからず。親の子に對する愛には要素として利己の加はり居ること明なるも而も父母の間に均質齊一なることなし。母親にありては純粹に本能的たるに拘らず、父にありては情緒の發生が自然に基づくに相違なきも、社交・面目・血族との關係に依りて發展するを特徴とす。母親の愛は女心の最強最堅の動機たるに拘らず、積成上に交渉少なきを常とし、父親の愛は社會并に制度の狀態に顧慮すること多くして、家庭の組織、法律習慣の委託に係る親權之に對する父親の責任等に關連する次第を忘

るべからず。

子女の親に對する愛情即ち孝心は報恩の念に基づくこと當然なるが、父親に對しては尊敬を旨とし、母親に對しては愛慕に專なり、而も親の心子知らずの諺の如く親子の間には子對親に比し親對子の方遙に勝れるものあるが如し、無情の親より恩不知の子に多きを見るを常とす。蓋し親は子女の養育上に特殊の快感を享受するに止まらず、内外の事情に精通するが故に子女を愛むを以て正道に適ふと斷定し得るに當り、子女は生長するに従ひて記憶に淡き幼少期を去り、社會に出て生存競争の中に立ちて活躍に急なるが爲、自主・獨立の念漸く強く、親の干涉を厭ひ、報恩の志に疎く、多年の慈愛を忘却するに臻るもの罕ならず。而も子を持つて知る親の恩に感激して有る親は勿論、無き親にも事へる至情の發生するあらば幸なり。文明を飾れる世路に困難多く、之が爲に人情日に薄く、月に冷ならんか、姥捨山式の蠻風に再起を促すの虞なき能はず、然るに我が國にありては夙に孝道の唱へられし結果、忠君と共に尊親の異彩を放つは大に誇るべき所なり。

尙且一言を要するは孝道の實現は親子の間に存する相互的情誼に據るを本義とす、親にして親たらざるも子として子たらざるべからずと教ふるに異論なきも、眞の孝養を誘致するに有効なりやを疑はざるを得ず。親子の關係は養育と扶養との交換に止まらざること勿論なるも、親の子に俟つ所多きに過ぐるは面白からず。生の親より育の親に對し情愛の深きは當然にして扶養を必要とせざる親に孝子の少なからざるも事實なり、貧しき家庭に於ける孝子は親子關係の傑作なり、之に對し頌徳の舉に出づるは古來の良習なりと云はざるべからず。

親權。親權は子女に對して父親若しくは母親乃至後見人の行使する權利なり、子女を養育するの責務と妻女に對する權利の効力とに據りて生じたるが故に初期の人類間には絶對的の權力として無制限に行使せられ、子女に對して生殺を恣にせしことあり。家庭組織の堅實なりしを以て有名なるローマにありては家長(paterfamilias)は主人が奴隸に對して行使せし權利と同様なるものを子女に對し行使し得て子女を物件の如くに扱ひ之に

親權

禁錮を加へ死を與ふるを妨げざりき。然るに文化の進むに従ひて親子の關係は改善せられ漸次に親密を加へ恩愛を旨とするに臻れるが爲、親權に種々の變態を誘致し殊に我が國の如き夙に孝道を以て家庭の大本と爲せしが故に家庭の發達は平穩の中に進捗し、親子の間に存せし成敗の如きは、大に緩和せられて勘當久離を見るに過ぎざりき。而も近代の趨勢は家庭に對する國家の干涉漸著しく權限を縮小するに止まらず、時限を丁年未滿と定め、權利を行使する上にも監督を怠らず。されば家庭は子女を養育するの義務を負ふのみならず、教育に就きては學齡兒童として授けらるべき國定の教科に従はざるべからずして親權は專、徳義上の問題を解決處理するに當れり。要するに子女は自衛の爲に親權を仰ぐに過ぎずして、親子間の連鎖は專、慈愛(amour paternel)と報恩(piété filiale)との關係に俟つものなり。

子女の保護

子女の保護に關しても國家は默視すること能はず、或は虐待の防遏に努め棄子の養育を圖り、或は少年少女の稼業勞働を制限し、娛樂園、觀覽場の取締に注意を拂ひて怠ることなし。

兄弟 父母を同じうする子女は實の兄弟姉妹を爲し、父を同じうするも母を異にする子女を腹違、腹變、即ち異母の兄弟姉妹と云ひ、母を同じうするも父を異にする子女は胤違、胤變、即ち異父の兄弟姉妹と云ふ、骨肉の關係一様ならざるも、習慣記念互助、姓氏家風等を同じうするのみならず、殊に孝心の標的に共通なる所ありて最、精確なる標式を具ふる天與の朋友たり。然れども婚姻及、婿養子、入夫の縁組が離婚及、離縁に據りて効力を失ひたる後には妻たり夫たりし者は去りたる家庭に對し全然没交渉と成るを以て生母、生父たる事實の存すること勿論なるに拘らず、法律は之を公認せずして親子の縁は根絶せらるるなり、而も婿養子以外の養子に就きては骨肉の關係なきものあるべきも、同じ家庭の中、同じ家風の下に育成の力を盡すの結果、眞實の兄弟に比し情誼上何等の差異なく、又忠實なる乳母の養育に因みて所謂乳兄弟の實現する場合なしとせず、斯の如くにして育成上の丹誠に據れる人爲の兄弟は天然の兄弟と共に友情の濃なるを特徴とし、自由選擇に基づく友愛は天與に係る悌愛の一種なりと云ふを得るなり。

繼母 嫁姑の關係に悲劇あるも、多くは序幕一番目に限られ、喜劇笑劇に終るを常とす、而も繼母繼子の間は悲劇を以て終始すと稱せらる。繼子は子供として無邪氣たるべきものなり、生母を失ひたる可憐兒たるべきものなり、同情を受くべき不幸の境遇に沈淪すと察せらる、繼母は婦人として柔和なるべきものなり、慈愛に富める母として迎へられたるものなり、家庭の幸福安寧を再起すべく期待せらる、斯の如くにして繼子繼母の間には何等憂ふべきものなく、欽慕信賴の中に家庭は起死回生の思を爲すべきなり。然れども内外の事情に案外なるもの存し得べき次第を忘るべからず、家庭をして管に圓滿ならしむること容易ならざるのみならず、反つて危殆の地位に陥らしむることなしとせず。内には繼妻として夫に對する直接の關係あり、先妻に對比する間接の關係あり、體質氣性の同じからざるのみならず、死後離別後の差異に顧慮すべきものあり、繼母として繼子に對する關係あり、子供には多寡長幼男女氣質等の外、相互的關係にも留意を要するなり。而して外には隣保知友親戚等の圍繞するありて種々様々なる影響を

及ぼせるが殊に先妻の縁故者に對しては一層困難すべしと想定するは無理ならず、所謂世間の噂なるものは案外獨斷的にして家庭の漏出に由ること僅少なるに拘らず、實と傳へ真と宣して繼子を繼子らしくし、繼母を繼母らしくせざれば止まざるが如き情勢を現示することありて、繼子に僻根性不從順、向日向邪、推深き等を豫想し、繼母に邪慳意、地惡權柄、叱言多き等を豫斷するを例とす、加ふるに夫、子供等に對する同情には淺慮無遠慮、不當不條理等の伴ふありて動すれば繼妻繼母に不快の感、苦痛の思を誘起せんとす。生さぬ中に苦々しきことあるを承引せんも、生したる中に苦々しきことなしと云ふを得ず、生したる中の團樂は之あるべしと豫斷して之を認め、生さぬ中の團樂は之なかるべしと豫想して之を發見し得ざるのみ、敢へて珍とするに足らず。要するに繼子繼母の關係は先天的不折合なるべきものならず、自然は圓滿なるべく需求するに拘らず、人爲的事情就中周圍のオセッカイは繼母子を驅つて悲境に導くこと多きが如し、斯。困難なる任務と雖、母格を具ふべき資に乏しからざる婦人にして誠心誠意を盡し、忍耐と慈愛とを以

後妻

て事に當らば成功疑なしと斷じて可なり、彼の噂言の如きは遇するに良薬を以てし、之を服膺して自己を矯正するの具に供するの雅量あらんか、繼母視せんと期待せし周圍は一變して慈母賢母として渴仰するに躊躇せざるべし。生さぬ中の幸不幸は罹りて繼母の人格如何にあり、繼母の選擇が人格を專一とすべきは實際思慮ある婦人、淡泊無邪氣なる婦人、教育ある婦人殊に女教員に好成绩を擧ぐる者多きに因りて明なりとす。

後妻。然るに世間には思慮の淺薄なる失妻者ありて後妻を迎ふるの際、妻女の改良に汲々たるが爲にや、繼母の難を先知するの明なくして家庭の不和に辛苦を重ねるは自業自得と云ふべきも亦同情するに足るものあり、尙、特に一言し置くべきは繼母に對する非難の中には往々にして後妻に對する非難の混在に注意するの要あり、又後妻たる婦人にも對繼子策に没頭して繼母の任務に努力するの餘、殆ど妻たるの責任を等閑に附するものなしとせず、繼母として成功せるに拘らず、後妻として或は狷狹にして融和を缺き、或は單調にして慰安の策に疎く、遂に破鏡の嘆を發せざるを得ざるに臻

ることあり、而も子なき場合の後妻に好果を收め得る夫あるは経験の賜なるべしと雖、家庭としての評價を下だすの限りに非ず。

養子

養子 親戚又は他人の子を貰ひ受けて實子同様に養育したる結果は即ち養子にして、國家は養子縁組法に依りて養親子間の權利義務を實の親子間の關係と同様たるべく規定せり。抑、養子なるものは其の起源極めて古く、印度支那・ギリシア・ローマ等に行はれしが、家庭思想の進歩發展に伴ひて養取 (adoption) も亦漸次に整備を告げたるが如し、我が國にありては徳川時代に於て盛を極めしが、現今行はるる養子縁組の動機は一様ならずして家名存續の外、扶養育英等も存するなり。家名式は家庭の存續を旨とす、家族制度の自然的産物にして保守の義に適ひ、殊に舊家大家の間に必要視せられ、實子なきとき若しくは女子のみなるときに實現するを常とす、育養の原則上、未成年者を可とし、育養上に困難多く、丹誠を必要とする貰子は一層可なり、而して男子は目的に適合するも、血統上の見地より女子を採擇せざるべからざるは例外とす、而して成年の男子は多く、培養子として迎へらる、往時

養子

の弊習に顧慮するにや、將又俗説に捉はるるにや、現時の青年には養子たるを厭ふもの少なからざるが如し、次男以下に生れたるものにして、獨立獨歩、分家別家を創成するに對し、何等異論を唱ふるの要なきも、家族制度の結果として養子の必要あるに際し、身を挺して家名の存續に當るは善事なり、就中獨立獨行の出來得る男子にして始めて眞の養子たるの資格あり、斯く資格ある男子にして家庭存續の責任を盡すは美事なり、利己主義に依れる不義非道の卑劣漢にして往々養家の弱點に附入り、名實の相適はざる行爲に出づる者と同日の論に非ざるなり。扶養式は扶養の義務を遂行する爲、若しくは親戚知友等に助力を與ふるの目的を以て實子の有無に拘らず、育養の義務を負ふものにして、結果の良否を顧慮するに違あらざるの嫌あるも、資力に餘裕の存する場合は之に當るを可とす、普通の扶養と趣を異にする所に興味と共に利害も存するなり。育英式は資力に乏しき他人の子女に就きて前途に見込あるものを選抜し子として育養を施すにあり、學者・藝術家に限らず、有力なる家庭の大に驩迎すべきものにして、皆に家庭を益するの

みならず、間接には社會國家を利する所尠少なからざるべし。

第三節 單家庭及複家庭

夫妻子女の三要素を具へて家庭は完成せらるるものなり、子女の成長するに及びて新家庭を立つるに當り、各一家を特設すると否らざるとに依りて家庭に單式家庭と複式家庭との別を生ずるなり、前者は所謂個人制、別居制にして無造作なると事情の纏綿せざるとに利あるに止まらず、自主獨立の氣勢に富み、進歩發展を促すに便なるも、處世上の經驗に乏しくして靜寧を缺き、社會の風潮に靡き易く、安固ならざるの虞あり、然れども現代の生存狀態に適應するの長所を具ふるが爲、經歷なき偉大の人物に家を興こすの機運を與ふべくして創立的なるを特徴とす、近年に於ては我が國にありても別戸主義の漸次に擴張せらるるを見るなり、後者は所謂家族制にして直系式、傍系式、大族式等の數派を包括せるが、我が國に古來行はるるは主として直系式なるも、傍系式の罕ならざるのみならず、大族式も全然其の跡を絶

單式家庭

複式家庭

たざるが如し、直系式にありては長男は嗣子として家を継ぎ父母と居住を共にするに止まらず、祖父母以上と同居するに臻るもの珍らしからず、孝養の道に適ひ、積成の效果多く、家風の勢威盛にして社會の影響に反抗するの便を具ふ、然れども時代を異にする若干家庭の共存なるが故に物質的事情の複雑なるに止まらず、思想の懸隔衝突を免るること容易ならずして互讓の態度を必要とし、自主の念と活動の利とに乏しきは避け難き缺點なりとす、而して長男以外の男子は別居して新家を建つるを常とするも、或は同居して傍系的家庭を副ふることあり、家族制は舊家、大家、素封家等の保持に適合して保守的なるを特徴とす、大人格の出現を誘致することなしとせず、家長の品位高く、君主然たる所あるが故に國家に對し藩屏たるの實を擧ぐべく期待せらる。

是に依て之を觀れば、兩者は各、長所を有するも亦短所の少なからざるを忘るべからず、家庭の事情狀態に従ひて採擇を遂行せざるべからず、徒に舊習に拘泥して發展を妨碍するは愚の至りなるも、保守的任務に尊重すべき

ものあるを顧みずして猥に家族制を嫌忌するは眞義に通ぜざるの致す所として大に戒めざるべからず。

嫁姑 嫁と姑は犬と猿の如しとは世間之を傳へて至言と爲し、世人之を認めて多く疑はず、犬猿の相容るや否やは未詳にせざるも、嫁姑の相善らざることあるは事實なり、犬猿の間に相容れざる所あらんか、本能的なるに相違なきも尙融和を馴致すべしと云ふ、嫁姑の相善からざるに至るは感情的にして雙方に覺悟する所あらんか、嘗に衝突の虞なきに止まらず、圓滿なる状態を實現すること困難ならず、新家庭の創立は新郎新婦を驅つて責任の地位に就かしむると同時に親達をして特殊の損失感を抱かしむるものなり、新郎の母親は多年の丹誠に成れる寶物を失ひたるが如く感ずるのみならず、權利の一部を割譲するの事實を伴ふなり、從來の親切は自今干渉視されるの虞あり、母親にして感情一遍の人たらんには悶々堪え難きものなしとせず、而も新婦は人なり、相應の意志感情を具ふるに何等不思議なく、殊に不馴の境遇にあるが爲、動すれば懸隔を生じ易く、猜忌に續々に猜忌を以てし

て遂に溝渠を構ふるに至ることあり、然れども長者は須らく寛大なるべし、目前の事情に拘泥して後樂を謬るべからず、指導の位置に立つ者は亦忍耐の教示に努めざるべからず、而も新婦は姑を信用し、萬事に指示を仰ぐと同時失策を避けんとするの失策に陥ることなき様留意するの要ありて愛嬌ある無邪氣誠意ある無頓着に反つて特効の存する次第を忘るべからず、人格を具ふる姑と嫁との間に何等忌まはしき事情の存する筈なし、姑たるべき身にして娘の爲に姑なき婚家を求むる母親の心事には實に憐むべくして且、笑ふべきものあるなり。

嫁舅間の關係は比較的單簡にして事情少なきを常とす、而も婿と外姑との間には幾分かの喜劇笑劇の資材を呈供することあるに拘らず、概して外姑が姑なき新家庭の爲に重寶視せらるるは妻に利ありて夫の便とする所なればなり、新家庭の爲に努力するを厭はざる外姑は蓋娘の婚家に姑なきを希望せし者たるべし。

小姑 夫の姉妹は所謂小姑にして姉を女公と云ひ妹を女叔と云ふ、俗に

小姑一人を以て鬼千疋に當ると稱するは嫂娣對小姑の事情に甚だ困難なるものの存する意を表すならん、親和は主として各自の人格に據ること勿論なれども、嫂にして女叔より年下なること稀ならずして年齢と地位との關係に不自然なる所あるは往々不折合を誘致するの因を爲せり、加之姉妹の間に新婦の入來するありて家庭に新生面を啓くと同時に従前の状態を一變するの事實を生ずるが故に慣習の存續に忠實なる女性としては勢、好感を享受し難く、動すれば猜忌心僻根性乃至嫉妬心を惹起するに至るは人情の弱點にして而も虞るべきものの存する次第を了知せざるべからず、斯事情の發生したるときは銳意關係者の自覺を促して虚心坦懐の暗示に依り洞察する所あらしめんか、案外氷解の速なるに一驚を喫することなしと限らず、蓋し舅姑に對する交渉だに加はることなくんば事實は複雑ならざるを常とすればなり。

小舅は夫の兄弟にして兄を兄、公と稱し弟を叔と稱す、對小舅關係は單簡にして苦情の纏繞するが如きは例外なりとす。

小舅

養老 力行を主とする蠻民の間にありては老いたる尊長に對する態度は概し冷淡にして幼き子女を愛撫するの情況に比すべくもあらず、マクア・チ・クチ等の如き蠻族が移住するの止み難き際には病者と同様に老者を遺棄すること罕ならず、食物に乏しき土地に漂遊する蠻民の中には瀕死の考婦を食葬して憚らざるものあり、群羊の跡を追ふの力なき老者は自滅に甘ずるを例とせり、然れども文化の進み行くに従ひて姥捨山の實在漸、少なく、宗教の援助に依りて老者は慈善家の扶養する所と成るに至りしが、進歩の著しき國家にありては養育院を設けて老人を收容し餘命を安穩に送らしむるの美舉に出づるなり、我が國の如きは夙に孝道の鼓吹ありしを以て老人の境遇に同情するの念深く、眞の不幸ものに非ずんば路頭に迷ふことなし、而も中流以上の家庭に於ては孝養を盡すを専念とする美風競ひて祖先崇拜は大和魂と共に我が國家をして萬全の地位を永久に保たしむる基礎を爲すなり。

家庭の組織をして完全ならしめんには老人の存在を必要とす、老者の生

存は家庭の裝飾に對する冠にして家庭の繁榮に對する礎たり、老いたる尊長の家庭にあるや、慈愛の化身經歷の寶物たり、皓々たる頭髮は往年の勢威を語り、凋萎せる體軀は永年の辛苦を偲ばしむ、老いたる尊長は實に一族の仰ぎて崇拜の標章と認むる所にして、舉家の慕ひて親愛の焦點と爲す所なり、子女をして老人を敬慕せしむるは事業に遠大の計あるを知らしむる最良の方便たるべし、老人をして幼年少者の愛情に親ましむるは過去の辛苦に對する優しき酬ひにして長壽の幸福を感ぜしむる所以なるべし。

然れども老人は如何に幸福なりとも貧弱を覺えざるを得ず、血液乏しく筋力衰へ、氣力銷沈せり、視聽振はず、手足の活動意の如くならず、體軀の變化に加ふるに業務の異動を以てせんか、社會との交渉は次第に減じ、動すれば無聊に嘆じ、心細く感ずることなしとせず、時に或は多年の經驗に依りて扶殖し得たる精神の活動は完全なるに拘らず、壯者の之を認むること罕なるを常とせり、されば老者を勞りて之に仕へんとするものは努めて心身の慰安を圖らざるべからず、寢食其の他の物質的取扱に關しては懇篤を旨とせ

んか甚しく難澁することなく、殊に幼年少者を介して事に當らしむるは雙方に益する所ありて頗、妙味の存するを見るべし、然れども神心の慰安に至りては一段の注意を拂はざるべからず、老人にして元來讀書著作研究等に對して親しむ所あらんか、過勞に陥らざる限り、之を繼續すること惡しからず、詩歌俳諧園藝、謠曲等の嗜好あらば、頗、便にして就中花卉、蔬菜の栽培の如きは極めて可なり、而して老婦人には子供の守役、小鍋立、針仕事、編物、細工物等の如き適切なるものあり、殊に留守居は老人の得意とする所なりとす、要するに自動的慰安を主とし、彼、老人をして成るべく、たけ有用の者たるの感を抱かしむること、遙に消極的に餘生を送らしむるに優れるものあり、又新聞雜誌の類を讀み聞かせ、或は面白く談笑するは物見遊山に連れ行くより安全にして老體に適するが如し。

子女の教育に對する老人の任務に争ふべからざる長所あり、老人を以て幼少者の教育を誤るものと爲すは例外を取りて本條と爲すの致す所にして、理義を盡さざるに坐するのみ、老人にして教育の何者たるかを解せんか、

老人の助力に俟つべきもの甚だ多し、蓋し老人は經驗に富みて克く忍容するの雅量を具ふるに止まらず、慈愛と誠意とに富めるを以て子女の育成に資する所尠ならず、心理學者、神經學者、教育學者の唱道を待たずして彼等老人は溫和と懇切とを以て子女の心情氣質の養成に對する最強の楨杆なりと信じ、時を惜まず、煩に堪え、昔噺童話を反復して倦むことなきが如きは親身の老人を措いて他に求むること能はざるべし。

家庭に於ける老人の好感化は幼少者に限らずして家庭内に行き渡るものあり、神經に疲勞を覺ゆるが故に混雜を厭ひ喧噪を嫌ふの結果、自然に家庭の靜寧を誘致し、率いて壯者の騷擾するを防遏し、家庭内に安息を實現するの功を奏するに至るべし。

家風 家風とは家庭の創立以來傳承せる因襲慣例等の總合より成りて主義儀式を始め、食物衣服住居その他種々なる事項に亘れる特殊の状態を云ふなり、一小社會たる家庭に於ける積成の效果にして由緒に富める舊家に發達の著しきを認むると同時に無造作の新世帯に皆無なるを常とす、中

流以上の人士に重ぜらるるも、下流者の頓着せざる所なり、家風は自家特有の全成状態なるが故に家庭の支持に當れる中心人物の如何に據ること勿論なるも、業態、其の他家族各員の氣質、體質等に對する關係の淺からざるのみならず、土地氣候、生産、信仰制度等の如き四圍に於ける事情より影響を受くること尠ならず、從て家風は種々様々に變化して程度に千差萬別あるに止まらず、色彩を異にし趣旨を同じうせず。

家風は親子相傳の法に依りて子々孫々の繼承せるものなるが、家庭の創立者、中興者等の人格、知識、技能に依りて家訓、家憲を定むるに臻ることあり、家風の美質、良性は人物の出現に基づくもの多く、從て大人物の實在したる家に優美なる訓義、慣例の存するあるを常とす、而も家風の永續は家庭の内外に對する適應に因らざるべからず、既成の實態に固着することなく、必要と認めらるる變態を許容せざるべからず、簡潔なる主義要項は唱へ易きも、實行は各種の事情を斟酌せる活用に俟たざるべからず、舊來の家風に趣味と價值との存するあるに拘らず、之を解すること能はざるの結果、當代の事

情に適合せる新例佳式の未だ構成せられざる以前に於て、永年の積成に係る事實を古物視し、昔嚙化するは祖先に對する不遜の所業にして大に戒めざるべからず、家庭の精神に關する形骸として家風は存在するなり、其の心髓に重きを置きて枝葉に拘泥することなく、眞に依り善を採り美を用ふるに努めざるべからず、家風は過去に成れるものなれども現時の事實に影響を及ぼすこと尠少ならず、されば慣例仕來に就きて利害を審にし、其の起因にして既に跡を絶ちたるもの之を保存するの事情の消滅したるもの又は好將來の誘致を妨ぐるの虞あるもの等に關しては削除に左袒せざるべからず、祖先の所信は如何に尊敬すべきものなりとするも眞善美の現實は一層貴く、子孫の繁榮は萬事に冠たらざるべからず。

第二章 社會

社會の意義

組合

廣義に依りて社會と概稱するものは人類の群生状態にして幾多の集團、種姓 (castes)、階級 (classes) 等の寄合より成れり。而して某々社會と稱するものは某々の事情要求に據れる勢威を受けて自然的若しくは任意的に同集せる若干人の群團なり。其の形式様々にして範圍に廣狹あり、起因に自然と人爲とを分ち、存續の永久的なると一時的なるとを見るなり。此等大小の社會は其の勢域に犬牙錯綜するの事實ありて疎密精粗の均等ならざる條網を爲し以て個人の周圍に纏繞せり。家庭を始とし國家所屬の府縣市郡町村等の外、上流中流下流の各階級、官吏、軍人、學者、技術者、神職、僧侶、農民、職工、商賈等の各社會あり。又組合 (associations) は特殊の事業若しくは共通の利益を目的とする若干人の契約的團結にして二派に分かれ、非物質的の甲派に學會同窓會、後援會、宗教組合、博愛組合、獎學組合等ありて、專、物質的利益に着眼する乙派に購買組合、産業組合、商事會社、保險會社等あり、此の外、各種の仲

間期成同盟會、舞踏會、演奏會等あり。此等の社會組合等は相重なり、相接し或は相反目し相争ひて個人の傍側に同心圈を形成せり。而も文化の進むに従ひて集團益加はり、團體は愈、其の數を増すが故に之等に對する個人の隸屬關係は漸次に濃密と成り。中流社會の一人にして商たり父たり兵たり、信徒、市民、某々團員、何々仲間等たるもの珍しからず。

斯の如くにして各種の社會集團は社員團員たる個人に課する特殊の義務別個の職責を以てするを例とす。而して此等の義務職責の間には往々牴觸の生ずるあるを見るなり、社會的活動にして繁激を加へんか個人の道義的生命に影響すること甚深きものありと知るべし。

第一節 社會の概要

社會の成立

社會の成立。社會は如何にして成立するものなるかは古來の重要問題にして之が解決に力を致したる識者に乏しからず。アリストテレス(Aristotle)は人類固有の社交的本能に基づけりと爲し、ルクレチウス(Lucretius)は吾

人の發明なりと認め。ホッブス(Hobbes)に依れば社會は争鬭の絶ゆることなき自然状態に改善を施し得たる理性的產物にしてロック(Locke)に従へば社會的生活は自然的生存の後を受けて出現したるものなり。スピノザ(Spinoza)は社會を以て理性の特産とし、人をして神たらしめんと努むるものなりと斷じ、ルソー(J. J. Rousseau)は自然の權利に據れる共存状態が契約に基づける社會状態に轉化したるなるべしと想定し。歴史派は社會を以て事實と傳來とに據れる政治的生命なりと云ひ、ヘーゲル(Hegel)は社會を以て辨證的なるも而も自然的たるを失はざる手段の效果に外ならずして道義的人物を創成せんと勵むと爲せり。而して近代の社會學者には成因を自然生理經濟心理の各方面に探求せしものあるも今に歸着するに臻らず。ゴビノー(Gobineau)は人類が群生して社會を組成するは血族關係に據れりと判じ、ラッセル(Russell)は吾人の周圍に於ける自然的并に地理的の狀態を以て社會の發生を促す唯一の素因なりと主張せるが、イズレー(Lzoulet)は社會發生の原因を連帶責任の二面を爲せる分業と戮力との上に置き、ロバート(Roberty)

は、社、交、的、靈、氣、遍、在、論、に據りて社會の生成を説明せんと試み、スベンサー (Spencer) は社會發生の事實を適應の結果に歸し、外界の勢威を重んじ、個人と集團との衝突を一時的なりと斷じ、アンモン (Ammon) は社會を以て種類、利益、即ち人類の實利主義に基づく施設に外ならずと唱へ、生存競争は之が形式を促成し、自然淘汰の下に發展し、遺傳に依りて永續せらるると稱す。經濟主義を提げて社會の成立を説くは一段の進歩にして、勤勞及經濟的横領は社會の出發點なり、社會生活の根據は經濟的競争の中において、勤勞存在及全收に關する權利の如き社會的權利も亦基礎を斯。競争中に置くものなり。又心理主義に據るものに就きて記さんにギッザング (Giddings) の提唱に係る種類の認識 (conscience d'espèces) を以て某時代に於ける若干人の群衆に就きて捕捉し得る所の利益、思想、願望、及信仰の相似状態なりと解せんか、四圍と個人との間に存する關係は相互的にして知識、審美、道德の進化に伴ふの結果、集團的精神が個人的精神に讓る所は漸次に多きを加ふべし。ザルケン (Zarcken) に從へば人類が渾沌たる集合状態を呈せし際、相似性に基づける自

然、的、戮、力、共、心 (solidarité mécanique) の招致する所と成りて發生したる社會は社會的分業の進歩するに從ひて漸次の變態を遂げたるが爲、組織的、戮、力、共、心 (solidarité organique) の現出すると共に個人的生存の統合以外に別個の生命を支持しつつありしが、變態の初期以來共同利益に對する自然的努力と始原的社會一部の神化に成れる氏物 (totem) の崇拜とに依りて助長せられて生存は確保せらるるに臻れり。フォームス (Worms) 及ノビコフ (Novikoff) は社會を以て個人と同様に生活的機能を具ふる活動機構に依るものなりと唱道し、タルド (Tard) は個人の價値及活動を提唱して社會は吾人の模倣及發明の結果なりと主張し、生理的社會論に屬する實體説及神秘説を打破し、社會學上進化的觀念に代ふるに特殊の原因發動及各個的意志の挿入に係る觀念を以てし、集合道義信仰等の如き重要素因として個人の品性に從屬せしめんと努めたり。マゼル (Mazuel) は社會合力説 (synergie sociale) に係りて個人の努力自動を激勵して、個人の發展責任氣力を誘起するものを可とし、之等に對し妨害を加ふるものを不可とす、規定規律は勿論、共產主義と雖、努力の發展に資

する所あらんか善なりとせざるを得ず、向上膨脹は一價元素、靈魂自身の慾望にして勤勞は人性の大法なりと提唱せり。

著者の主張する所に依り人類に積。成。力。の存在を認め、人類を以て活。用。的。進。化。を遂ぐるとせんか、個人と社會との間に存する相互的關係は密接して、個人の自主的發達を重んずると共に社會が傳承せる知識、技能、道義、信仰の振興に努むるを得て、利源大に集り文化大に進み、人類社會の安寧幸福は實在するに臻らんか。

然れども社會を如何なる原則の上に建設すと雖、我が世界に極樂淨土の現出は期し難かるべし。蓋社會に於ける争闘は到底根絶すること能はずして各種の社會的集團は互に敵對して止まざるのみならず、個人は周圍を纏繞する社會に對し或は之を凌駕超越せんと勵みて争ふべく或は各派の結合的壓抑より脱出せんと努めて闘ふべし。社會の生命を保持する最優の要素は社會の主義に對する個人の受動態度、羊性的服従に非ず、社會に進歩を促すものは寧ろ個人の反動反抗にして奮闘努力は社會改良の母なりと

社會の維持

す。アリストテレスの説く如く吾人は政治動物たると同時に自主動物たることを忘るべからず、争闘を皆無にし個人の活動を滅却せんと欲するは空想にして不可能事に屬せり、競争と差別とは永久不滅の要素にして純粹均質の社會は無味無形の群居の中に消散するの外なかるべし。競争に依るに非ざれば個人は集團的精神より脱すること能はずして個人の心神中に於ける合力は專、自由と氣力とに據るなるべし。

社會の維持

社會は成立したる後は自支持せんと大に努むるを例とす。

シェンハウエル (Schopenhauer) の提唱する所に從へば社會的生活は廣域に亘る生活慾の中に於て最、強、力、に富める形式にして、國家は人類の利己主義より出てたる傑作なるが、一般に總べての社會も亦均しく吾人の利己主義に成りたる結果なりと云ふを妨げず。集團の如何に拘らず、生存に執着するの念頗、深、く、自衛、自展に資するとあらば貪慾、狡猾、執拗、殘酷、無遠慮等選ぶ所なく之を發揮する情況、到底個人の心理に認め得ざるものあり。加ふるに集團の利己主義を内部に包藏せる偽善的の標榜は建設せられ、公益保護を

以て神聖なる教義の如くに唱道し、國家の存亡社會の死活を提げ來りて騙詐瞞著に限らず、あらゆる不義不徳を行ふに臻るなり。

斯の如くにして經濟政治法律道義等の各界を通じて個人の活動力は公益の下に統轄せられ、社會の安寧は最高の法律なり、(Salus societatis suprema lex)と唱へて活動力の全部を統合せんとす。慘々たるは斯の規律を無視する活動力なり、社會は之が破壊滅却に努め、遲速を論ぜざるも、目的に達せずして止むることなかるべし、社會は之を遂行するに當りては個人を絶對に侮蔑し、盲目的に、不可抗的に而も無慈悲に邁往して躊躇することなく、シオベシハウエルの所謂智性より離れたる生活の要望を具體的に表現すべし。而も多くの場合には不知不覺の間に維持保存の業は進捗し、極めて冷靜なる態度を以て虚偽殺害盜奪横領の舉に出づるなり。

要するに總ての機構は生存を完了する上に於て兩系に分屬する活動に俟たざるべからず、甲者は内部の協力にして乙者は外部の防衛なりとす。

社會の變態

社會の變態。社會は終結の目的を有せざるに非ざるも亦絶對的の標的

を確立し之に向ひて歩武を進め行動を統一するものなりと斷ずること能はず。蓋し人史に不可解なる所ありて一步に一步を重ね、進歩に繼ぐに進歩を以てすれども、彼岸に到達するを得ず、從て逐へば從て遁げ遂に鹿を獲ざるが如き事情は存するなり。識者は斯の事情に留意し研究を加ふるが、或は變遷變化に鑑みて變態の原則を尋ね、或は不易の素因を捉へて本源の大則を得んと試みるなり、前者の中には社會の變態を以て或は循環的なりと斷ずるあり、或は一定の方向を辿ると認むるあり、後者は個人を以て社會變態の素因なりと爲すにあり。著者は成積の理に基づき個人の價値と社會に於ける積成の事實とに據りて社會の變態を解明し得るが故に變態は多面式にして方向に何等の制限なく、主因たる個人と副因たる社會とは相俟ちて種々様々なる状態を提示すと爲すなり。

社會の消滅

社會の消滅。機構は成體の日に始まり解體の日に終るを以て原則とす、個人は機構を完備せる日に生れ、要部を缺ける日に死す、社會は組織せられたる日に立ち、分散するの日に仆る、何に恠むべきものあらん、何に解し難き

ものあらん。然れども人類には積成力の存するあるが爲、個人若しくは社會の遺志遺業にして傳承するに足るものあらんか、之を蓄積して人類界の進歩發達に資すること尠少ならざるべし。

某社會の消滅即、死亡とは内因と外因とに論なく之が影響を受けて集團の組成に與れる素因の間に離隔を生ずるに臻るを云ふ。從來社會の化合に當れる成分の遊離するは恰、有機體の分解する際に原子の發散すると同様にして、舊社員が他の新社會に加入する次第も亦曩に離散せし原子が更に新化合物を爲すに酷似せり。

人種的原因

社會の消滅を招致する原因として提唱せらるるもの少なからずして人種・生物・經濟・心理・社會等の各界に亘れり。

ゴビノー・アンモン等に依れば人種殊に人種の單一性が社會集團の運命に影響を及ぼすこと明にして國民の衰亡は全然純粹無垢なる優等人種の消滅に歸せざるを得ず。然れども所謂優等人種とは形貌に依るべきにや長頭種と短頭種との類別は果して科學的の眞價を有するかは大に疑ふべ

生物的原因

きの餘地あり。又純種と雜種との差別は必、優劣の標準たること能はず、純粹質の野蠻人と渾滑的の開化民との存するを忘るべからず。

マテウツィ(Matteuzzi)は遺傳性に基づきて精神的進化が改良の絶頂に達したる際、新なる刺激の加はり來りて新路を開くに非ざれば、生理學の原則が示す如く結晶状態に陥らざるを得ず。

經濟的原因

經濟的事情に屬する衰因甚多く、社會的寄生、財貨の浪費を始とし、經濟上の誤謬に偏執主義、拒絶論、新説、人爲不適、應説等を見るなり。

心理的原因

社會の消滅を誘致する心理的原因に就きて記さんに「タルドが社會の成立を促すと唱へし模倣及發明の如きも内因又は外因の因ふる所と成りて、發動を休止せんか、社會の氣力は抑を蒙りて衰亡するに臻るべし。又所謂到達者の特性に外ならざる似非人物論は粗暴と追従との混淆執拗と才氣との共同を賞揚するに過ぎずして社會の健全なる發達を阻碍し牽いては之が没落を誘起するなり。而して社會は生存上自信に深かるべきものにして必要とあらば虚偽の信條をも拒まざる底の氣勢に俟つを便とする

に拘らず、信條に慊焉たるものあるか、虚偽を厭ふの結果、社會を信ずること漸く、遂に解體するの止むなきに臻るなり。

社會的原因にして社會の消滅を惹起するものに就きて一言せんに某社の一機關が度外の發達を遂げ、手段より一躍して主腦たらんとすることあり。斯の如く社會の一部に異常なる肥大を見んか、社會は不安に陥るに止まらず、急轉直下して墮落に終らざるを得ざるべし、又社會は侵略的異分子の加入に據りて生命を失ふことあり。而して優秀なる工業に據れる國は強力なる軍備と同様に而も土地を攻略するの舉に出づることなく、工業の振はざる他國に對して工業的の競争を挑み、劣勢社會の擾亂を試みるや、傳承に不足なるが爲、適應すること能はずして遂に衰亡に赴くこと罕ならず。

第二節 社會の特情

個人と社會 個人と社會との關係は社會學上の重要問題にして社會主義と個人主義との雙立するありて各、其の主張を逞しうせり。

廣義に於ける社會主義は集團を主とし個人を従とするの主義にして、ラトリーの社會主義の如き之に當れり。而も近代に及びて意義漸く明瞭となり、社會主義は所有權の制度に經濟的革新を加へて個人に對し物質上并に道義上、出來得る限りの獨立を確保せんと主張するに臻れり。又個人主義は前者と異なりて個人其のものを主眼とし、固有的價值及び自主的存在を認め、個人をして最完全なる自由を享有せしめんと提唱せり。

現今世に唱導せらるる社會主義を以て全然將來に實現すべく期待せらるる理想的社會に關する理論の如く認むるは非なり、太古より今日に至るまで形式は千變萬化したりとするも事實として存在したること明なり。而して均しく社會主義と稱するも趣旨一様ならず、主唱者に依りて内容を異にせるが、原來吾人は不知の間に天性に従ひて或は個人主義を行ひ或は社會主義に據るものにして所謂社會主義に就きては何等創見發明の跡を認むることなきも、唯主張の上、手段の上に於て奇抜異常は存するなり。

社會的集團 (association social) は強制的結社にして競争を滅却するを主眼とし、集團に全權を認むるを以て團員各自の特權に重きを置かず、が範圍を確定するに意を用ふることなし。

而して主義に依れば共活主義及び共產主義を始とし、獨占主義に基督的地領的、講座的等ありて悉く枚擧するに遑あらず。要するに社會主義者の見地より論ずるときは人生の進歩に直接干渉するは財貨に非ず、發明に非ず、格言に非ず、此等を社會の公益に呈供するにあり。

共活主義 (communisme) 即ち共產共有主義は社會を結びて團員の財貨に關する生産消耗を共同に爲すを云ひ、此の主義に據れる團集を共活的集團 (association communiste) と稱す。

共產主義 (collectivisme) は社會を結び共同して生産に當るも財貨の消耗は團員の自由に委するにあり、本主義に據れる集團を共產的集團 (association collectiviste) と稱す。

獨占主義 (monopolisme) は國家の支持に係る所の永久的專賣に基づきて財貨の生産に當るを云ひ、此の主義に據れる集團を獨占的集團 (association monopoliste) と稱す。

個人主義は自己を主とし他人を従として出來得る限り自己の生命を改善せんと努むるにあり。自己を絶對の孤立に置くに非ざれば絶對の自由を得ること能はざること勿論にして集團・社會・國家は他人の自由を尊重する範圍内に於て各自の自由に制限を加へざるを得ず。然れども個人の生存に援助を與へ、個人の生命を改善するの手段に過ぎざる政治的生命には斷じて目的たるを許すべからず。國家は個人に依りて立てられ個人の爲

に立つ所の抽象的實體に外ならず。生理的個體が固有の活動に據れるに拘らず、細胞的要素の統合的活力に従屬するが如く國家は特殊の機關にして其の官能は個人の自由に服従・默諾を要求し得るも、個人の自由を根本的に制限すること能はざるなり。

個人的集團 (association individualiste) は一に各自的集團 (association particulariste) と云ひ、自由競争を基礎とする社會組織にして團員の權利義務を認め、之が範圍を尊長するを旨とせり。

兩者は主義として相反するに拘らず、接觸點も少なからず。社會主義は個人主義の主張に對し大に讓る所ありて満足を與ふるに努むるなり、經濟上個人を解放して資本の壓迫より脱せしむるのみならず、資本主義に成れる施設を廢止し、建造物を除却せんとす。斯の如くにして現時の社會主義は論争期にあるを以て只管過去の施設に係る社交的若しくは道義的事物を破壊せんと努力するが爲に個人の自主自由に贊助を與ふること尠ならず。然れども社會を以て立脚域と爲す所の主張が全然個人主義に符合するの理由なきや勿論にして或は輿論に依りて個人の言行に制裁を加

へ或は統一的、定訓論 (dogmatisme unitaire) に依りて個人の差別性を拘束すべし。蓋し社会主義者の多くは社会一元説 (monisme social) を唱へ、人類社会は経済と道義との上より均勢畫一の状態を呈すべく信ずればなり。加ふるに確信論、遵奉説 (conformisme) の如き、其の主張に於て硬軟の差異あるに拘らず、個人の自由獨立に對して危害を及ぼすべき懸念ありて安心ならざる點は同様なり。結局個人は社会の犠牲に供せられ、社会の附屬物たるに至るべく想定せらるるなり、如何に定訓論に深遠巧妙なる所あるも、如何に遵奉説に穩健平和なる趣の存するに拘らず、人力を以て解すべからざるものを解せんと試み、人生の本領を脱して自神なりと信ずるが如き態度に出づるは越權の極、沙汰の限と云ふべきのみ。不正確なる理據に依りて特殊の社会を空想し以て現實的個人の活動發展を拘束し率いて社会自身の活動發展を凋萎せしめんと欲するは愚策の極と斷ぜざるを得ず。先天派 (a priori) 所屬の論者は社会一元主義を以て個人以前個人以上と想定し、個人を以て社会の爲に生れたる者と認定し、後天派 (a posteriori) の論者は適應 (adaptation) 共生

(sympiose) 戮力同心 (solidarité) の如き經驗上の事實を過大視して社会生活は人類の自然的要求なりと爲す。斯の如くにして歴史主義 (historisme) は個人を以て歴史的事情の單簡なる產物單簡なる餘光に過ぎずと斷ぜり。要するに四圍の事情遺傳傳説道義等の如き好題目の下に衆人を網羅して之が自主自由獨立を奪ひ去らんとするなり。而して靜態的見地即、變態の某期より見れば周圍の事情は個人の活動に避け難き制限を課すべきも、動態的見地即、社会の上昇に對しては、個人は再び權利を回復すべし。蓋し社会の發達に對する個人は常に立案者鼓吹者主動者たればなり。

社会主義は危險なる空想を誘起するの虞ある社会一元説より脱出すべきのみならず、絶對的平等論の空想たるを承引せざるを得ず。階級的差別は鞏固に缺くる所ありて安定すること能はざるが故に時に或は消失し得べきも、個人の差別は自然に出づるを以て絶滅することなし。マゼル (Mazell) の言へる如く未來永劫主動者及び受動者魅する人及魅せらるる人は盡くることなかるべし。又理想を創作するに奮戦を必要とすると同時に人物の

刻成は苦闘に俟たざるべからず。

巨人を崇拜し、大人物を稱譽するは自由と偉大とに關する總べての人物を賞賛するの準備に外ならず。英傑が眞實なる人物を意味するならば誰か英傑たるを希はざるものあらん、眞の大人物を崇拜するは積成の實を擧ぐるに極めて効力の偉なるものあればなり。

著者の見る所に據れば社會主義と云ひ個人主義と云ふも、個人を輕じて社會を重んぜんか、分子の不純を顧みずして統合の純潔を望むが如く、社會の弊害を嫌忌して個人の優秀に憧憬するは恰、病軀の療養に盡さずして妙技の演行を期するが如し。然るに積成の理に基づき、社會に適應すべく、個人の發達に努め、社會は個人の活動を驛迎して、蓄積に多きを加へんと期せんか、社會は不動靜態の姑息に陥ることなく、個人の發展と共に進化を遂げつつ動態を呈して止まざるべく、個人は意志願望に拘束の加はることなく、社會は活動に斷續を見ることなく永久に存在を完うすべし。

文明 文明とは人類社會の提唱に依る思想と感得に係る慣習とを包括

する所の複合状態を云ふ。幾許かの人あり群生して社交を營まば、一の文化は存在して特殊の品格情勢強威等の外、或は弱點をも有するなり、組織ある集團には文化の伴ふを常とし、文化と社會とは本源を同じうす。然るに文化の程度は一樣ならずして野蠻人と開化民との差別は政治的組織行政的施設、文學、理學、美術の攻修を始とし、自然界に對する社會の勢威、個人間の關係并に經濟、智力、道義の各界に於ける絶間なき前進發展等の表示する所に係りて進歩の觀念と文明とは須臾も離るべからざるものなり。開化者は將來を慮るの人にして、蠻人との別を生ずる所以は實に茲に存す。蠻人は日々生活に齷齪し、隨產隨耗して、活力を遊戯に浪費し、過去を顧み、現在に餘念なくして將來を豫察するに遑あらず、同様なる世代を重ね、脆弱なる生存以外に何等の遺産なく、事物に對しては直接にして而も永續すべき隸屬關係より脱出すること能はず。然るに先見豫知と共に文化は現はれ、本能の衝動的進趣は思慮ある慾望と變じ、後年の事に意を留めて蓄積に努め、最少の勞力に依りて最大の効果を收めんと勵み、前代未聞未知の美事優物を

後世に遺さんとす。自然界の勢威を認めて反つて自然を利用するの道を講じ、技能を琢きて新事實を創成せんと試み、自顧みて人性の靈質を悟るに臻る、是れ文明の現出を促す所の素因なり。

社會と時代とに従つて趣を異にする文化の出現發展する次第を尋ねんに或は人種の固有する所なりと斷ずるものあり或は宗教の馴致に依れりと判ずるものあり。カルル・マークス(Karl Marx)の如きは文化を以て經濟事情の反響に外ならずと認めて物質の勢威を過重視し。コンテ(Comte)は人智の發達を以て文化の原因なりと主張し、バククル(Buckle)は道義の攻修が文化の進歩發展に及ぼす影響は智力の攻修が貢獻する所に如かずと斷定せり。近代の識者にはスタインメツ(Steinmetz)の智力の活動に歸するあり、シゲレ(Sighele)の暴力と詐欺とを以て文化の基礎と爲すべしと提言するあり、バエリシホット(Bagehot)の自由なる討議に據るに非ざれば人類の進歩を促すこと能はずと唱道するあり。

慾望の際限なき増加は各方面に對する進歩を促して現代の文化を實現

するに臻りたるに拘らず、吾人の生存は之が爲、過去に比し大に幸福を増進したりと斷ずる能はず。蓋し慾望の増加并に之が充實に當るべき財貨の増加は幸福の上進に對し離るべからざる關係を有するものに非ざればなり。文明と婦人。世界に於ける人生の現狀并に古來の歴史的事實は家庭が社會に及ぼせる影響に偉大なるものあると同時に家庭の人たる婦女が社會に盡せる協力の靈妙なるものあるを證し得て明なり。而も協力の結果は男女兩性の間に差異の存するを便とし、女子特有の能力に發達の著しき社會に於て遙に優れ居る次第を認むるなり。女子の社會的任務は各種民族に關する文化の程度と女子の家庭に對する地位とに密接なる關係を有す、人類全般の連帶責任は男女の戮力同心を必要とし、社會の變態進展には女子の感動と男子の活動との聯成作用に據れるもの甚多し。要するに女子の家庭に對する直接の任務は自、社會に對する間接の任務を含蓄するものなりと知るべし。

文化に對する女子の勢威が蕪雜にして不條理なるは主として男子の行

爲に歸せざるを得ざるが、畢竟するに男子が或は過度の熱心に驅られ或は自己の利益に走るが爲に其力者の意見を猥に輕重して前後を顧みざるに由るなり。されば女子の勢威は事情の如何に依りて或は起因として文化の促進者と成り、或は受動の地位に立ちて僅に支持を努むるに過ぎず。而も社會の安固・平衡は婦人の干渉を俟たずして之を實現し得ざるは疑ふに餘地なしと信ず。然れども文化の低き社會に於ける婦女の地位・家庭の狀態には言ふに忍びざるものありて風俗は卑陋を極め、僅に母子の間に育児期の密接を認むるのみなり。婦女に威信なくして家庭の情操は現はるること能はず、道義の進歩するに伴ひて婦女の地位は改良せられ、家庭の狀態に見るべきものあるに臻るなり。婦女の勢力は家庭に集中せらるべきも、其の任務の遂行は婦女の有徳なるを必要とするのみならず、社會に對する婦女の地位と勢威とに據らざるべからず。而も婦女對社會の關係は今に完全なる想定を見ること能はざるは遺憾なるも、男女の間に存する生理上及び心理上の特質に察し、家庭上及び社會上の利害に鑑み、分業の原則に據り、差

別及^て全成の根本主義を遵奉して男女の地位と任務とに對し理想的の斷案を下ださざるべからず。男女は人權上より見て何等差別を設くべき理由なきも、天職の命ずる所に依りて差別の存するは豪疑念を挾むべき餘地なし。家庭は男女の活動を必要とするも妻と母との靜態に俟つもの多く、社會は男女の共力に據らざるべからざるも、男子の動態に頼む所多し。知識は男子の専有ならず、技能は女子の特有ならず、稼行收利は必^し夫の專任たることなく、慰安齊家は必^し妻の特務たることなきも、人類の永續が家庭の本領にして子孫の繼續が父母の絶對的責任なるは萬古不易なり。是^が家庭の根本義にして又社會國家の根本義なり、男子の外主内従と女子の内主外従とは互に相資けて家庭・社會國家の安寧秩序を維持し、進歩發達を誘致し、幸福繁榮を實現するに臻るなり。

流行 流行は世に行はるるの義なるべきも、西洋人の「モード」(mode, modus)は仕方狀態の意なりとす。狹義に従へば衣服類・附屬品・副着品を含む、冠物・履物・裝飾品・携帶品・并に家具・什器の形狀・色彩等に關する一時的の用例たる

に過ぎざるも、廣義にありては社會に於ける一時的風潮に投合せる新奇の事物(呼物)を包括して、唄・音曲・歌舞伎・見世物を始め、詩文・著述より食物・樹木・建築に至り、行爲・人物(流行子)にまで及ぶことあり。人類固有の積成性に基づき、變化を慕ひ、奇抜を好むに據ると雖、社會に於ける事物の進歩・發展に對し、交渉なきに非ず。されば時節の要求に偶然適合して流行を逞しうするものある一方に、營業式流行の存するありて嗜好に適應せんと努むるに止まらず、時機に投じて人氣の迎合を賭するに臻るなり。衆庶の雷同・輕浮を便とし、虛榮・淺慮を利用して所謂群集の羊心は、狐智の餌食なりを實現せんとす、要するに流行は個人若しくは少數者の創意・發起に係る事物に依りて社會を風靡する波動なりと云ふを得べし。然れども事物に特質の具はるが爲、流行は範圍の廣狹・社會の階級・時期の長短等に關係深く、勢威は一様ならずして、時に或は永年の生命を保持し得るものなきにしもあらず。斯の如くにして流行は文化の旺盛なる大都會の地に發源して迎合者の間に威力を逞しうす、進化の產物たるに相違なきも、奇に走り怪に陥るの弊害、少なし

とせず、流行に處するの道を講ずるの用意なからるべからず。

流行の不可抗的勢威は衣服に最著しく、形狀・地合・色合・編柄・模様等に對する關係頗る繁きを以て家庭に影響すること甚少ならず。流行は一面に衣服の改良を督し、服裝の斬新を促し、趣味を鼓吹し、娛樂を構成するに拘らず、他面には感情に走り易き婦女の弱點に附入りて質素の美風を打破するに止まらず、衣裝道樂に陥らしめて家計を紊亂し、驕奢の心を起さしめて家庭を蠱毒すること少なしとせず。然れども徒に弊害を恐れて利益を顧みざるは怯なり、ラブリッイェール(La Bruyère)の言へる如く、流行を氣取るも措き去りするも共に滑稽沙汰なり、流行品に就きて利害得失を識別し採るべきを採り捨つべきを捨てて可なり。而して我が國に於ける流行對衣服の狀況は、色合を主とし、編柄・模様は次位に居り、地合・形狀の勢力著しからず、蓋し我が國人の衣服は形狀に變化を來たすこと少なく、地合も木綿物には極めて單純にして、僅に絹物に多少の趣あるを認むるのみ、編柄及模様は色合と相俟ちて留意を促すべきものを生ずるなり。地色の強弱濃淡は編柄の細大と色

合とに依りて調節せられ、模様、精粗と形状とに依りて配合の適否を判すべきものなるが故に色彩の冷熱と含蓄及表現とを参考せざるべからず。要するに衣服の品種に基づき、趣味の指示する所に従ひて色彩の強弱多寡を斟酌して流行を利用し以て其の勢力下に奴隸化せざる様注意すると共に各自の品位を保持するに努めざるべからず。

常識 常識とは普通人が穩健に判断する能力の云ひにして、吾人の通有に係る道理を以て簡單なる常事に對し穩健なる判断を下すの意なり、即ち單簡にして穩健なる道理に適合するの義なり。然れども實際斯識別力を享有する者の非常に少なきは奇と云ふべし、沈着にして眞面目なる人には往々常識の發達せるものあるは所謂拔群の智慧者に外ならざるべきも、畢竟するに常識は其の關する所頗る簡單にして深慮を運らすの要なきに拘らず、全然本能的なるかの如く認むるは謬れり。事實の極めて凡庸なるのみならず、世間に屢起る所の瑣々たる現象に過ぎざるの感あるが爲、古來常識を輕視するの傾向あるも亦事實に對する誤解の致す所なりと云はざるべ

からず。太古蒙昧の世にありては常識は如何にも本能的事實に關與せしものなるべきも、文化の進むに従ひて社會は漸次に複雑を加へたるを以て現時の所謂常識なるものは必、本能的ならずして衆人の通有に屬すと爲すは當らず。社會の特有に係る常識の存在を認めざるを得ずして多くの社會に關係ある人は自然に常識に富むに臻るなり。されば健全なる常識を收得すること容易ならず、自、社會に出入して常識の收得に努むるの外、或は社會に經驗あるものに尋ね或は世間學 (sociologie du monde) を研究するの必要あり。所謂世間學なるものは其の範圍頗る廣く社交上有益なるに拘らず、瑣瑣たる知識に過ぎずとして世人の爲に等閑に附せらるるを常とす。而も作法の眞髓として行儀、行狀の細微に亘り、規則、常例等の如く外様に止まらずして情操、氣分に對する關係深く、世間と共に活動し、社會生活を完うするの伎倆を養成することに資すること尠ならず。社會の人と成りたるときの心得より家庭の創立、社交の實情、男女の交際、訪問、接客、談話、物品の贈答等に關する心得を包括せり。

社交

試に社交談話贈答の三項に就きて梗概を記さんとす。

社交。 社交上に於ける各自の地位階級を定むること極めて困難なり。標準一ならずして才幹爵位財産名聲德行等あり、社交上の地位は區々として統合し難き各自の評定に依ること能はざるを以て勢、理據に乏しきも社會の承引し易き慣例に従はざるを得ず。然れども社交は縱令便宜習慣に流るるに拘らず、自他の間に謙遜尊敬の二徳を具ふべきものと爲すが故に眞に此の二徳を有するものは社會の容るる所と成ること當然なり。殊に慇懃なるものは社交上に成功すべし、俄分限成金の横柄が如何に嫌忌せらるるかは茲に喋々するを要せず。而も各自が其の位置を保有すること極めて困難なるに留意せざるべからず、平等主義を主張するものあるも社交の何たるを解せざる人の空想に過ぎずして到底實際に適合すること不可能なり。卑下は昇上の極意にして各自其の地位に安ぜんか、衝突嫉妬自惚羨望私慾等の如き社交上の反情に苦めらるることなかるべし、思慮深く寛大親切を旨とし、多辯を慎み慣例を遵奉するは社交上に好成績を擧ぐるを得るなり。

談話

談話。

談話の快味は興趣活氣の洋溢するよりは寧ろ巧妙誠心常識に依るもの多く、愛嬌に富める面白き談話も常軌を脱出するに殊らんか乍嫌忌せらるべし。談話の際には相手の談話を遮らざる様注意するの要あると同時に相手の爲に遮らるるも氣に懸げざること、他人の噂を避くるに努むるは勿論、誹謗に陥らざること、嘯すより聽くことの多きは安全なり。姿容の批評に比し思想の批評は禍少なし、長談議は場處嫌すること、女子は男子に較ぶれば談話に巧

贈答

みなるが故に餘興多きも餘興の虞あり。音聲の高きも低きも共に野卑として擯斥せらる、前の談話者に優らんとするは無趣味なり、年齢に比し若しと見ゆと寫眞の上出来との語は相手に依りて感觸を二にす、法螺吹きの法螺を割ること堅く無用のこと議論化するの虞ある談話は禁物なり。

贈答。

贈答。 何事にも表裏の二面ありて利害の相反するを常とす、物品の贈答も亦斯、事情の外に立つこと能はず。悦ばるべき答の贈物も事宜に依りて感情を害することなしとせず、贈品の價值は心意時宜方法の三者に依りて定めらるると唱ふるに理あり。されば贈物を爲すこと容易ならずして巧妙精緻思慮判断の援助を乞はざるべからず、贈品に關する第一の條件は受納者の感謝にして希望に適ふの必要あり而も贈與者の便宜に專なるが爲、意外の惡結果を來たすに大に愼むべきことなりとす。されば贈與の極意は受納者の地位内意趣味を洞察するにありて贈與者は全然自己を除外せざるべからず。實用品を利とし裝飾品を可とするは相手の如何に據るものなるが近親親友の間にありて手製の品が好感情を興ふること深きは事實なるも佳作たらざるべからず。又玩具の贈與に關しては往々案外の失策を爲し或は家庭に迷惑を懸け或は兒童に惡影響を及ぼすことあり、注意を怠るべからず。

受納者は贈品の如何に拘らず感謝の意を表すべし、贈品に關する冷評は絶対に愼まざるべからざるも喜悅の情を表示するに吝なるの要なし。斯、行爲を以て表裏あるものと認むるは

社交を解せざるが故なりと知るべし。

信仰 信仰は吾人の思想に關すること淺からずして家庭の生命に影響すること尠ならず。崇拜の利害を説き、宗教の善惡を論ずるは當然避くべきものと信ずるも、信仰は思想の如く土地及び時代に從ひて趣を異にすると共に進化の原則に戻らざる次第を明にし併せて家庭の融合に資すべきものたることを了知するの一助に供せんとす。

抑、人類は世界の各處に群生して土地氣候の影響を被り、生存の情態を異にし心性若しくは知識に差別を呈するに拘らず、信仰的思想 (crevances religieuses) を有せざるもの極めて罕なり。之に加ふるに天變地異に對する畏怖、天賜地恵に關する報恩の如き念慮を以てするのみならず、宇宙の幽玄造化の妙趣は世界觀 (cosmogonie) と成り、道義の發達制裁の不備は來世觀 (eschatologie) を誘ひ、優秀者の影響創建者の勢力奇拔なる傳説等は現生觀を導き來りて遂に各種の崇拜各派の宗教は實在するに臻れるなり。されば教理訓義信條に於て祭祀儀式犠牲供物に於て、祈禱信賴に於て、各其の趣を異にすべき

崇拜

氏物崇拜

は勿論にして、信仰に關しては純然たる崇拜 (culte) に止まるあり、道義を加ふる宗教 (religion) あり、兩者の中間に位して程度差等の存するあり。要するに崇拜と云ひ、宗教と唱へ、道義と稱するも、廣義に於ける吾人の自衛の道、自存の法にして吾人の天性知識の程度、周圍の事情等の影響せしが爲に種々様々なる状態は現はれしなり。信仰の效果に就きては茲に是非輕重するの限に非ずと雖、神格經義儀式等の變遷に關して其の跡を尋ねんか、積成の功績空しからずして進化發達を觀るを得、適應其の宜しきに叶はずして退化墮落を免るる能はざるものあるは事實に徴して明なり。

崇拜即ち自然的信仰 (cultes naturels) に關しては諸物其の物を神格として崇拜する所の氏物崇拜を始とし、植物崇拜、動物崇拜等の如き諸物崇拜あり。天地日月星辰山岳河海現象原力物素等に精靈の具はれるを信じ、之を神格とする精靈崇拜あり。人間崇拜 (anthropolatric) に關しては人物崇拜あり。祖先崇拜、英傑崇拜等の如き神靈崇拜あり。殊に祭天、風水、神巫、妖魔等の如き宗教的情態を呈するありて崇拜と宗教との連鎖を爲せり。

氏物崇拜 (totémisme) は宗教の原形なるべしと認めらる、氏物 (totém) とは氏族部族の氏神として

崇拜を受くる動物を云ふなり、往昔はエジプトに鱈、蛇、牛等を氏神とせる部族ありしが、ギリシアの最舊の神は狐、狼、禽類なりき。現時にありても北アメリカ、オーストラリアには鴨、鷺、カンガル、等々を氏神と仰ぐ氏族若しくは部族あり、我が國に於ても今に狐、蛇等に對し供物を獻じて自ら疑はざるものあり。

諸物崇拜

諸物崇拜 (fetichisme) は生物なると否らざるとに拘らず、物には功徳の存するあれば之を崇拜して其の功徳に預らんとするにあり、神體はホルトガル人の「フエイチコ」(fetich) 魔物にして天然物若しくは人工品なるを問はざるも、信者の思想に従ひて物體其のものを崇拜すると物體の功徳即ち物靈を崇拜するとの別を生じて程度の均一ならざるを示せり。

精靈崇拜

精靈崇拜 (animisme) は現存物に就きて形體と精神とを分別し、精靈は變態し得べしと信じ、萬物は悉く靈魂を有せりと爲すにあり、斯く思想の進化するに及びて天然崇拜、(naturalisme) 起り、輪廻説 (incarnation) 現はれ、向上して神靈崇拜に達し、祖先崇拜、英雄崇拜等を觀るに至りしが、一面には神巫宗、妖魔宗等の如き準宗教は發生したるなり。天然崇拜には天象崇拜、星辰崇拜 (astronomie)、元力崇拜、物素崇拜等ありて、日月、星辰、虹、雨、風水、火等に神靈の存するを認め、之を尊信するなり。祭、天宗は天即ち上天を崇拜し、自然を祭祠するにありて、天然崇拜中にありて、優越なる發達を遂げたるものなり。風水宗は陰陽の理、木、火、風、水等の現象に依りて、人事に亘る吉凶を判断するにあり、易經之が基を爲し、迷信之が大成を遂げしもの如し。神巫宗 (dynamisme) は善神及惡神

神靈崇拜

が各處各物に寄寓して、禍福を分配すと信じ、神巫 (dynamis) の媒介に依りて、禍を避け、福を享けんとするにあり。妖魔宗 (magie) は精靈宗の墮落的變態にして、惡性の精靈即ち魔物を仰ぎ、其の功徳に依りて、玄妙不可思議を實現せしむ得べしと信するにあり、今に無智蒙昧なるもの間に行はれ、其の形式は星占 (astrologie)、降巫 (melchisme)、天眼通 (v. yantas)、千里眼 (clair-voies)、媚藥 (philtres)、護符 (talismans)、呪符 (amulettes) 等に亘り、極めて錯綜せるが故に、悉く枚擧するに遑あらず。而も近世に至りては、科學即ち天文學、物理學、光學、音學、水學等、化學、生理學、催眠、動物電氣等の進歩に伴ひて、魔術 (sorcellerie) の多くは降神術 (spiritisme) 又は白魔術 (handicraft) と成りしもの少なからず。

神靈崇拜は神聖なる靈魂を崇拜するにありて、神人式に當れるが、各種の崇拜中最も優れたるものなり。其の英雄崇拜は忠義、孝道、節操、博愛等の德行に譽あるもの若しくは政治、軍事、學識、技藝等を以て世を益せしもの靈を崇拜するにあり。其の祖先崇拜は父母を始とし、祖宗の神靈を崇拜するにありて、古來より廣く各地に行はるる所なるが、其の程度には勿論差異の存するありて、人智の發達と共に高度の進歩を遂げしものあるなり。玄妙不可思議に陥る弊なく、高崇純潔にして、而も道義信念を鞏固にするに極め

て有力なりと云ふ。蓋し戸々家々に於て祖先を崇拜する美習良慣あらんか、修身齊家の基を爲し、家族親族氏族の一致和合に資する所多く、民族を編成し、國民を組織するに及びても、優勢なる援助を與ふべし。殊に我が國の如き皇統連綿たる萬世一系の皇室を戴けるは、嘗に宇内に唯一無二の大寶たるのみならず、積成の理に適へる次第にして大和民族に關し、日本帝國に就きて特殊團結の存するは、故なきに非ざるなり。

宗教即道義的信仰 (religious ethics) に關しては趣旨を異にせる各宗各教の存するありて進化の特質を明示せり。物質唯一を主義とし、萬物皆神ならざるなしと爲す萬有神教 (pantheism) あり。數多の神の存在を信じ、主として偶像・星辰・庶物の三式に依れる多神教 (polytheism) あり。唯一神を數多の現象物素に依りて交換的に尊信する交替神教 (kathenotheism) あり。性質の相反する二神の存在を信ずる二神教あり。一部族・一民族の所奉に限らるる一神特教 (henotheism) あり。世人世界に亘れる一神公教 (monotheism) あり。

佛教は我が國に於ける宗教の中にて民心の迎仰最、深く文化に貢獻すること最も大なるものなり。本教は西紀前第五世期中業に於て印度に起り開祖を釋迦牟尼佛と稱す、支那の符秦

宗教

佛教

の代に先朝、朝鮮の高句麗に傳はり、欽明天皇の十三年に及びて百濟より經像の貢獻ありて弘布の端を啓きたりき。爾來聖德太子は神儒佛合一に依りて政教相資の基を爲し、行基の本壇垂跡、説出でて布教の實舉がり、南都六宗現はれしが、最澄は神佛同體を主義として天台宗を説き、空海は兩部習合に據りて真言宗を弘めたりき。茲に於て佛教大に行はれ、歸依者天下に普く寺院佛閣は各地に建立せられ、空前の隆盛を觀たるに拘らず、年を経るに従ひて弊害百出して教義の紛亂、僧徒の横暴と成り、其の慘毒實に量るべからざるものありき。されば之を濟救せんが爲に、眞忍は融通念佛宗を主唱し、源空は淨土宗を開立して新局面の發展を企て、覺鑿は眞言新義派を唱へ、榮西は臨濟宗を傳へて佛教の革新を圖りたり。其の他、親鸞の世俗的眞宗出で、道元の淨規的曹洞宗現はれ、日蓮は妙法蓮華經の功德を稱揚して大に他宗の非を鳴らし、一遍は時宗を提げ諸國を遊行して念佛を勸説したり、斯くして鎌倉時代は宗派の新古を問はず、高僧智識の輩出を觀、佛教中興は實現せられたりき。而も佛教の盛衰は世の治亂に伴はざるを得ざりしが、故に徳川時代には黄檗宗の開立ありし外には、儒佛の間に多少の軋轢を見しに過ぎずして、監督的保護政策の下に小康を得たるも、維新以來神佛分離と成り、再變して放任主義に移り、各宗は獨立自營の苦境に陥りしのみならず、科學的思想の發達は、佛教前途の運命をして樂觀せしむること能はざるものあり。

基督教 (Christianism) はイエスキリスト (Jesus Christ) の首唱に係る一神教なり。アジアの西端

基督教

レスチナに起りてヨーロッパに傳はりコンスタンチヌスの時、ローマの國教と成り爾來大に流布するに臻れり。然るに異端の説展、現はれて基督教會に紛擾を來たせしこと一再ならずして、殊に近東にありては異説甚だ多かりしが、當時の政權に東西の別ありしは教會の分立を促してギリシア正教會 (Ἡρώτικὴ Ἐκκλησία) の獨立を見たり。第十四世期の頃文運復興の氣運に向ひ古學の自由研究はドイツに隆盛なりし際、マルチン・ルターが基督教の革新を絶叫せしより新教舊教の別を生じ、之が反動としてエスキタ教團は布教の爲に大に努めたり。天文十八年に於て同國所屬の宣教師が始めて我が鹿兒島に渡來せしより漸く各地に傳播せしも、慶長十九年以後は嚴重なる國禁たりき。然るに信教の自由が一度憲法の公認する所と成りしより以來其の傳播は繁を加へて今日に及びり。

信仰の程度様々にして効果は均等ならざるべきも、人生の根本問題を解決し得ざる點に就きては學者識者文旨の差別に何等の價値なきを悟るに難らず、教理信條に關する論議は信仰を上下すること多からず、而も信仰の良否を判定すること容易ならず。要は積極を重んじ、活氣を帯び、生存の價値を認め、信用・希望・戀愛を養ひ、良質を勧め、惡質を斥けて、人格を新にし、苦痛を濟生視せしめ、信仰の自由を認め、寛大有恕を旨とし、幸福に誇らず、義務の

遂行を快とし、未來に對し晏如たらしむるにあり。宗名の大小を必要とせず、經義の深きを必要とせず、源泉の清くして功德の具はるを以て足れりとす、一人一宗尙可なり、信仰の極意は安心立命にあり。宗教心なき者の極めて罕なるに拘らず、之を指導するに道を以てせざるときは迷信に陥り易く、動すれば方位祈禱等の爲に誘惑せられて身を謬るものあるは遺憾に堪えず。又淺薄なる科學思想に驅られて猥に不可解問題を論議するは、實に時間を浪費するに止まらず、反つて迷信を助成するの虞あり、戒めざるべからず。思慮あるものは穩健なる手段に據りて迷信の發達を豫防するに努むると共に既に感染したる信仰的病者に對しては、少なくとも感溺より救濟するに力を致さざるべからず。

迷信 迷信は信仰心が常道より逸脱せるが爲に成生するものにして、似而非義務の遂行を逼り、恐るるに足らざるものを恐れ、信ずるの價値なきものを信ぜしむるが如き不可思議なる結果を招致するを常とす。而も迷信の宗教に於ける猶、占星術の天文學に於けると同様なる關係の存するあり

て迷信は偶然に發生するものに非ず。我が國に行はるる迷信の多くは我が國民性の一たる潔癖を始とし、支那傳來の陽陰論佛教特有の因果説に關係あるを常とす。然れども我が國民は元來性質淡泊にして生ながらの樂天主義者なるを以て現在の此の世を重んずると共に未來の彼の世に對する觀念に冷薄なれば神を敬し祖先を尊ぶも所謂死に事ふる猶生に事ふるが如きを發揮して痛苦を免れ生活難を避けんことを祈るに切にして家庭の安寧を希ひ、世事の煩累を始末するに汲々たるに拘らず、後世に對する覺悟に努めず、勢の信仰の程度高からずして宗教心の發達著しからず。されば知識に乏しきものに至りては簡易なる方法に據りて將來に關する疑問を解決せんとするは寧ろ止むを得ざるに出づと云ふべきか。茲に於てか運勢身、上縁談、普請轉居、旅行開業等の如き當座の問題を解くに適合せる各種の占術、九星術、觀相術等の發展を促せるのみならず、一層簡單なる墨色神籤、干支納音五行二十八宿六曜等の案出せらるるを見たり。

占術

占術は事の裏を察する術にして物の象に由りて未來の出來事に就きて

古易

吉凶を考ふるにあり。太占は上古に行はれたるトにして鹿の肩骨を刻みて焼く際に裂けたる文にて吉凶を占ひ。又龜の甲を焼き其の縦横に裂くる状態に見て考ふるなり。占易は一にト、筮と唱へらる、周の世に完成せられたるが故に周易と稱せらる。占術の中に最形式の完備せるものにして五十本の筮竹と六箇の算木小形の方柱にして三箇の中部に一刻を入れ、他の三箇には之なし。とを用ふ。

占易。占易の方法に就きて大要を示さん。筮竹の一本を別にして大極に象り、不可解なる感通に依りて四十九本を二分し、之を天地陰陽の兩儀に象り、右策の一本を探り、前の兩者に合はせて天地人の三才に象る、左策の筮竹に右策より別にしたる一本を加へ、之を二本づつ、四回即ち八本づつ數へ、殘數に依りて乾、兌、離、震、巽、坎、艮、殘數の遞加順を定め、殘餘なきときは坤と爲し、天澤、火雷、風水、山地の八象を得るなり、之を内卦(下卦)と稱して下に置き、同様の方法に依りて外卦(上卦)を得て上に置き、始めて重畫六爻の一卦を爲すなり、斯くして内卦八象に外卦八象の一を配するなれば乾下坎上、三三の水天需、

艮下坤上 三三の地山謙、離下離上 三三の離爲火、艮下兌上 三三の澤山咸、巽下坎上 三三の水風井等の六十四卦を得、更に二本づつ三回の六本拂を施し、殘數に依りて初爻乃至上爻(六爻)の一を得て變爻は定めらるるなり。斯くして何卦何爻は具はりて占はんとする事項に對する卦は現はれたるを以て之に關する卦辭、家辭等に據りて占筮せんとする事項の梗概を觀じ、爻の辭に従ひて特情を斷ずるなり。

今左に八卦の各々に配せらるる象、徳、人格、身體、畜禽、季節、方位、五行等を掲ぐれば、次表を得るが、如何に人爲的にして結構の一端を推知するを得んか。

卦	象	徳	人物	身體	畜禽	季節	方位	五行
三乾	天	健	父君	首	馬	秋(辛)	西北	金
三兌	澤	説	少女	口	羊	秋(庚)	西	金
三離	電	麗	中女	目	雉	夏(丁)	南	火
三震	雷	動	長男	足	龍	春(甲)	東	木
卦	象	徳	親子	身體	畜禽	季節	方位	五行
三巽	風	入	長女	股	雞	春(乙)	南東	木
三坎	雲	陷	中男	耳	豕	冬(壬)	北	水
三艮	山	止	少男	手	狗	冬(癸)	東北	土
三坤	地	順	母	腹	牛	夏(丙)	西南	土

ト筮が占術として巧妙なる所あるに相違なきも、何等占筮上に理據の存

するを認むること能はず、神明に通じて示教を受くと云ふ信念を外にしては何等原因結果の關係を明にすること能はず。要するに易斷なるものは複雑にして變化極まりなき不可解の人生問題を四百に滿たぬ豫定の條項に照らし憶測を逞しうするに過ぎず。而も神明に接觸するの容易なるを信ずるに臻りては寧ろ滑稽と云ふべきか。

占術其のものに就きての大極兩儀、三才等の如き勿體を省き、算木の陽爻を1とし陰爻を0とし、二進法に依れば坤の三は0、震の三は1、坎の三は2、兌の三は3、艮の三は4、離の三は5、巽の三は6、乾の三は7と成る、八本の籤を作り之に0乃至7の番號を付したる後、抽籤して内卦を定め、更に抽籤して外卦を決し、重畫六爻の一卦を作るものとす、斯くして坤下坤上の三三(坤爲地)即ち0より乾下乾上の三三(乾爲天)即ち63までの六十四卦を得るを以て更に六爻に就きて抽籤を行ひ初爻乃至上爻の變化を求むれば豫定の000000の場合の一に當るべし、言を換ゆれば三百八十四本の籤に據りて卦爻の決定を求むれば一層輕便にして獨占を行ふこと容易なるべし。是に由て之を觀ればト筮は神籤に對し多く選ぶ所なきを了知するに難からず。神籤は一に御、と呼べる、神佛に祈りて吉凶を占ふ方法なり。人事に關する情況に就きて場合を盡すを旨とし、吉凶の程度を異にする若干件普通には一百件即ち一百番を設くるを例と

し、大吉、半吉、大凶、小凶、凶等に各若干つを配すを想定し、各件に對し豫言を作成し置き、抽籤に依りて番號を探り求め、該當せる宣文に基づきて自判斷する。或は神官僧侶に就きて宣文の解釋之に伴ふ憶斷を乞ふなり。御圖は神力若しくは佛陀の功徳を重んずるに因あるものなるべきも、人意に依りて神佛の權威を付度拘束し、各自の願望、憂苦に對する相談相手を神佛に求むるは無邪氣とも見ゆれども、亦愚昧の極みとも云ふべき。

占星術

占星術 (astrologia) は星の鑑査に基づき、之が運行・位置等に依りて算命・天宮圖・運勢圖等を作り未來を豫言し、運勢を卜するにあり。太古カルデア人の創意に係り、エジプトに行はれ、ギリシアに傳はり、ローマを經、中古に及びて西ヨーロッパに盛なりき、而も第十六世紀を最高點として漸く衰頹し、ルイ十四世の出生當時に運勢圖は作成せられたるも、信用するものなく、星占官の廢止を見るに殊れり。現時にありては殆ど信者の跡を絶ちしも、神秘家、好事家に尙ほ多少の餘命を繋ぎ得て各種の魔術・降神術と同様の待遇を受く。黃道帶に於ける白羊、金牛等の十二宮を始とし、吾人の日常用ひつつある日月火水木金土の七値の如きも占星術の遺物に外ならず。蓋し日曜日 (Solis dies) は太陽を、月曜日 (Lunae dies) は火星軍神を、水曜日 (Mercurii dies) は水星商神を、木曜日 (Jovis dies) は木星神、神を、金曜日 (Veneris dies) は金星美神を、土曜日 (Saturni dies) は土星(天地)神を以て各守護神と爲すが故に斯の如く命名せられたり。

二十八宿

二十八宿 支那に行はれし舊式の天文学に於ける周天の星宿にして東北西南の各七宿を

配せしを以て二十八宿を爲せるが、星占術に於て十二宮を設くるに似たり、然るに之を二十八日に充て、日の吉凶を定むるに當り、東方の角(吉)、亢(半吉)、氏(大吉)、心(吉)、尾(吉)、箕(大吉)に吉日多く、北方の斗(吉)、牛(凶)、女(半吉)、虚(大凶)、危(凶)、室(吉)、壁(大吉)に吉凶相半し、西方の奎(凶)、婁(吉)、胃(大凶)、昂(吉)、畢(吉)、觜(凶)、參(吉)に凶日多く、南方の井(吉)、鬼(吉)、柳(凶)、星(半吉)、張(大吉)、翼(吉)、轸(大吉)は吉に勝れり、方位と日の吉凶との間に直接何等の關係なきに拘らず、二十八日は四週に當り、太陰の周天期間に近きを便として用ひらるるが如し。

干支

干支 干支は幹枝にして兄弟の義に通ず、元來曆上に用ふる語にして六十年の長周期又は六十日の短周期に當れるが、五行と兄弟とを併はせ配して十干に充て、甲(木)兄、乙(木)弟、丙(火)兄、丁(火)弟、戊(土)兄、己(土)弟、庚(金)兄、辛(金)弟、壬(水)兄、癸(水)弟と爲す、又十二支を子(丑)寅卯辰巳午未申酉戌亥とし十二種の動物鼠牛虎兎龍蛇馬羊猴鷄犬猪を之に充つ。何等の研究を經ず、感想・憶斷に外ならざる特質を此等の動物に附與し、五行の特質に併はせ考へて、勝手の吉凶通否を想定したるに過ぎず。

六曜

六曜 先勝は動態の日にして活動を旨とし、午前を吉とす、友引は吉凶相半して勝負なし、事の繰廻へさるるを特徴とす、先負は靜態の日なり、午後を吉とす、佛滅は凶日なり、佛事を營むに適す、大安は大吉なり、萬事に適す、赤口は凶日にし、萬事に好しからざるも、午の刻を限りて可と

す。全然人爲的にして頗る俗情に投ぜるのみならず周期短く極めて簡單にして會得し易く適用上に便なり、従つて迷信者間に大に行はる。

九星術

九星術は先天の八卦及び後天の八卦に基づき、定位の循環勢威の消長に考

二	七	六
九	五	一
四	三	八

へ、易經を理據とし、遁甲法に則ると稱せらる。八方の八に中宮の一を加ふれば九を得るが故に洛書に従ひ一乃至九の九數を上圖の如くに排列せんか縦横交叉皆十五と成るの特殊

を呈するなり、是、數學家の所謂魔、方形 (carré magique) の最簡なるものにして何等奇とするに足らず、數を筋違に排べ夫だけ進めの規則を應用すれば二十五(一乃至二十五)の二十五數、四十九(一乃至四十九)の四十九數、縦横交叉皆同數の和を與ふべし。而も九星家の大に珍とする所に係りて陰陽消長の理

坤	兌	乾
離	中	坎
巽	震	艮

を示し興廢得失の意を明し、吉凶悔吝の微を顯すと信じ、九星を設け、之に八卦五行を配して一白星を坎、水、二黒星を坤、土、三碧星を震、木、四緑星を巽、木、五黄星を中宮、土、六白星を離、金、七赤星を兌、金、八白星を艮、土、九紫星を離、火と爲し、九星の性情を想定し、相生相尅

星を兌、金、八白星を艮、土、九紫星を離、火と爲し、九星の性情を想定し、相生相尅

比和等を加味して管に方位の吉凶を鑑定するに止まらず、人事百般の吉凶を判断せんとす。

九星術を運用するの基礎は年月日刻の循環にあるを以て年と日との九星即ち天盤并に月と時との九星即ち地盤を上表に依りて作らざるべからず、例へば三碧の年、四緑の月、五黄の日、六白

中宮	一白	二黒	三碧	四緑	五黄	六白	七赤	八白	九紫
乾	二	三	四	五	六	七	八	九	一
兌	三	四	五	六	七	八	九	一	二
離	四	五	六	七	八	九	一	二	三
震	五	六	七	八	九	一	二	三	四
坎	六	七	八	九	一	二	三	四	五
坤	七	八	九	一	二	三	四	五	六
巽	八	九	一	二	三	四	五	六	七
震	九	一	二	三	四	五	六	七	八

の刻とし、本命星三碧なる人の身上を判断せんに地盤の刻に本命が坤局にありて月の坤局に一白あり、日の本命は震局にありて年の震局に一白あり、由て本命は坤局に居て一白係ると云ひ、之に關する辨辭を参照して判断を下すなり。縁組相性に就きては相生を吉とし比和之に次ぎ相尅を凶とす、方鑑に關しても同様に五行の生尅を基礎とす。要するに九星術は未來に屬する不可解の事項を始末せんと試みるに外ならずして其の說辭を以て必も善ならずとせざるも、畢竟するに千變萬化して盡ることなき運命人事を驅りて豫想に過ぎざる少數の場合に限定するは不條理の極みと云ふべし。而も事情の細目に亘りて憚らず、狼に吉凶を判断するに瑛りては妄誕たるを免れず、殊に無智蒙昧にして可憐の状態にあるものを欺瞞し、若しくは神經過敏に陥りて穩健なる判断を下だし得ざるものを誘惑し、或は一舉一動に干渉して生

活を萎靡し、或は思想の自由を拘束して精神の發展を阻害すること尠少なからざるは斯くて許容すべからず。

骨相

骨相 (Chamaeleon) は頭腦の構造に基づきて心理を解釋せんとするにあり。ゴール (Gall) の創意に成りて腦の各部は特殊の任務を有し其の發達は程度に従ひて頭骨の形狀に影響を及ぼすべきを以て頭骨の凸凹は特質・性癖を鑑識するに足ると提唱せしが、スプルトツハイム (Spurzheim) は三十八機を算し其の中十箇は本能に十二箇は徳性に十四箇は知覺に二箇は思考に屬すと主張せり而して智力は前頭部に存し徳性は中腦を占め本能は後頭部に位すべく認められたり、本説は一時世人を驚かせしも近年に及び信用殆ど地に落ちたり。尙ほ頭骨に就きて横斷的示度を測りて長頭・中頭・廣頭に分ち縦斷的示度を測りて高頭・平頭・低頭に分てるが、面角の外に顎角に就きて直頭・中頭・突頭を見、頭容・腦量に就きては差異の存するありて、智力・腦力等の發達を推斷するに資すべきに相違なきも何等一般的の鑑別法に適合するものなし。

人相

人相 相形は顔面の恰好に關する調和若しくは形狀的配置并に筋肉の狀態・血液の循環等に依れる神経系統の活動と共に有用なる習慣の聯想若しくは相反の結果に成れるものにして喜怒哀樂の如き精神作用が顔面に現はるるは世人の普く知る所なるのみならず、表情術は身振及び相形の働

て感想・思想を啓發顯出するなり。されば人相術 (Physiognomia) が形相の解釋に依りて性格情勢を付度説明せんとするは理據ありと認む、西人の唱道する所に依れば高額は高尚なる思想・想像・發明、低額は獸性の發達、尖額は敏捷・狡點の徴にして小鼻の薄くして動き易きは肉慾の著しきを示し、上唇の前進せる口は堅實・確固を現はし、ガロッシュ形の顎は意志の強きを常とすと云ふ。漢土に行はるる相貌説には人は地の十二氣を受けて生れ、天の五氣を以て運動するが故に萬物の靈なりと稱して復・紐・猛・泰・逆・愛・充・薄・卒・脫・窮の十二宮を設く。而も人相は主として鼻・目・口・耳・顔面・頭形等に關する總合的状態・概括的容姿に據るものなるが、人種・慣習・風俗等の影響を受くること頗る深く、我が國に於ける貴相・清相・壽相・天相・福相・貧相・厚相・薄相・惡相・異相等の各相は白人若しくは黒人に適用し得べからず。又形貌と精神との相伴はざる場合少なからずして君子の容貌に愚なる所あると共に利口相の馬鹿も存するが、内容の改良が外形に影響するは事實にして外形の修飾にも内容の改善を誘致するの力なきに非ず。要するに人相は吾人の先天的言語

にして表情に對し密接なる關係を有するが故に社交上に影響すること甚だ多く従つて利害を感ずること甚だ大なり。然れども外觀に據りて性格・心情を鑑別すること容易ならず、蟲をも殺さぬ毒婦あり、柔和にして親切に見ゆる卑劣漢も、少なからず、知識と經驗とを併有するに非ずんば適應せる判断を下だし得ざること當然なりとす。茲に於てか人相家なるもの現はれ人の容貌を觀て其の人の心事、天壽、貧富、禍福等を豫斷して憚からざるに臻るは奇と云ふべし、營業的なるが故に方式の簡なるを便とするも、而も勿體と修飾とに重きを置かざるべからず。心情性格に對し直接何等の交渉なき塵子、疣、齧、麥、柏等の如き無稽なる材料に據れるを裝ひて巧に所要の資料を捕ふるに努め、遁逃自在の漠然たる言辭を弄して管に目下的の縁談・相性等に止まらず、遠く將來に及ぶべき身上・運勢に對し、斷案を下だすに臻りては實に荒誕を極むと云ふべし。

手相

手相。人の手筋・手理即ち手先の紋狀を相して其の人の吉凶を説くにあり。手先は顔面と同様に筋肉の働きに鋭敏なるものありて精神の活動に對し密接なる關係の存するは事實なる

相性

も所謂手筋なるものは、端にして皮薄く肉附好き手に著しきを例とし、紋狀の如きは手骨指骨乃至筋肉の概括的狀態に據るのみにして畢竟するに表皮に於ける偶然の皺たるに過ぎずして感情・心事に對し何等直接の關係あるなし。斯く手筋に依りては喜怒哀樂の如き現實の感情すら窺知し得ざる次第なれば、手相家の提唱に係る、天地人の三才筋、天下筋、子持筋等の走向に據りて運勢を判し、子孫の繁榮を斷するが如きは何等の理據も具はらざるものと云はざるべからず。

相性。廣義に従へば若干の人が共存同棲するに必要な心性・體質等の統合的情態なるも、狹義にありては夫妻の間に存すべき融合・調和の實現に資する所の特殊情態なり。往時において體質に膽汁質・淋巴質・神經質・多血質等を認めたるも、近年の研究は此等の差別に關する價値を疑ふに至りて遂に廢棄せられたり。體質に比し遙に複雑なる心性・氣質に就きて五行性・九星質を設け之に據りて相性の吉凶を判定するは、縱令相生相尅の理に面白き事情の存するのみならず、天盤地盤の循環に興味ありとするも、畢竟するに人為的豫斷に據りて人生的變化を拘束せんとするにありて到底無稽妄誕たるを免るる能はず。而も吾人の氣質・體質には千差萬別の存するに拘らず、變異の程度著しからざるを以て相生相尅の勢威は極めて微弱にして相性より生ずる吉凶を冷眼視するも妨げなきを常とす。斯の如くにして實際の利害は顧慮するに及ばずして迷信の損得も亦深く論ずるに足らざるべし。要するに氣休的に過ぎ

ざる迷信は無害として打捨て置くも尙可なり、理想的又は道理的に解決せらるべき場合に於ける迷信の横行には鐵槌を加へざるべからず、氣に懸けぬ迷信は威壓するの要なしと唱ふるものあれども、氣に懸らぬ迷信とは迷信なきの義に當り何等の煩を與へざるものを始末するに及ばざること勿論なりとす。

厄年 古來我が國の俗習は厄年なるものの存するを信じ、前厄と後厄とを合はせて三年間に亘れる期間を非常なる恐怖の中に経過して只管災難、危害の身に及ばざるを祈る。而して所謂厄年は男の二十五、四十二、六十一にして女の十九、三十三なるが、男の三十三、女の三十七、七十三は廢れたるが如し、就中男の四十二年と女の三十三年を以て厄年の厄年と認めて痛く神經を惱すなり。元來厄年の思想は支那より傳はりたるものにして彼の國特有の陰陽説に基づくならんも、生理上の危険期に關するのみならず、我が國の風俗慣習に因あると共に御幣擔の加味あるを疑はしむ。男子の二十五年は處世の初期に對する門出乗出として大に戒愼すべきものあり、六十年は本卦返に當り往々愚に返りて自棄するの結果、老機達に熟し、氣力頓

厄年

に衰へ、疾病に罹り易きが故ならん、又女子の十九年は主として新婚若しくは初産に因ある危惧に基づくならんと察せらる。而して大厄と稱せらるる男子の四十二即、四二は死に通ひ、女子の三十三は三三(産産)の九苦に通ひて大に御幣を擔ぐに由るならん、殊に四十二の二子に關して珍談の多きは寧氣の毒と云ふべし。

御幣擔

御幣擔 世間に案外多き習癖にして些々たる事柄をも不吉と思ひ込み、痛く氣に懸け、之を祓ひ除かざれば止まざる底に及ぶを常とし、或は神佛に祈り、呪禁を行ふが故に神に祈り幣束を以て凶事穢を祓ひ除くの例に見て、斯習癖ある人を御幣擔とは稱するなり。多くは心理上の特別状態に關係ある強迫觀念性格より來たるものなれども亦迷信之が因を爲すもの少なからず。年始の重詰に數の子まめ、かちぐりを悦び、結納の品にかつをふし、よろこんぶ、しらがを選むを始めとし、梨を有の實と呼び、香の物の三切(身切)を忌み、裁物は卯の羽重、酉の羽重と云ひて卯の日酉の日を限り、申の日の裁物に燒焦多く、丑の日に縫ひ始むるは永引くの虞ありとし、寅の日は結婚と葬

式とを忌むも旅立に好いと唱へ、硯箱を當箱、箱鉢を當鉢と改稱し、卯亥巳未に爪切るな、出爪とるなよ恥をかく、七、過ぎには新しき物を使い始めず、日暮れて購ふ食鹽を浪の花と呼び、婚禮に關しては歸るを早くと云ひ、元旦に掃出すを忌みて除夜に之を行ふて得々たるは笑止なれど文明の利器たる電話の番號に就きても四二八六(死病む)四七六(死なむ)等を嫌ふものあるは滑稽千萬と云ふべし。文明國と自稱するフランスにも、金曜日の旅立入院等を忌み十三人の客を嫌ふが如き弊習を見るが、邦人は茶碗の中に茶の立ちたるを悦び、流石のヤンキーも食卓上にて鹽を零ぼすを忌むと云ふ、御幣擔も世界的たるの性質を有せり。

舊曆

舊曆。我が國に於て明治五年まで行はれし、所謂舊曆は俗に太陰曆と稱せらるも事實は太陰太陽曆にして東京の子午線に據れる太陽と太陰との運動に基づきて作成せられたる頒曆なりき。年首は太陽が双魚宮に入りたる後の新月に當れるが、平年は十二太陰月より成りて三百五十四日若しくは三百五十五日を含み、閏年は十三太陰月より成りて三百八十三日若し

くは三百八十四日を含めり、月に大(三十日)と小(二十九日)とを設け、一章十八年七月間に七回の閏年を置きて日月の運行を調和せしむ。一年を四季に、一季を六氣(三節三中)に分ち、更に一氣を三候づつに分つ即、春季に立春雨水啓蟄春分清明穀雨あり、夏季に立夏小滿芒種夏至小暑大暑あり、秋季に立秋處暑白露秋分寒露霜降あり、冬季に立冬小雪大雪冬至小寒大寒あり、之を二十四節とす。十干十二支を併用して六十的周期を作りて日次及年次に適用す。理論上優位を占むる本曆は計算の複雑なるが爲、要領を得るに困難なること太陽曆の簡なるに遠く及ばず。而も本曆の特徴は冬至夏至春秋の彼岸日蝕月蝕等の如き天文的事項と八十八夜半夏生三大厄日等の如き氣候的事項とを併記して兩者の間に存する差別を明にせざるにあり。斯の如く各種事項の掲載方に不完全なる所あるが爲に精粗を分たず、確乎たる日時を指示するに難からざる天象に比すれば事情の遙に複雑せる氣象に就きては出現の期日を判然豫告すること不可能なるに拘らず、兩者を混同して記載せるが故に二百十日の災厄は日蝕と同様に豫定の時日を以て

到來すべく期待せらるるが如き、奇觀を呈するなり。蓋し氣象の出現は太陽の運行に伴ふこと勿論なれども、全然之が爲に支配せらるるものとするは、謬見にして、緯度を始め海陸の關係、土地の高低、海流、氣流の趨勢等の外、土質、樹林、草原にも關係の深さを忘るること能はざればなり。加ふるに上段に天一天上天赦日、社日、十方暮、八專、土用等を掲げ、中段に建除、滿平、定執、破危、成納、開閉の十二省を配り、其の他に尙幾多の事項を記入せるも概して吉凶を占ふの資に供せり。要するに舊曆は我が國に於ける迷信を助長せしこと極めて大なるものあり。

八十八夜は立春より算して八十八日目に當る日を云ふ、此の日を以て春霜の限りと爲し、耕種の候に入る。半夏生は半夏草(Saururus laniatus)の若根を生ずる頃を云ひ、夏至後十一日目に當り、此の日以後に田植せず。

厄日

厄日。入梅の日は梅雨太郎、八專の二日目は八專次郎、夏の土用入より三日目は土用三郎、寒入より四日目は寒四郎にして、孰も厄日なり、其の日の天氣に據りて耕種の豊凶を卜す。八朔、二百十日及二百二十日を以て三大厄日と稱して暴風雨の襲來日と爲す。

第三章 國家

家庭 親族 氏族 部族

自然の要求に基づきて家族の發生するや親權の統治を受けて血族的集團たる家庭は形成せらる。然るに旁系的同族の増加するに及びてや共同援助の利に覺り、争鬪掠奪の害に備ふるが爲、血縁的集團たる親族(tribe)は族長に依りて平和を支持し防衛に當るなり。勢威漸盛にして繁昌の端を開きし結果、四近の住者に接し往住を試み來住を拒むことなく、多少の異分子を混ざるに至るも克く同化して氏族(tribe)の般賑を生じ、高祖の子孫を氏頭に仰ぐなり。而も星霜を経るに従ひ團員に一段の増殖ありて住域に一層の擴張を見んか、血縁上に失ふ所あるも共存に依りて實力の發展を圖り、住域的大集團たる部族(tribe)に進み、族中の有力者を酋長に戴きて大部落は成立を告ぐるものなり。然るに生業益發達して漂遊式の生活は漸次に土着式と化し餘裕を生じ積成の實舉がり、幾多の部族は或は共益の便に従ひ或は攻略の威に服し混同して更に大團を結び、同一の地域に永年の共存を

民族

遂げたるが故に言語を均しうするを特徴と爲せる民族 (Nation) は組成せられたり。是、民族を以て積成の效果に據れる歴史的人類の一單位なりと認むる所以なり、殊に現代に於ける優秀民族には起源・住域・血縁・形貌等の自然的事情に關すること疎にして信仰・主義・思想等の如き共存的事情に係ること厚く、言語・戦争に據りて團結を鞏固にせし例に乏しからず。而して斯、大團體の組成せらるるや優秀なる人傑を主權者に奉じて統治を委ね、被治者も能く其の命令に服従し、權利を完うし、義務を盡して始めて昌平安泰の國家は成立するなり。されば國家の要素は人民・版圖・主權の三者にして相應の組織を具へ自主獨立の實を擧げて始めて完全なる國家とは稱すべきなり。國民即人民・臣民なるものは同一の主權に服従する人類一部の云ひにして民族と直接絶對の關係を有するものに非ず。版圖とは地球表面の一限域の云ひなるも連綿として相接する土地たるを必要條件とせず、殖民地・附庸地・附屬地として世界の各方面に亘り、本國との間に海洋又は他國の領域が介在するを妨げず。主權は限定ある土地に共存せる人類の一群に對して

國家

國民

國土

主權

國體

政體

總合的利益の保護發達に努むべき權力にして其の眞價は理論的の所在に非ずして活用の程度如何に存するなり、然るに活用の良否は國家成立以來の變遷に據り永年の積成に基づける國家の性情に適する制度の採否に關係すること極めて深し。然るに創立より現今に至るまで子々孫々傳へ傳へて漸次の進化發展を遂げたる國家が經歷を重ねずべきは理の當然にして君、主、主義に熱衷すべきは情の自然なり。血縁薄く共存の歴史に乏しく、各箇別個の發達ある異分子の集合團體は理に銳さも情濃ならず、君主世襲の妙味を悟り得ずして直接率直に是非を論議し可否を判斷するに便なる民主制度を採用するに何の怪むべき所あらん。乃、國體は主權が世襲の君主に存すると民衆に屬するに從ひて君、主、國と共和國との別を生ず。而して政體は國家の活動に資する所の機關國務を遂行するに必要な政治的組織にして吾人の社會的進化と教育との程度に據りて實際の狀態を異にせり。

世に往々國體と政體とを混ざるものあるは大なる誤にして國體は某時

期某時代に於ける社會の各種素因に關する發達の程度を表示し、政體は此等素因に關する任務の商量活動の按排を指示す。語を換へて言へば國家は國民の認識的部分組織的部分にして政府は專、共爲機關抑制機關を代表す。されば國體に何等の異動を與ふることなく政體は或は形式を變更し或は爲政者を更迭すること難からず、政府は國家ならず、政體は國體の覆被皮殼に外ならず。

部落制度を距ること遠からざる低度の國家にありては首長が世襲なると選舉に依るとに論なく、政治は專制的なるも、獨裁の程度は漸次に輕減せらるるを常とし、傍側の顧問助言者との融和は現はれ、不文の規準は存するに臻るなり。而して進運に阻碍なく、發達に蹉跌なくんば國家は益、隆昌に赴き、勢威を擴め、根本的の規約なる憲法の制定は實行せられ、内には富力の餘裕を具へ、外には威力の振張を圖り得るなり。

國家は國法及之を實行する權力に據りて生命を保持す、實行の權威なき法律は死文、空文たるに過ぎず、法律に據らざる權力の下には眞の國家は消

國法

三權

失して頭領と奴隸とを見るのみなるべし。故に組織の完全せる國家は立法、司法、行政の三權に基づきて内外各般の政務を遂行せり、蓋し國家が其の存立を鞏固にし活動を有效ならしめんには内治に意を用ふるに止まらず、外部に對して獨立の實を示し、國威の發揚に努めざるべからず。國權は國民を保護し、公益を圖りて始めて重く、國法は權利を侵さしめざるに於て尊ぶべく、危害を避けしむるに於て敬すべし、而して奉公の念深き國民は國法に服従するを以て最要の義務と爲さざるべからず。

社會と國家との別 社會と國家との間に存する差別に就きて一言せん。社會は國家に比し意義の廣濶なるに留意せざるべからず。純然たる政治的關係に成れる國家に較ぶれば、社會は經濟、法律、信仰、道德等各派の集團間に於ける相互的動作に據れる複雑なる集合體として其の範圍頗る宏大なるを覺ゆるなり。而して國家が強制的權威を意味するに對し、社會は天然自生に係る合成的の組織と發育との義を包藏し、前者は強威的結合の下に統一せらるる集團なるも、後者は永年の慣行に促成せられたる團體にして

社會と國民との別

社交的連帶責任に從屬するに拘らず、外部より侵入せんとする威力に對して殆ど没交渉なるを特徴とす。加之國家が理性的なるに對比し社會が本能的なるを認めざるべからず、甲者は優秀なる理性的規範を以て自任じ、自覺力なき天性的の乙者に對し君臨して其の活動を指揮し之に改良を施さんと努むるなり、實に理性の發達せる國家と不覺不明の社會との關係は恰、人體各部の機能と腦髓との間に存する關係の如しと云ふべきか。

現下の人類社會は吾人の天性に端を啓き千古以來の變遷を経て積成の効果を擧ぐべき次第なれども、各方面に於ける自然若しくは人生に關する事情に様々なるものありて國家の狀態均一ならず、國民の生活にも種々なる變異は存するなり。蓋し土地に於て業務に於て資財に於て其の他に於て千差萬別あるが爲、社會的組織にも千姿萬態は顯現せざるを得ざればなり。されば社會の事情を靜態的若しくは動態的に研鑽し併せて經濟上より見たる狀況を詳にし、其の結果に據り、之に適應すべき政策を施さんこと肝要なるべし。

然るに近代の社會狀態を察するに異常の思潮の漲るありて嘗に經濟的組織を變改するに止まらず、社會を根柢より破壊し、更に理想的の新社會を建設せんと主張する所謂社會主義の實在を認めざるを得ず。抑社會主義なるものは宿弊多き社會を改造して完全なる新社會を現出せんと提唱するも、其の程度方法等に差異は存するなり、就中無政府主義は現存の主權を嫌忌して之が滅亡を期せるが、其の主張の激烈なる、其の手段の莽猛なる、實に想像の外にあり、文化の暗黒面とも稱すべきものたるに拘はらず、現時に於ける道徳の狀態、經濟の趨勢が醸成したる結果なりと爲さざるべからず、物質的文明に空前の發展ありて僅々數十年の間に於て吾人の生存狀態に驚くべき進歩を實現し、改良は加へられたり。茲に於てか爲して遂げ得ざるものなしとの妄念を懷くもの出て來り、短見偏識の徒ありて事の不可能なるを慮らず、事の順逆を究むる暇なく、漫然實行を企圖するに臻りたり、大工業の不幸兒たる貧民を驅りて味方とし以て決然として遂行に當るなり、石油、ダイナマイトを提げ熱狂して暴舉に出づるなり。實に手段としては

悪むべきなり、方法としては罪すべきなり、而も主義としては吾人の積成性に戻り、自主自由の原則を忘却したるものなりと斷ぜざるを得ず。現時の社會組織には不完全にして不條理なる所あるを認むるに於て感と同じうす、當今の經濟状態には偏頗なる所あるが故に資本の暴戾、労働の究迫を除く去せんとならば同情するに躊躇せず。然れども吾人は生れながらに不均等なり、體力同じからず、智力同じからず、志望同じからず、活動同じからず、從て生存に絶對の均等を期するは實に妄の妄なるものなりと云はざるべからず。適材を適所に置くを主義とし、獨占を各方面に打破りて應分の幸福を享受せんと主張し、之を強制するも亦策の得たるものなるべきか。

無政府主義(anarchisme)は一に無形主義(anorphisme)と云ふ特殊の政治的社會主義にして自然的權利の下に個人の自由發達を主眼とし、中央政府の存立を認むることなきも、專横を防遏するに足るの機關を備ふべきものなり。

帝國 五大洲中の最、廣大なるアジア洲の東、五大洋中の最、渺漠たる太平洋の西に方り、天龍の將に雲上に登らんとするが如き形特を有する群島あり

無政府主義

り、東西南北皆碧清たる海原にして夏と雖、暑からず、冬と雖、寒からず、山水明媚風色絶佳にして土地肥沃五穀豊稔なり。斯、幸福有望なる地に據りて國を建て二十有六世期を経て國威大に揚り、南に臺灣を收め、北に樺太を容れ、西に朝鮮を合はせて帝國の版圖は擴張せられ、新領土は構成せられたるが、加ふるに關東州を租借し、南滿洲及東蒙古に鐵道、其の他の利權を享有して勢圏を劃せるあり、是、萬世一系の天皇の統治し給へる大日本帝國の政治疆域たり。

史前的住民

我が群島に於ける史前住民には北派の土蜘蛛、南派の熊襲、中派のアイヌの外、最要なる大和種族あり。同族は高天原族又は天孫族と稱せられ、高天原より朝鮮半島を経て中域に來りし如く推考せらるるが琉球列島の天孫氏、本州島の出雲族、朝鮮半島の扶餘族と共に南方より移れりとする説なきに非ず、本種族は先住の土民を征服同化したるのみならず、出雲族をも混同して後來一大國民たるべき基礎を固めたり。朝鮮半島に侵入して獺貊等を従へ、漢族を降だしたる出雲族は肅慎、夫戎と勢を争ひ、沃沮、挹婁等を征し、

漢族を敗りし扶餘族と絶えず往來せしもの如し、而して馬韓辰韓弁韓靺鞨大和等の各種族も該半島に關係を有せり。神功皇后の征韓以來、群島と半島との交通は漸次に頻繁を加へたれば、兩部の住民間に血液を交えたること少なからざるべし。且又年所を経るに従ひて大和民族の領域は擴張せられて遂に今日に於ては國內に大和朝鮮支那臺灣アイヌギリヤークオロッコ等の數種を算するに臻れり、然れども各種族の多寡に就きて留意するときはギリヤーク以下は列擧の價値なくして支那臺灣の二種族を合はすも僅に全國人口の五分を越え、朝鮮種族と雖、亦二割未滿に過ぎずして國民の大多數を占むるものは大和種族なり、されば我が國民は種族上單一性を具ふるに近くして國民の團結上大なる便宜を有するなり。

大和種族

大和種族。本種族は黄色人種に屬すと認めらるるを例とするも、黄色人種及びマライ亞種に白色人種を混濁せるものなるべしと信ずるに理由は存するなり、蓋し本族中には優粗の二式が實在するに徴して明なりとす。甲者は卵形の顔面に、眼口整ひ、直鼻稍高く、皮膚は色白く若しくは淡黄色を帯び、

現代住民

體軀細く手足小さし。乙者は球頭、廣顔、斜眼、秀鬚等を呈し、體軀は重厚の感と與へ、皮膚は濃色を有せるが鬚髯に乏しく毛髪は眞黒なり。兩者に共通せる身長は平均は男子に百五十八糎、女子に百四十六糎にして男女を通算すれば平均百五十二糎と成りて人類の平均身長より低きこと十一糎半に及べり。

國民性

氣質に就きては我が大和種族は所謂日本魂と稱する特殊の性情を具へ、累世相傳へて消滅することなし。信義を重じ忠誠にして尙武の風を有し、愛國の念甚く深く、活潑鋭敏にして思考力に富み、勇敢にして進取の志あり、而も淡白寛容にして清潔を好み温和を旨とし極めて實際的なり、加之技藝に巧にして殊に美術に長じ、日本美術の名をして宇内に高からしむるに臻れり。然れども其の裏面を細に觀察し來たれば、輕卒にして自重の念乏しく、奇を好み新を追ひ朝に求めて夕に捨つる狀なきに非ず、良好の慣習も單に舊古に屬すと爲して之を斥け、反て人の爲に冷笑せらるることなきに非ず、思想の變動頗激しく一定の規準を尊信し之に依憑せんとするの念慮に缺

くる所あるが如し、殊に經濟思想に乏しく動すれば目前の小利に奔りて永遠の大事に着眼せず、一旦急勢に乗じて熱情するも些少の困難の爲に挫折せらるるの憂なしと云ふべからず。

要するに吾が同胞は其の良徳美質に係るものは飽くまでも之を保存し之を勵磨すると共に其の惡習偏僻に係るものは刈除するの策を講究し以て國人の品性を陶冶し、乾坤の大劇場に立ちて競争するも一籌を異邦の人に輸せざるの覺悟なかるべからず。

第二篇 家庭の實務

家庭の本義を明にし、家庭の存立に必須なる素因を詳にしたる後にありては家庭の支持を圖り、之が繁榮策を講ぜざるべからず。茲に於てか家庭の物質的生命を保續する道を研究し、之に關する規準原則を了知せんと努めざるべからず、而して家庭の物質的生命に就きて完全なる保持存續を實現せんとあらば專ら衣食住の經濟的解決に據ること肝要なりとす。然るに従來世に稱へらるる所の衣食住とは衣を重んじ食と住とは之に次げるとの意に基づくに非ざるべし、蓋し吾人の生命が食物の攝取に據るは根本的にして青天井生活は人生の始原期に於て永きに亘れり、被覆を用ふるが如きは遙に遅れて現はれたる事實なり。されば家庭の實務を講究するに當りては食物を先にし、次いで住宅衣服に及ぶに理由あり、而も家事科に於ては食物を始めとし、順次に衣服住宅を説くこと便なりと考ふ。

第一章 食物

人は生る爲に食ひ、食ふ爲に生るものに非ず、而も一定の規準に則りて食はざれば生命を完うすること能はず、營養の原則を辨へ、食物の利害を悟りて所謂生る爲の食なる意義を闡明にすること極めて適切なりとす。

生活體は「エネルギー」即ち活力が間斷なく實現するの府なり。活力の發動は原形質内に起る化學作用に據るものにして酸化を以て根柢と爲す。酸素は外界より入りて原形質を燃焼し、酸化作用は實に生活力の本源たり。酸素は呼吸に依りて原形質内に收受せられ、原形質に對する酸素の作用は呼吸作用と稱せらる、然るに此の酸化作用は原形質を破壊消耗して滓渣の生出を見、之を除去すべく排泄は行はるるなり。而して消耗に消耗を重ねんか、原形質は遂に全滅すべきを以て自體を保続せんには外界より特殊の物質即ち食物を攝取せざるべからず。食物は消化作用の下に適宜の變化を受けて原形質に吸収せられて新原形質を製造すべく同化せらるるなり。

生活體

① 食物の種類

斯の如くにして原形質は自營養して生命の持續保全を完了せるが、原形質の破壊は新しき營造物に對し密切なる關係を有するを以て前掲の各種機能を總括して營養機能とは稱するなり。従つて營養機能は生體と外界との間に行はるる各種物資の交換を按排する機能なりと云ふを得べし。

食物の種類 食物は消化機に入りたる後、身體の組織を補修するに必要なる素質并に體温の發生に缺くべからざる材料又は發育の完からざる體軀の成長に充つべき物質を供給するものにして其の根本的性質は血液を組織する要素の少なくも一と同様なるにありて消化の結果、此等要素の一たるに臻るべし。物理的狀態に依りて固體食物と液體食物とに分たれ、本原に基づきて礦物性植物性動物性に分たる。

此等食物の成分は極めて複雑なるも、化學上の見地より類似蛋白質、炭水化物及び脂肪の原質的三級に類別せらる。甲者は蛋白質、albumineを始とし、筋肉質(myosine)、乾酪質(caseine)、纖維質(fibrine)、骨角質(ossine)、軟骨質(chondrine)等の動物性素質以外に植物性の蕪質(glaten)、レギミン(legumine)等を含括して炭素、

蛋白質

炭水化物

窒素、水素及び酸素の四元素并に少量の硫黄燐素及び礦物質鹽類等を含めるが、食物中にて最も重要視せらるる所以のものは原形質と成分を同じうするにありて他の食物の代用を許さざるに基づけり、而して本級の食物は酸性状態にあるときは胃液のペプシン (pepsine) 即ち胃液素に依り、中性若しくは亞爾加里性なるときは脾液のトリプシン (trypsin) 即ち脾液酸酵素に依りて消化せられて熱若しくは酸類の爲に硬化することなき液體蛋白質たるペプトン (peptons) と成るなり。乙者は澱粉糖分等を包括して炭酸、水素及び酸素を含む、澱粉は主として植物中に存するも、グリセロール (glycerol) 即ち肝液素の如きは動物性に屬するが、唾液及び脾液は會して葡萄糖に化す、糖質食物の葡萄糖 (glucose) 及びレブローース (levulose) は消化作用を経ずして直に同化せらるるが、「サッカロース」(saccharose) 即ち蔗糖は腸液のインブエチン (invertine) に依りて消化せられて、グリッコース及びレブローースに變質するに非ざれば同化せらるることなし。丙者は油脂、バター等を包括して炭素及び水素と少量の酸素とを含めるが、リスリン (glycerine) と或脂肪酸との化合物にして主要なるものを、オレイ

脂肪

ン (oleine)、ステアリン (stearine)、マルガリン (margarine) とす、脾液の働きを受くるや、一部は石鹼化せられて脂肪酸とリスリンとに分解せらるるも、一部は乳化化するに止まれり、乳劑とは乳汁が微細なる乳滴より成れるが如く、油質が微細なる油滴と成りて包容液の中に存在するにありて單純なる物理的狀態を呈するに止まり、何等化學的作用の加はりしに非ず、從つて脂肪の一部は眞の消化を受けざるものと知るべし。甲者に四素的食物、窒素含有物の稱あるに對し、殘餘の二者は三素的食物、無窒素物と呼ばる。又此等の原質を悉く含有する食物を完全食物と唱ふるも、現に實在するものは乳及卵に限られ、前者の一〇〇〇瓦は後者の五〇瓦に匹敵せり、從つて食物の多くは不完全にして一種若しくは二種を包有するに過ぎず。

礦物性食物

廣義に依れる食物には酸素の加はるべきこと勿論なるが、礦物性食物 即ち水食鹽其の他の鹽類は吾人の身體に對し極めて肝要なるに拘らず、消化機關を通過するに當り、何等の變化を受けず、其の儘吸收せらるるを常とす。水は身體の組織に對して重要なるのみならず、滋養質を溶解して吸収を

水

容易ならしめ、又有害無益なる老廢物を體外に排泄する等其の效力極めて緊要なるものなり。

水は身體の構成に必要な原質にして總量の五分の四以上に達せり。水は身體に必要な礦物質を溶解して之を適處に誘送す。水は胃液を始とし其の他の消化液に分泌を促す。水は消化機關の内面に對し洗滌的作用を加ふ。水は食物に混じて之が流動に便し、一部を溶解して吸収を容易ならしむると共に迅速ならしむ。水は蒸發呼吸及び尿道に依りて失ふ所の水分を償還す。

鹽類

食鹽

鹽類は營養上必要缺くべからざるものにして亞爾加里は細胞質の要素を爲すのみならず、マグネシウムと共に專、骨の構造に資し、鐵鹽は、ヘモグロビンの製造に與れるが、此等の鹽類は概、食物中に含有せらるるを以て特に食物に添加するの要なしと雖、獨、食鹽のみは殊に攝取せざるべからず、而も食鹽の要求日量は二瓦を以て足れりとするも、調味品として慾望せらるるが爲、通常大人の食鹽攝取日量は平均十七瓦に達すと云ふ。

食鹽に生活作用を刺戟する效力の著しきは心麻痺の虞ある際に食鹽の溶液を注射するにて、知らるるなり。殊に植物性食物を攝用する場合には食鹽の之に伴ふを必要とす。蓋し

植物性食物は常に酒石酸ポタシウム等を含有するが故に體內に入るや、酒石酸は酸化して炭酸と成り、炭酸ポタシウムと變じ、更に血液中の食鹽に接して炭酸ソーダポタシウム及鹽化ポタシウムとな生ずるも、不用物として排泄せらるるの結果、食鹽の幾分は減却せらるべきを以て、殊に食鹽を吸収し置きて之が補充に備へざるべからず。

食物視せらるる物質にして腸胃を通過する際に變化の極めて少なきあり、或は何等の變化を受くることなく排除せらるるあり、連絡的彈力的の纖維質の如き物質は殊に植物性食物に多くして消化液に抵抗する纖維膜の爲に滋養素の包まらるるに因るものとす、而も燃焼を調節して發動の増減に干與するに止まらず、熱の力化を助長する上に有效なる珈琲茶、カカオ等に助熱食物又は非消耗食物の名を附するなり。此の種の食物に攝取上留意すべきものある次第は推知するに難からざるべし。

蛋白質及び鹽類は身體の發育維持に必要なが故に構成的營養物と呼ばれ、炭水化物及び脂肪は活力并に體温を生ずるものにして機能的營養物又は熱量的營養物と唱へらるるが、リビグ (Lipids) は身體の組織を新にすべき

刺戟食物

造形的食物と體温を發生する呼吸的食物との別を設けたり。而も斯の如き區別は絶對なること能はずして窒素的食物即ちリビグの所謂造形的食物は體温と精力との二者を生じ、呼吸的食物も亦組織の營養に當れり。

俗間に行はるる所に從へば消化の難易に基づきて輕食物と重食物とに分たるるが、前者は容易に消化し得るものにして後者は消化の遅くして困難なるものを云ふなり。一而も調理に俟つこと多く難易は一定せざるなり。

食物の變遷。吾人の生存に必要な食物が始原時代にありては自然的事情乃至共有的事情の爲に左右せられて全然採取獵獲漁得の結果に俟ちしこと、明にして草根木實を主として山間谿谷の地に於ては野獸野禽の肉を交え、海濱河岸の土に於ては貝類魚類を加へたるも生食せしを以て芽食、根食、果食、蟲食、貝食、魚食、鳥食、獸食等の各派を出だし、生存状態の如きは殆ど禽獸と選ぶ所なかりき。而も文化の進むに及びては助成的事情は徐に發展して生産は地方に依りて趣を異にし、體質氣性は特殊の状態を呈するに臻りたるも、依然として氣候風土の影響を蒙ること著しく、寒國の大食熱國

輕食物と重食物

食物の變遷

の寡食の外に漂遊者は乳汁、バター、チーズを用ひて乳食派と成り、定住者は麥類、玉蜀黍、粟、稗、黍等を用ひて穀食派を爲せしが、ナツメヤシ、パンノキ、タロ、バナナ等、等に據れるものも存せしなり、孰も火食を行ひて煮焼は漸く進展して調味の術は發達し、飲酒の樂も現はれたり。斯の如くにして營養が漸次に改善せられて舊時の食物の廢棄せられたるは職として食物に對する努力熱心の致す所と斷ぜざるを得ざるなり。而も積成的事情の大に加はりたるが爲、食物の發展に關する程度趨勢は一樣なること能はず。宗教の干渉に著しきものありて耶教が肉食に寛なるに比し、佛教は鳥獸肉の食用を嫌忌すること甚しく、各種の迷信は食物に對する愛憎を逞しうせり。流行も亦食物に影響すること頗る顯著にして下劣なるものを排除するに功ありしに相違なきも、養價の存否を闡明するに違わらずして猥に新種を採擇するの罪なしと云ふべからず。調理の方法に大なる進歩ありて食物の利用に見るべきもの多く、粗食は一躍して精食に化せしは咎むべきに非ざるも、旨味を過重するの結果、養分の損失を意に介せずして主客の轉倒を誘致するが